

発表集





目 次

| ご あ い さ つ 審査委員長・奈良大学学長 清水 哲郎 | 4 |
|---|----|
| 審査結果の講評 | 5 |
| 審査結果 優秀賞 | 6 |
| 審査結果 佳作 | 7 |
| 優秀賞受賞レポート(高等学校等コード順に掲載、敬称略) 神奈川県・関東学院高等学校 研 究 者 名:歴史研究部 土野英一郎 研究タイトル:キリシタン信仰と地域コミュニティー 〜長崎県外海・平戸地区を中心に〜 | 11 |
| 静岡県立三島北高等学校 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ | 21 |
| 福岡県立修猷館高等学校 研究者名:谷口生貴斗 研究タイトル:小地名「ホノケ」の研究 ~福岡県糸島市王丸集落~ | 37 |
| 長崎県立壱岐高等学校 | 53 |
| 鹿児島県立種子島中央高等学校 | 69 |
| 佳作ポスター (高等学校等コード順に掲載、敬称略) | 85 |
| 第13回全国高校生歴史フォーラム 応募タイトル一覧 ···································· | 93 |

ごあいさつ

審查委員長・奈良大学学長 清 水 哲 郎

日本で最初の都が築かれ、古代日本の中心として栄えた奈良には、今も豊かな自然と歴史遺産・伝統文化が息づいています。奈良という恵まれた学修環境を背景に、本学では、喧騒とした都会では決して味わえない、ゆっくりした時間の流れの中で豊かな大学生活を過ごすことができます。この地に奈良大学が誕生したのは1969年のこと、今年創立50周年を迎えました。50周年を記念して新棟「令和館」が10月に竣工しました。1階には、主体的・能動的学習を推進するアクティブ・ラーニングゾーンが、また2階のエントランスホールには奈良大らしく、等身大の四天王像が来館者をお出迎えします。2階にはさらに、大学開放・社会貢献のシンボルとして200人収容の講義室があります。

本学には、現在文学部(国文学科・史学科・地理学科・文化財学科)と社会学部(心理学科・総合社会学科)、さらに大学院(文学研究科・社会学研究科)および通信教育部が置かれており、学生数は約3600人、全国各地から多くの学生を迎えています。図書館には55万冊以上の蔵書があり、15万冊を超える文化財専門書がそろっており、朝日新聞出版『大学ランキング2019』の図書館部門で本学図書館が全国第1位になりました。本学図書館は日本屈指の歴史・文化財情報に関する知の拠点として国内外から注目されています。

さて、今から12年前の2007年に、奈良大学は、多くの生徒にとっては「暗記科目」という 印象が強い歴史や地理に、暗記ではなく、自分たちで調べ、考え、真実を発見するなど、課 題の発見・解決に向けた主体的・協働的な学びを導入することで、歴史や地理を探究する醍 醐味を実感してほしいとの願いから「全国高校生歴史フォーラム」を企画・開催しました。 幸い私達の思いは、全国の高校生と、生徒の皆さまを指導しておられる先生方に届いて、準 備期間や周知が十分でなかったにもかかわらず全国の22校から72編の応募がありました。

その後、応募校数は過去13年間の平均では、参加校が44校、また応募点数では111編となっております。今年度の状況は、参加校が54校、応募点数が143編を数え、昨年より大幅に増加しております。審査委員会による厳正なる審査の結果、全国から選び抜かれた優秀賞に5編が、また佳作として7編が選ばれました。

最後になりますが、全国高校生歴史フォーラムの開催にあたり、ご尽力を賜りました皆さまに心から感謝申し上げるとともに、ご指導にあたられた先生方と熱心に研究して応募された高校生の皆さまに、お礼の言葉を申しあげます。選考の経緯と結果につきましては、講評をご参照ください。

審査結果の講評

「全国高校生歴史フォーラム」は、全国各地の54校から143編の応募をいただきました。 ご応募いただきました皆さまには御礼申し上げます。

応募のあった高校を地域別にみると、関東・甲信越、九州からの応募校数が多かったといえます。分野は、これまでと同様に文献史学、考古学、地理学、文学、民俗学など多彩な研究成果となっています。テーマはさまざまですが、最終選考の段階では、各地の鉄道や災害に関する史的研究の数がやや目立ちました。近年、このフォーラムで優秀賞に選ばれた研究成果が牽引となっているのでしょうか。戦争史料を解き明かした研究は、これまでに比べて減少気味になりましたが、一定数の応募がありました。

毎回、団体応募と個人応募がみられます。団体応募は、膨大なデータの収集や解析、そして整理の点では優位に立ち、厚みのある研究成果が生まれやすい傾向にあります。また、個人応募は、研究の目的や方法、解き明かしていく筋道とそれによって導かれた結果に、地道でひたむきな姿勢と信念が垣間見られ、一連の研究の深さを読み取ることができます。審査の場では、高校生らしい着想を出発として、これらのことが前面に出ている研究が高い評価を受けて、優秀賞・佳作に選ばれたといえます。この傾向は過去から変わっていませんが、今回は段階的な審査の場において個人応募の研究が良い評価を受けていました。ただし、個人応募の研究は、高い評価と低い評価の二極分化が激しいといえるでしょう。

少々残念なことは、応募規定に沿わない研究成果がみられたことです。研究内容は良さそうなのですが、字数超過による体裁の問題、応募用紙に記載されているテーマと本紙に記載されているテーマの不一致、応募者と指導の先生の間での疎通の問題など、実行委員会受付時や審査委員会の場で混乱することがありました。制限枠のなかで、完成度の高い成果を披露してこそ、真の成果が発揮できていることになります。

添付資料の内容は全体として水準が高くなってきているようです。史料、図、表、写真、 地図一つ一つが本文を裏付けていく重要な要素になっています。研究の深みがあれば紙数制 限のなかでそれを厳選せねばならず、そのような努力が滲み出ている研究は高い評価につな がります。根拠資料による裏付けは侮れません。一方では、本文と同様に、インターネット 情報とみられる写真や図表もみられます。ただ、出典を記せば良い、という姿勢ではなく、 応募者の本文の意図に合った意味のあるオリジナルの写真を掲載する必要があります。

寄せられた研究成果から、例年通り優秀賞 5 編を選びました。フォーラム当日、そのなかから「学長賞」・「知事賞」を選ぶとともに、本学が創立50周年となる節目に際し、「奈良大学創立50周年記念特別賞」を設け、選びます。口頭発表を審査員一同、心より楽しみにしております。また、佳作7編は、ポスター発表という形式で応募者のご希望により参加していただくことにしましたので、その成果は会場入り口付近に並びます。すでに実行委員会にはポスターの原稿が届いており、良い体裁のものばかりです。期待が高まります。

優秀賞

(高等学校等コード順に掲載、敬称略)



神奈川県・関東学院高等学校

研 究 者 名:歷史研究部 土野英一郎

研究タイトル:キリシタン信仰と地域コミュニティー

~長崎県外海・平戸地区を中心に~

静岡県立三島北高等学校

研 究 者 名: 郷土研究部 萩本大翔

研究タイトル:三島停車場誕生までの歴史

〜鉄道誘致運動の全貌を探る〜

福岡県立修猷館高等学校

研 究 者 名:谷口生貴斗

研究タイトル:小地名「ホノケ」の研究

~福岡県糸島市王丸集落~

, W.

長崎県立壱岐高等学校

研究グループ名: 東アジア歴史・中国語コース歴史学専攻2年生

研 究 者 名: 大多和泰熙・亀井琢磨・清川智希・筑後裕哉

平田太輝・松尾泰地・村上直哉・本田あかり

研究タイトル:未解明の古墳時代の集落に迫る

~壱岐・車出遺跡とその遺物から見た巨石古墳との関係~



鹿児島県立種子島中央高等学校

研 究 者 名:鎌田廉正

研究タイトル:明治期の種子島における異文化交流

―ドラメルタン号漂着事件を中心に―

佳 作

(高等学校等コード順に掲載、敬称略)



栃木県立学悠館高等学校

研 究 者 名:歴史研究部 櫻井聖人・関口 薫

研究タイトル:享保期幕府代官 池田喜八郎による忘れられた水利改良



千葉県・市原中央高等学校

研究グループ名: 歴史研究部

研 究 者 名:松尾優沙(研究代表者)・土橋吏奈・佐藤恒希・熊谷優太

髙山遼太郎・木全雄一郎・水野萌衣・中村勇斗・八巻美月

研究タイトル:「和戦一如」の地、東金城

~本土決戦の要と「文化の礎」



神奈川県·武相高等学校

研 究 者 名:平形康貴

研究タイトル:文化を運んだ軍用鉄道

~横須賀線が運んだのは"もの"だけではなかった~



神奈川県・立花学園高等学校

研 究 者 名:池上要太

研究タイトル:相模鉄道と神中鉄道の大山ケーブルカー敷設計画

~大山をめぐる様々な思惑と2人の社長~



岐阜県立関高等学校

研究グループ名:地域研究部

研 究 者 名:江崎晃定・梅田拓海・片桐昴大・辻 龍成・岡本優奈・土田真菜

石原伶緒・吉川奎騎

研究タイトル: 撫順東方における歴史観光構想とその挫折

~まぼろしに終わった歴史ツーリズムを読み解く~



京都府立鴨沂高等学校

研 究 者 名: 西野 桜

研究タイトル:近世筝曲とキリシタン音楽

八橋検校の《六段》とラテン語聖歌《クレド》の関わり



大分県・大分東明高等学校

研究グループ名:郷土史研究部

研 究 者 名:佐田昴駿・岡田莉子・岩男 優

研究タイトル:高島海洋少年共和園

一無人島に強制収容された戦争孤児たち―

優秀賞研究レポート

(高等学校等コード順に掲載)





キリシタン信仰と地域コミュニティー ~長崎県外海・平戸地区を中心に~

【研究者】

 関東学院高等学校歴史研究部

 第3学年

 土野英一郎





1、はじめに

私たちの通う関東学院高等学校はミッションスクールで、聖書の授業が毎週ある。そこでキリスト教が日本に伝えられると共に厳しい弾圧に遭い、信仰を守り抜いた人がいたことを学んできた。そこから命の尊さを説く「宗教」に対して「命をかけて信仰を守り抜く」ということは矛盾しないのだろうかという疑問を抱くようになった。この疑問を出発点に、信仰に命をかける人々はどのような宗教観を形成し、原動力にしていたのか、そして、その信仰を守るために地域社会とどのような関係を構築したのかということを考えたいと思った。

そこで、潜伏キリシタン(1)の人々を「生活」という観点から深く知るために長崎県外海地区(2)と平戸地区を選び、実地調査を含めて調べることにした。外海地区は、『沈黙』(遠藤周作著)の舞台となった場所で禁教期に厳しい弾圧が加えられたことでも有名な地である。一方の平戸は、フランシスコ・ザビエルが1549年鹿児島に上陸した後、活動を進めた拠点である。この2つの場所はキリスト教にとても縁が深い土地であり、信徒の人々の生活を垣間見ることができるのである。

2、外海地区の潜伏キリシタン

外海地区でキリシタン信仰が発展した理由を地理的観点と政治的観点という2つの 観点から考察したい。

まず、地理的観点であるが、外海地区は海が山に迫るような土地で交通の便が非常に悪く、「陸の孤島」とも呼ばれてきた。そのため平戸藩の監視も行き届きにくい場所であった。また、米などの農産物に恵まれない貧しい土地であったため(3)、生活の貧しさから物質的なものではなく精神的なものに価値を見出し、キリシタン信仰を強くしたと言われる。さらに、陸路では非常にいきにくい場所ではあるが海路では容易に行くことが可能であったため、潜伏前に外国人宣教師のサン・ジワンが外海地域の潜伏キリシタン信仰の指導者として活躍し、日本人宣教師のバスチャンを育てた。そういったこともあり、外海地域のキリシタン信仰が弾圧されながらも発展した(4)

次に、政治的観点である。平戸藩領の外海地区の中に佐賀藩の飛び地が存在していた。この2つの藩は潜伏キリシタンに対する姿勢が異なっていた。佐賀藩はキリスト教に寛容であったので佐賀藩の飛び地領内では村役人を除く全員が潜伏キリシタンであったのに対し平戸藩は厳格であったため信徒と非信徒が混在していたのである。とは言え、どちらも信教の自由が認められているわけではないので彼ら潜伏キリシタンたちは曹洞宗天福寺の信徒を装ったのである(5)。

しかし、佐賀藩の飛び地領内は全員潜伏キリシタンならば地域内でわざわざ隠したりする必要はないのではないかという疑問が生じるが、藩の役人や庄屋の人は、キリスト教徒ではないため、形式上、隠すことを選択したのである。現地で長年研究されている松川隆治氏(6)に聞き取りを行うと、藩の役人も気づいていたのではないだろうかということだった。では、なぜ、藩は積極的に手入れをしなかったのだろうか。その理由として3点が考え得る。1つ目は経済的理由が挙げられる。村落内に一定数

いるキリシタンが摘発されてしまえば、藩は年貢の収入が減ってしまうためである。 2つ目は、農作業に影響が出るからだ。村落コミュニティーの中の一定数を占めるキリシタンがいなくなれば農作業が成り立たなくなる。 3つ目は、キリシタンがいると幕府に知られれば取締りの不徹底を指摘され藩が取り潰しになる恐れがあるからだと考えた。だから、藩もわざわざ摘発や手入れはしなかったということが分かった。そのため、形式上と実体上の幕府、藩、信徒および、村落の関係は一致しなかったと大橋幸泰氏は指摘しているのである(7)。

外海地域の潜伏キリシタンの人々は村人としての生活だけでなく信仰者としての生 活もしなければならない。ルイス・フロイスの1592年10月1日付年報(゜)は、当時 のキリシタンの姿について記録をしている。スペイン語やポルトガル語で書かれた祈 祷文が日本語に訛り、「オラショ」という口承が生み出された。役人に手入れをされ ても口承であるので証拠として見つからないようになっていた。内容は原意とは異な っていた。歌の「オラショ」も存在しており、皆川達夫氏はグレゴリオ聖歌に由来 していたことを指摘する(°)。また、潜伏キリシタンたちが宣教師の持ち込んだ 『どぢりなきりしたん』が、宣教師が国外追放された後、内容は彼ら自身では理解が 困難であったため、分かりやすくなるよう『天地始之事』というものを作ったのであ る。写本は10本あり、外海地区や五島列島から発見された。これは潜伏キリシタンた ちが自らの手によって書き残した例外的なものであり、最も古いものは1821年のもの であるといわれる。この天地始之事の内容としては、旧約聖書(特に創世記)や「ロ ザリオの十五玄義図」(マリアの物語)が題材になり、そこに宣教師などがいないた め潜伏キリシタンの人々の自由な民俗的想像力がオラショには駆使され、民間に流布 している民話も織り交ぜられて書かれている。潜伏キリシタンにとっての「教典」の ような存在となった。

さらに、バスチャン暦 (10) と呼ばれるものを作り、クリスマスやレント(灰の水曜日)といったカトリックの行事を模倣し、外海地域特有の行事を作っていたこともわかる (11)。 この暦を作ったのがバスチャンという日本人宣教師であると言われているが徳川家光の時代に外海地方にてジワン神父がいなくなってからも積極的に伝道を続けた。

このように、信徒たちの生活は『天地始之事』によって聖地と呼ばれる場所を含めた「空間」を定義し、日繰りと呼ばれる暦で「時間軸」を定義し、オラショによって「信仰の完結と共同体への帰属」を定義したのである。

日本から外国人宣教師がいなくなったため、潜伏の人々はヨーロッパの信徒信心組織(コンフラリア)(12)を手本に"こんふらりあ"を構成し、共同体として活動をした。その具体的な役職は、「帳方」「水方」「触役」といったものである。帳方は、総括的指導者、すなわち法事、葬儀や洗礼といった儀式の執行や「差し合いの日」と呼ばれる凶日を知らせるという役目または役割である。水方は洗礼を助け、触役は、水方と一緒に洗礼の助手をすることに加え、「差し合いの日」を信者に連絡する。村の行事は太陰暦に基づいて行われるが、潜伏の人々の宗教上の行事は太陽暦から作られたバスチャン暦に基づいており、時間的なずれが生まれてしまうので、信者に連絡

をする人が必要となる。このように役割を信者内で明確化することで、より存続や保護が可能な共同体を作ろうとしていたことわかる。

3、平戸地区における地域共同体と信仰組織

平戸地域でも外国人宣教師が国外退去されたことで司祭をはじめとする聖職者がいなくなってしまったため、司祭の仕事を代わりにする「慈悲役者(慈悲の役)」を設け、信徒信心組織の運営をした(13)。日曜日に教会堂に信徒を集める日常的な仕事から死者の埋葬といった宗教者としての仕事、社会的弱者への慈善活動まで多岐にわたって活動をしていた。さらに、世俗的な業務も担っており、「老人」や「惣代」と近い存在であった(14)。 つまり、地域社会においても重要な役割を果たしていたのである(15)。

元隠れキリシタンの瀧山直視氏および平戸城資料館館長の浦部知之氏からの聞き取りによると、平戸の根獅子地区には例外的に「看坊」(¹⁶)と呼ばれる役職があったそうである。この仕事の内容は慈悲役者と同じで担当する地域を分担していた。ただし、決定的に違う点は元僧侶が務めるという点である(¹⁷)。また、慈悲役者は一般的には任命ではなく共同体の構成員によって選出されていた(¹⁸)。

元隠れキリシタンの瀧山直視氏および浦部知之氏にも伺ったところ、近所で集まって役人にはわからないようにお祈りなどもしていて、かつて瀧山家がお祈りのために行っていた辻家は近隣が役人の家であったそうだ。江戸時代には、おそらく役人も気づいていたのではなかいか。しかし、摘発しなかったのである。つまり、藩にとっても利点が少ない上に、役人と信徒の間に信頼関係があったことが推測できる。

平戸の場合、民主的に選出されることが一般的ということもあり、集落の大部分がキリシタンのために集落組織との一体化が想定できる。また、ヨーロッパのコンフラリアの概念を日本に受容したが、幕府や藩などの外的影響を受け変質したことや、信徒同士で相互扶助をしていたということがわかる。迫害に対して相互扶助の側面を強調するのはベトナム王朝や中国、朝鮮半島などには存在しない(19)日本独特の組織形態であるという(20)。 そして、慈悲役者は宗教の役職という一面だけでなく地域の構成員として重要な役割を担うため複数の属性を持っていること。言い換えれば、村落共同体(村社会)のリーダーと信仰共同体のリーダーは非常に似た役割を持っているのである(21)。

ちなみに豊後では、キリシタン禁制の徹底や五人組制が強固に整備され幕府の農民支配が強められるにつれてキリシタン地区では、"こんふらりあ"の組頭が村方の長百姓などを兼ねることが多くなった。村方役職者と"こんふらりあ"の役職者が重なった場合、書類上の「ころび」(22)になることで、5人組による相互監視や宗門改から互いに信仰を秘匿することができるようになったのである。また、仮にキリスト教を「ころぶ」と申告した地方の指導者が、キリスト教の共同体の指導をすることは十分可能だったことが知られている。幕府としてもそういったことは看過できないが、地方行政の組織において有力な人物を選出しなければ統治することは不可能に近いため、そうせざるを得ないという状況なのである。

4、結びにかえて-キリスト教信仰と祖先崇拝

潜伏キリシタンの人々は地域社会と対立するイメージがあったが、実際には、安穏な生活が維持されていれば、生活共同体の一部としてあえて波風を立てず世俗、秩序にも従順であり、平戸地区外海地区においても地域社会と平和的な共存をしていたということがわかった。

それでは、潜伏の人々はいったい何を原動力に踏絵、五人組、訴人褒賞制などといった様々な厳しい弾圧に耐えながら230年近く後世に信仰を伝えようとしたのか。「天地始之事」や「オラショ」の変容、「ころび」から指導者となりキリスト教の共同体を指導したこと、明治期以降も一部の人たちが隠れキリシタン(23)として今までの信仰を守ってきたことを考えた時、潜伏キリシタンにとっての信仰は本来のキリスト教信仰というよりも先祖から受け継いできた伝統やしきたりを守っていくという要素が強かったと言える。先祖を敬うという気持ちがキリスト教を絶やすことなく受け継いできた原動力となり、弾圧にも耐える力となったのである。つまり、本来の「キリスト教」信仰に加え、その根底に「祖先崇拝」があったと言える。だからこそ、潜伏の人々は「祖先信仰」から、祖先から受け継いだ大切な教えなので後世に受け継がなければならないという意識が生まれ、踏絵も踏んでも、弾圧にも忍耐ができたのではないだろうか。それゆえに、百姓を中心にした地域共同体の中で共有できたと考える。

最後に、外海地区や平戸地区に実際に足を運び、隠れキリシタンの方々にお話を伺ったところ、世界遺産に登録はされたものの、現在、その多くが過疎化や高齢化、後継者不足、生活様式の変化や多様化から、隠れキリシタンを続けることが難しいという現実がある。バスチャン暦によって年中行事が規定されることや"こんふらりあ"や慈悲役者や看坊をはじめとする独自の共同体の形成に見られるように、祖先信仰に基づいて、世代を超えて継承されてきた地域の伝統または、信仰を含めた地域文化を失ってしまう危機に直面している。外海、平戸地区におけるこのような地域文化は、祖先信仰に基づいて伝承され、信仰形態が変容しつつも地域の「個性」として地区に根付いてきた。

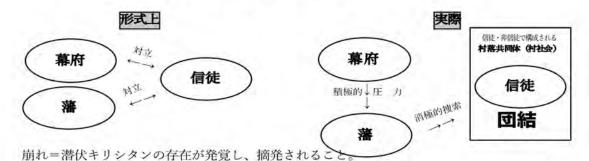
もし、これらを失ってしまえば、地域の特徴を失うことになってしまうのではないか。言い換えれば、社会が均一化されてしまうことにもつながるのではないだろうか。 世界遺産に登録されたことで、以前よりも潜伏キリシタンの「存在」に注目される 機会が増えた。しかし、彼らの「姿」に焦点をあて、文献や実地調査を通して同じ目 線で見つめることで彼らの心に内在するものを考え、新たな側面が見えてきた。

- (¹) 潜伏キリシタン:1644年国内で最後の宣教師が殉教 ~ 1873 年禁教高札の撤廃までの キリスト教信者の名称。;隠れキリシタンやキリシタンとは区別 をする。
- (2)【外海地区周辺 等高線図】



- (3) 「明治初年ごろまで住家が概して練塀をもって造作し、ほとんど雨の備えがなく、 畳の如きも板をもって代用する者も多く、住家は概して小なるを常とせり、職業 は、住戸より半農半漁にして能く粗食に耐え、衣服等もいたって粗難なるものを 用いたり・・・芋・切芋等を常食とする者も少なからず・・・」
 - < 松川 隆治 大石 一久 小林 義孝『天地始まりの聖地長崎外海に潜伏・かくれキリシタンの世界』 / 西彼杵郡黒崎村郷土誌 / 批評社 /2018-05-10/26 頁 >
- (4) 松川隆治 大石一久 小林義孝『天地始まりの聖地 長崎外海の潜伏・かくれキリシタンの世界』/批評社/2018-05-10/35頁
- (5) (4) に同じ
- (6) 枯松神社保存会会長・外海潜伏キリシタン文化資料館館長・長崎外海キリシタン 研究会代表
- (7) 大橋幸泰「近世日本潜伏キリシタンの信仰共同体と生活共同体」 / 『地中海研究所紀要』第4号/114頁

【潜伏キリシタンを取り巻く関係図 (平戸藩・佐賀藩・島原藩)】



長崎奉行が積極的に手入れ (捜索) の指示をだした。

→藩の役人が手入れ(捜索)を行うのではなく幕府(将軍)の支配下の役人が 積極的に行った。

<大橋幸泰「近世日本潜伏キリシタンの信仰共同体と生活共同体」/『地中海研究所紀要第 4 号』114 頁を基に土野作成>

(8) 「奉教人たちは迫害いよいよ進みしに拘わず、各地においてその勇気を保持したり。そのため彼らは一種の組合を作り、毎日曜日に信者たち団体またはあちこちの家に集まり、アニマ(霊魂)のために勤め、数時間を費せり、即ちスピリッアルの書を読み、また語り、一斉にオラショをなし、キリシタン宗門のため、またパーデレ[*1]などの聖教恢復のためデウスに祈り、主なる祝日を祝い、またクアレズマの金曜日には身を苛めて、聖週の日には血を流すに及べり。それらの暦日はよく心に止めたり。暦は既に日本語にて印刷せられてありたり。都にはこれらの組合七、八つあり。

婦女子たちも亦男子とは別に集会し、またかかる方法にて信仰を保ちたり。而してこの勤行をよくするため、御主デウスは各地に熱心なる奉教人を作りたまえり。彼らはこの組合の頭として他の奉教人たちの尊敬と愛とを受けたり。彼らのうち、ある者は才能ありて説教し、また『どちりなきりしたん』を教へたり。唯信徒を助けるためならず、またこの説教を聴き、その回答を習いて新に宗

門に入るもの年に甚だ多し。」

< 川 村 信 三 /1592 年 10 月 1 日 付 イ エ ズ ス 会 日 本 年 報 / 『 キ リ シ タ ン 信 仰 組 織

の誕生と変容』/教文館/2003-09-20>

暦は既に日本語にて印刷せられてありたり。:バスチャン暦のこと

[*1] 【パードレ】〈ラテン語・padre〉:①《原義》父 ②神父 ◎「バテレ」「バテレン(伴天連)」の由来。上記の史料の時代はキリスト教布教当初のものなので神父は追放されずにまだ日本にいた。

- (⁹) 皆川達夫「隠れキリシタンの祈り(オラショ)とヨーロッパの聖歌」/ 『川並総合研究所論叢』/242頁-255頁
- (10) 外海地域では「御帳」とも呼ぶ。
- (11) 生月地方のバスチャン暦

< カトリック>

< 創作の行事 >

(注:11)を参照

灰の水曜日(灰の水曜日)

悲しみの入り / 春の入り

クリスマス

御誕生/霜月のお祝

クリスマスイブ

御産待ち

< 松川隆治 大石一久 小林義孝 長崎・外海キリシタン研究会編『天地始まりの聖地 長崎外海に潜伏・かくれキリシタンの世界』/批評社 /2018-05-10 62 頁参考に土野作成 >

- (12) 信徒信心組織[コンフラリア]:信者の自発的で自主独立運営からなるヨーロッパが起源の組織。;信者の最小集合単位
- (13) 川村信三/『キリシタン組織変容の誕生と変容』/教文館/2003-09-20
- (14) 【慈悲役者の仕事1】

平戸から追放されたとき、〔初代教会の〕七人の執事にちなんで、司祭の代役をする七名を選んだ。日曜毎に教会堂に全キリスト教徒をあつめるよう務めることと、死者の埋葬をすることが彼らの主な任務であった。私はその七名に「慈悲役」という名をあたえた。それは「慈悲の業」の兄弟という意味である。この習慣は(平戸において)キリスト教徒のいるすべての地域に導入した。毎年、七名の慈悲役が改選された。皆非常に熱意に燃えており、七名のなかから二名が当番とな

り、二カ月交代の任務についた。慈悲役は毎年交代した。その(当番にあったものの)主たる任務は、祝日と日曜に会堂を掃除し、樹木で飾り、キリスト者の集会の準備をし、教会において、罪に陥った人に訓戒を与えることである。誰かが亡くなれば、慈悲役はすぐに司祭に[*1]知らせる義務をもった。そして彼ら自身は墓穴を掘り、死者の埋葬を手伝う。

信徒の間に仲違いがあれば仲裁役を果たす。

<松田毅一 川崎桃太訳『ルイス・フロイス「日本史」第六巻』/中央公論社/ 1979 >

【慈悲役者の仕事2】

その日の午後(十字架発見の祝日、すなわち 5 月 3 日)、 彼らはミゼリコルヂアの慈悲役(majordomos)を選出した。この役は、貧困者や病人を訪問し、極貧者に集めた寄付金を分ける。罪に陥った人々を論すのも彼らである。罪人を見出したなら、司祭がその人を助け導くことができるよう、司祭に[*2]報告しなければならない。また、臨終の床にある人のそばにつきそう。死を迎えたものがいれば、全ての信徒を教会堂に集め、埋葬を手伝う。四人の慈悲役がいる。その一人が頭である。

< 川村信三 / ファン・フェルナンデスのインドと中国にいるイエズス会員 宛書簡 (平戸発) 1565年9月23日 / 『キリシタン組織、誕生と変容』/教文館/2003-09-20/124頁>

[*1・2] 司祭:この資料は布教当時の史料のため、まだ外国人の宣教師や 司祭は日本にいた。

(15) ◎平戸地区内の様子

【籠手田領の状況】

「彼らは非常に善良なキリシタンであり、彼らの教会に足を運び、同所に集まって説教のことや、彼らの言葉で書

かれた我が聖教と誠めに関する幾つかの事柄について話し、二人の重立ったキリシタンが司祭 (*1) の命により生まれる子供らに洗礼を授けている」

< 1559 年 10 月 5 日付フェルナンデスの書簡 松田監訳 / 「一平戸市の文化財 64-平戸と生月島の文化的景観保存調査報告書」 / 平戸市教育委員会 /

2009.05 · 334 頁 >

【春日・獅子・飯良の状況】

「教会には慈悲の組と組頭らや、特に教会の世話に当たり、教会を掃除して清め、 また修道士や来訪者をもてなす人々がいる」

< 1563 年 4 月 17 日付フェルナンデス書簡 松田監訳 / 「一平戸市の文化財 64一平戸と生月島の文化的景観 保存調査報告書」 / 平戸市教育委員会 / 2009-05/334 頁 >

(*1) 司祭:この資料は布教当時の史料のため、まだ外国人の宣教師や司祭 は日本にいた。

(16) もとは仏教用語で「仏教信者の世話をする者」の意。のちにこの仏教用語が教会 で用いられ一般的呼称として定着した。

- (17) 「一平戸市の文化財 64一平戸と生月島の文化的景観 保存調査報告書」/平戸市 教育委員会/2009-05/335 頁
- (18) 【慈悲役者の任務と選出について】

次にいかに選挙が行われるか。教会堂に多くの信徒が集合する。この人々は、この役職に任命される人の精神的な心構えを説教によって聞かされる。一同、聖霊への祈りをして、各人がふさわしい人物を選出できるように聖霊のとりなしを願う。その後、一人ずつが司祭のところに赴き、慈悲役としてふさわしいと思う人物の名を密かに告げる。司祭は多数者の中から4名を選んで慈悲役とする。

< 川村信三 / ファン・フェルナンデスのインドと中国にいるイエズス会員宛書 簡 (平戸発) 1565年9月23日 / 『キリシタン組織、誕生と変容』/教文館 /2003-09-20/124頁>

- (19) 浅見雅一『概説キリシタン史』/慶應義塾大学出版会/2016-04-23
- (20) 大橋幸泰「近世日本潜伏キリシタンの信仰共同体と生活共同体」 / 『地中海研究所紀要第 4 号 115 頁
- (21) (8) と同じ
- (22) キリスト教を棄教すること。
- (23) 隠れキリシタン: 1873 年に禁教高札の撤廃後のキリスト教信者のこと。明治に信仰の自由が認められカトリック教会に戻った信者もいるが戻らずに潜伏時代の信仰・習慣を続けた人々を指す。;潜伏キリシタンやキリシタンとは区別をする。

< 参考 >

「近世日本潜伏キリシタンの信仰共同体と生活共同体」: 大橋幸泰/『地中海研究所紀要第4号』/111-117頁/2006-03-01

「一平戸市の文化財 64一平戸と生月島の文化的景観 保存調査報告書」・平戸市教育委員会・2009.05

「平戸市史」: 平戸市史編纂委員会

「外海町史」: 外海町

「隠れキリシタンの祈り (オラショ) とヨーロッパの聖歌」: 皆川達夫 / 『川並総合研究所論叢』 / 242-255 頁 / 1994-03-25

「天地始之事 パロディ分析試論」: 高﨑惠/『国際基督教大学学報 3-A,アジア文化研究』/153-168頁/2008-03-30

「天理図書館蔵 『天地始之事』について」:小島幸枝/『紀要』 /163-198 頁 /1970-12/ 東海学園大学

「五島列島のカトリック村落に関する研究―中通島・大水集落を対象として―」:上田大輔/『修論梗概』/1-4頁

「枯松神社と祭礼一地域社会の宗教観をめぐって一」: ムンシ・ロジェ・ヴァンジラ / 『人類学研究所 研究論集』第1号 (2013) /83-113頁

「かくれキリシタンの現在一コンゴ人研究者が見る日本の宗教のシンクレティズム

-」:中村和恵 / 『いすみあ明治大学大学院教養デザイン研究科紀要』 /38-40 頁 /2010-03-31

「カトリック村落における宗教的地位とキャリアパターン」: 今里悟之 / 村落社会研究ジャーナル 21(1)/26-36 頁 /2014/ 日本村落研究学会

「26聖人記念館の<雪のサンタ・マリア>とシチリアの聖母像」:児嶋由枝

『キリシタン組織誕生と変容』 — 「コンフラリヤ」から「こんふらりや」へ(キリシタン研究)単行本 -/ 川村信三/教文館

『潜伏キリシタン 江戸時代の禁教政策』: 大橋幸泰/講談社

『天地始まりの聖地 長崎外海の潜伏・かくれキリシタンの世界』: 松川隆治 (編集), 大石一久 (編集), 小林義孝 (編集), 長崎外海キリシタン研究会 (編集)/批評社『かくれキリシタン~長崎・五島・平戸・天草を巡る旅~』:後藤真樹/新潮社

『文部科学省広報2018年8月号』:文部科学省 『キリシタン迫害と殉教の記録 上』: 茂野幽考 (著), 板橋勉 (著), 片岡弥吉 (著), 田北耕也(著), 今村義孝(著), 半田康夫(著), 上妻博之(著), 助野健 太郎 (編集),山田野理夫 (編集)/フリープレス 『キリシタン追害と殉教の記録 中』:茂野幽考(著),板橋勉(著),片岡弥吉 (著), 田北耕也(著), 今村義孝(著), 半田康夫(著), 上妻博之(著), 助野健 太郎 (編集),山田野理夫 (編集)/フリープレス 『外海の聖者 ド・ロ神父』: 谷真介/女子パウロ会 『踏絵を踏んだキリシタン』:安高啓明/吉川弘文館 『潜伏キリシタンは何を信じていたのか』: 宮崎賢太郎 / KADOKAWA 『外海のキリシタンとド・ロ神父』:長崎巡礼協議会/ 『隠れキリシタンの実像』: 宮崎賢太郎 / 吉川弘文館 『日本二十六聖人記念館 所蔵品カタログ』 『長崎歴史文化博物館ガイドブック』

<取材協力>

外海潜伏キリシタン文化資料館 枯松神社保存会会長長崎外海キリシタン研究会代表 松川隆治氏 沢田美喜記念館 沢田美喜記念館館長 西田恵子氏 日本刀剣保存役員 中西祐彦氏 平戸キリシタン資料館職員 浦部知之氏 元潜伏キリシタン 瀧山直視氏 日本二十六聖人記念館 日本二十六聖人記念館職員 宮田和夫氏





三島停車場誕生までの歴史

~鉄道誘致運動の全貌を探る~

静岡県立三島北高等学校 郷土研究部 萩本大翔





1. 序論

はじめに

現在、三島駅は東海道新幹線・東海道線・伊豆箱根鉄道駿豆線が止まる静岡県内の主要駅のひとつとなっている。しかし、東海道線が開通した当初、三島停車場は設置されず、これが原因となって三島の町は大きく衰退してしまうという歴史をたどっている。しかし、三島はそこから三島停車場(現・下土狩駅)設立に成功、さらに現在の三島駅設立、遂には新幹線駅設立にも成功するという躍進を経て現在に至っている。私はこの躍進ぶりに強い関心を持ち、そのことを成し遂げられた理由について知りたいと思うようになった。そこで私はこの理由を導くためには、まず三島躍進の基礎となる三島停車場設立までの歴史を知る必要があると考え、明治 20 年代の三島における鉄道誘致運動から明治 31 年の三島停車場誕生までの歴史を徹底的に調査し、そこから躍進へと繋がる理由を見つけ出すこととした。

2. 本論

(1)東海道線開通と三島の衰退

明治22年(1889)7月1日、東海道線〔新橋~神戸〕が全通する。静岡県東部地区を含む国府津~沼津間はすでに同年2月1日に開通していたのだが、この区間は当時と現在とではまったく違うルートであった。現在の東海道線は、国府津から小田原、熱海、三島を経由して沼津へ通じるが、当時は山北、御殿場を経由して沼津へ通じる御殿場線が当時の東海道線であった。このことを踏まえた上で、当時の三島における動きを大正11年に書かれた『三島停車場由来記』の記述をもとに流れを確認し、調査していきたいと思う。

政府が東海道線敷設を決定し、測量が始まると三島町民及び郡民は箱根山通過を希望し、 鉄道当局に対して運動を行った。しかし、結果は前述した通り箱根山の工事は難しいとい う理由から御殿場経由の迂回ルートが採用され、地理的に東海道線が三島を通らないとい う可能性が高まった。是に於いて三島町は明治 19 年秋、隣村である長泉村の下土狩薄原 に停車場を設置するよう出願する。その後、原口技師の意向として「三島町ニ於テ停車場設 置費ノ内金参千円ヲ提供スレバ線路ヲ小浜山附近ニ引付ケ設計スヘキ旨 |(ア)世古直道(イ) を以て交渉があった。小浜山は現在の三島駅がある場所で、三島に停車場を設置する絶好 の機会が到来したと言える。しかし、三島町は「参千円支出ノ方法、割当額等ノ協議ヲ凝ラ セシモ、当時一人モ之ニ応ズルモノナク終ニ謝絶スル事ニ決シ」(ウ)其の旨を、世古直道に 回答した。これにより、三島町は停車場設置の運動中止はやむを得なくなり、小浜山はと もかく、下土狩薄原に停車場を設置することなく、東海道線開通を迎えてしまった。『(略) 由来記』には、「鉄道ハ開通シ此ノ交通機関ニ除外サレタル町村ハ漸次衰運ヲ感スルニ至レ リ」(エ)と書かれている。その「町村」の代表例となってしまったのが江戸時代に東海道の宿 場町として栄えた三島だった。世古直道が自宅に設けていた「岳陽倶楽部」について、「三嶋 の地東海道鉄道開通の後は著敷影響をおよぼし種々止む得ざる事情を生じ明治廿八九両年 に至り遺憾ながら衰滅し廃するに至りたり」(オ)と直道は自叙伝に書いている。三島衰退の 様子、影響についてよくわかる事例のひとつである。

ここで三島町がなぜ小浜山に線路を通すことを謝絶したのかについて考えてみたい。そ の理由として三島町全体の鉄道への関心の低さが挙げられると私は考える。当時の先輩議 員は「元来鉄道ナルモノハ旅客並ニ物資ヲ乗セテ走リ去ルカ故ニ何等宿駅ノ利益トナルモノナク却テ鉄道ノナキ方ガ繁栄ヲ増スモノナルヘシ」(カ)という考えを持っていたようである。これは三島町に限らず、まだ鉄道というものにあまり認識がない明治時代の世間一般にあった考えであるようだが(キ)、鉄道への関心低下の要因になったことには間違いないと考える。停車場設置運動に積極的な動きを見せる世古直道は、三島経由の予定線路変更運動で、「其運動方に対しては諸氏と其意見を異」(ク)にしたと言う。これは、直道と三島町の諸氏の間に生じた鉄道に対する関心の温度差の表れではないだろうか。この後、直道は停車場設置が確実な沼津に関心を移していくこととなる。ただし、事実として東海道線が箱根を通らなかった場合の伊豆地方に与える影響を危ぶむ声もあった。それを示す資料として、後に衆議院議員等を歴任する田方群函南村の田中鳥雄等が明治19年12月4日、井上勝鉄道局長宛に書いた『東海道鉄道線路ノ儀ニ付意見書』【資料1】というものがある。しかし、このような意見を持つ者は一部に留まったと考えられ、前の意見書はほぼ反映されない形で東海道線開通を迎えている。当時の三島町は、金を出してまで鉄道を通そうとする意見が弱かったことが、謝絶の理由となったと私なりに結論付けてみた。

(2)停車場設置運動と豆相鉄道

鉄道もなく、近くに停車場すらない三島町は衰退の一途をたどった。この現状にようやく危機感を抱いた商人たちを中心に停車場誘致運動が再開された。ここで、三島町議会は三島停車場設置請願委員を選出する。三浦丈八郎、河辺宰兵衛、島田保作、栗原宇兵衛、花島兵右衛門、間宮清左衛門の6名である。花島兵右衛門は三島で高名な実業家であり、三浦、河辺、間宮は明治、大正時代の間に三島町長に就任していることなどから、三島の実力者達で委員が構成されていることがわかると同時に、三島町の停車場設置請願にかける強い思いが読み取れる。彼らを中心に下土狩薄原の停車場設置を目指して鉄道局に対して停車場設置運動を展開するものの、このことに鉄道局が冷淡な態度をとるなどして、なかなか話は進展しなかった。

三島町の停車場設置運動が行われる中、明治 26 年(1893)5 月 10 日、東京の小山田信蔵によって豆相鉄道株式会社が設立された。9 月 30 日、同社は豆相電気鉄道株式会社と社名を変更し、同日付で『豆相電気鉄道会社創立請願書』【資料 2】を逓信大臣・黒田清隆宛に書いている。そこから、沼津から南条(現・伊豆長岡)に電気鉄道を通そうとする計画があったことがわかる。ただし、電気による鉄道は断念したらしく翌年 4 月 8 日に社名を元に戻している。

上の計画を耳にした三島町は迅速に行動を開始する。停車場設立請願委員らは直ちに小山田信蔵社長と会見を行い、交渉を開始する。また、補助委員・村上桝太郎が資料2にも名を連ねる豆相鉄道株式会社専務取締役・辻村熊吉と親友の間柄だったことも交渉を円滑に進める上で功を奏したようだ。どのような交渉が為されたのだろうか。それを知る手がかりとして、花島家文書の中に明治27年1月付で沼津南条間電気鉄道敷設に関する『仮約定書』【資料3】が残されているので、その内容から確認すると、三島町では「従来官設鉄道ノ字薄キ原停車場新設ヲ熱望」(ケ)していたことから、沼津起点を薄原起点に変更してもらうよう三島町が豆相鉄道発起人に懇請したことが読み取れる。そして、この時取り交わされた約定が4つ挙げられているが、私は1つ目に注目する。そこには、薄原を起点と

するよう路線を変更した場合、三島町は長泉村薄原から三島町南端までの線路用敷地一万坪を鉄道発起人に無償提供すると書かれている。ここから、当時の三島町が何としても薄原に停車場を設置したいという強い願いが感じられるのである。この『仮約定書』には、地元代表者として停車場設立請願委員の三浦丈八郎と花島兵右衛門、前にも登場した田中島雄が署名している。

三島町による豆相鉄道株式会社に対する交渉は順調にいったと思われる。明治 27 年、 黒田清隆逓相が伊藤博文首相に提出した 8 月 28 日付の『豆相鉄道株式会社発起井鉄道敷設ノ件』【資料 4】には、「静岡県下駿東郡長泉村ヨリ同田方郡田中村ニ至ル鉄道敷設ヲ出願セリ」(コ)とあり、この時点ではすでに起点が長泉村に変更されていることがわかる。明治 28 年 1 月、三島町と豆相鉄道との間に薄原起点の契約が成立する。明治 29 年には長泉村下土狩から田中村大仁に至る普通鉄道敷設の認可を求めた 2 月 8 日付の『請願書』が白根専一逓相に提出されている。花島家文書には、その『請願書』の控え【資料 5 】と一緒に起業目論見書や図面【資料 6】等が残されている。『請願書』を受け取った白根逓相は、4 月 30 日付で『豆相鉄道株式会社設立並ニ鉄道敷設免許状下付ノ件』を伊藤博文首相に提出する。この案件は閣議決定され、遂に免許状が下付されるに至った。いよいよここから豆相鉄道の敷設が始まるのである。

(3)三島町停車場設置場所を巡る紛争

『三島停車場由来記』によると明治 29 年(1896)2 月、豆相鉄道株式会社は薄原から大仁間の線路の測量に着手したという。しかし、三島町停車場の設置場所を巡って三島町民が東西に分裂し、紛争を繰り広げる事態となってしまう。鉄道誘致運動が盛んになっている三島町では、町民一人ひとりが停車場設置場所に関して非常に敏感となっており、東西の町民の間で意見を異にした結果、激しい紛争に発展してしまったのだろう。この紛争に町会議員も身を投じるようになり、紛争は更に激化してしまい、「身辺ノ危険ヲスラ感ズル」(サ)ほどだったという。町有志の山口余一等が紛争を鎮めようと努力するものの失敗に終わり、8 月 31 日に三島町会は豆相鉄道株式会社との契約を取り消すという最悪な事態に陥ってしまう。

ここに来て事態解決のため中立を守る町関係議員や町有志達が本格的に動き出すこととなる。9月3日、中立を守る久保町の草茅仁三郎、河辺富助、村上伝右衛門、藤池浅次郎、河島新兵衛、安達彦太郎、小出太三郎等が魚半亭に集まり、第三者的運動を行うことを決議した。また花島家文書には、同じ9月3日付で『三島停車場地について』【資料7】という文書が残されている。この文書では、「一意専心東西ニ偏セズ断然中央便宜ノ地」(シ)を設置場所とすることを「協和一致尽瘁努力」(ス)することに異志なき事を約束している。東西紛争解決に向けて具体的な方針を打ち出すとともに、三島町停車場の設置場所問題を解決し、何としても薄原大仁間に豆相鉄道を通したいという悲願がこの文書から読み取れる。署名者は、島田保作、栗原宇兵衛、河辺宰兵衛、三浦丈八郎、花島兵右衛門等の停車場設置請願委員5名を含めた9名である。ここから、三島町の有力者達も紛争解決に向けて本格的に動き出していたことがわかる。

東西紛争の解決運動の結果、無事東西両町の和解に漕ぎ着けた。また、豆相鉄道株式会社に対しては、旧御倉場の位置(現・田町)をもって三島町停車場建設の確約を行い、当

初の契約通り敷地一万坪の無償提供の再確認を行った。そして遂に明治 29 年 9 月 25 日、 三島町停車場設置場所を巡り発生した紛争問題は解決した。

この紛争問題中の明治 29 年 9 月 23 日、河合龍節三島町長が辞職するという一幕があった。この辞職を巡っては、紛争に対する引責辞職という考えや事態収拾を見計らっての辞職という考えなどさまざまな考え方(セ)がある。ただひとつ言えることとしては、この紛争問題が河合町長の辞職を招いてしまったことには間違いなく、それほどこの紛争が激しいものだったことを示す重要な出来事だということである。

(4)豆相鉄道敷設

豆相鉄道開通に大きな期待を寄せる三島町。ただし、期待を寄せるのは三島町だけではなかった。それを示す資料に田方郡韮山村中区が小山田信蔵に提出した明治 29 年 1 月 24 日付の『豆相鉄道敷設につき中区へ停車場設置意見』という文書がある。これは豆相鉄道株式会社に対する停車場の誘地陳情書であり、その内容からは韮山村の人々が豆相鉄道開通を心待ちにしている様子が伝わってきた。

私は人々が開通を心待ちにしていた豆相鉄道がどういうものだったのかを知る必要を感じ調べることにした。この研究をするにあたり豆相鉄道等の歴史に詳しい伊豆箱根鉄道株式会社総務・芹澤章裕様にお話を伺うことができた。さまざまなお話をして頂いた中で、現在も豆相鉄道当時の橋の遺構が4か所残っているということを聞いた私は早速現地に行って橋の遺構を探すこととした。場所は現在の三島駅誕生に伴って路線変更した結果、廃線となった三島広小路駅と旧三島駅(現・下土狩駅)間にある。現在は閑静な住宅街となっている所に、橋の遺構4か所【写真1,2,3,4】すべてを発見することができた。明治時代の趣を残すイギリス積みのレンガ造りとなっており、豆相鉄道当時の建築技術を知る上でも貴重な遺構だと私は思った。また、伊豆箱根鉄道株式会社様が所蔵する豆相鉄道当時のレール【写真5】も見ることができた。明治29年にベルギーのアングリュール製鉄所に制作注文したレールで、豆相鉄道のイニシャル・ZTKが刻まれている。豆相鉄道で使用された機関車は、アメリカのボールドウインのサンドタンク機であった。これらのことより豆相鉄道は、多くの海外技術を取り込んだ先端技術を有する鉄道であり、今までそのようなものがあまりなかった伊豆地方においては、多くの人々から注目され、より一層豆相鉄道の開通を地元民の心待ちにさせたのではないかと考えられる。

(5)豆相鉄道開通と三島停車場の誕生

明治31(1898)年5月20日、遂に三島町と南条間の豆相鉄道が開通し、小山田信蔵社長出席の下開業式が行われた。静岡民友新聞には3日間に渡って時刻表を載せた豆相鉄道株式会社の広告が掲載されるなど、大々的に開通の宣伝がなされている。開業式で小山田社長は、豆相鉄道開通までの過程と同時に、鉄道開通に尽力してくれた社員株主の諸氏等に対して御礼を式辞で述べている。前述の静岡民友新聞には、開業式当日の様子について詳しく掲載されている記事がある。それによると、三島町では「戸々国旗を掲げ大中嶋にては華やかなる山車を曳出志囃し立て大に雑踏を極め、三島町停車場にはアーチを造り其最寄には数多の露店相並び見物の群衆山を築き」(ソ)非常に賑わったという。ここから地元民挙げての豆相鉄道開通を祝福し、喜んでいる様子が窺える。その後も豆相鉄道は地元民から

高い関心を得ており、それを示す出来事として明治 33 年 10 月頃から「豆相鉄道唱歌」が流行したという。そしてもうひとつ私が注目したいのは、明治 31 年 6 月 15 日に開業した薄原の三島停車場(現・下土狩駅)【写真 7,8】である。静岡民友新聞によると、三島町民の発起により開業式が挙行され、長きに渡り停車場設置運動に参加した田中島雄等が祝辞演説を行い、運輸会社前には酒樽を積み飾るなどして盛況を極めたという。三島町長きに渡っての目標だった薄原の停車場設置はここに成し遂げられた。このことに対する人々の喜びは三島町民発起の開業式に滲み出ている気がする。また、この三島停車場を通じて交通の大動脈・東海道線と豆相鉄道が接続されたこと(タ)は、三島が伊豆半島の玄関口となった意味で三島町躍進への大きな一歩を踏み出した重要の出来事だと言えるのではないだろうか。

3、結論

まとめ

三島躍進の理由を求め、三島停車場設立までの歴史を調べたが、そこから私はその理由 として①努力を怠らない三島の人々の存在②豆相鉄道の存在の2つを見出した。

①三島の衰退、停車場設置場所を巡る紛争など次々と迫り来る困難に屈せず、悲願達成のため必死にもがく三島町民の不屈の精神がこの研究をしていく中であちこちみられ、問題解決において重要となったことに間違いないと考える。また、今回の研究で浮かび上がった三島停車場誕生に奔走したさまざまな三島の人物の存在も重要だと見ている。彼らは三島停車場誕生までの紆余曲折を経て誘致することの重要性を学んだようで、この後に続く様々な誘致運動に主導的な立場として貢献している。具体例を挙げると、明治 40 年代に起きた現三島駅誘致運動では、河合龍節が町長として、栗原宇兵衛、河辺宰兵衛等もこの運動に関わっている。また鉄道だけに関わらず、大正時代に町長となった間宮清左衛門が野戦重砲兵第二、第三連隊の三島誘致に尽力している。現在三島駅があること、連隊基地跡には多くの学校が軒を連ね教育の場となっていること、これらのことを考慮すると彼らの誘致運動が現在の三島に多大なる影響を与えていることに間違いない。

②豆相鉄道は開通を人々に心待ちにされた上、開通した際には多くの人々に祝福されるなど三島を含める地元民から愛されていた鉄道であることがわかった。このことは、運行会社が変化しても大幅な乗車人員の減少もなく【資料 8】、駅数を増やし【資料 9】、伊豆箱根鉄道駿豆線として 100 年以上を経た現在も運行していることからわかる。また、三島停車場は豆相鉄道なくして誕生しなかったことは今回の研究で明確にされ、豆相鉄道の存在が三島躍進に深く関わっていることに間違いないと言える。

以上①②がこの研究を行って私が導き出した三島躍進の理由である。また、これらの理由は三島停車場設置後の三島躍進に関する出来事の根底となるものであり、このことを明確に導き出せた点で、この研究は大きな意味を持つことができたと思う。そして私自身、町の復興のため必死に努力する過去の偉人に感銘を受けたと同時に、このことを忘れず、しっかりと後世に伝えていけるようにしたいと強く思った。今回の研究での様々な発見は私達に多くの教訓を伝えており、私は過去の出来事としてこのことを葬り去るのではなく、自分のできる限り情報発信に努めていきたいと考えている。

《注釈》

- (ア) 『三島市誌下巻』(発行・三島市、編纂・三島市誌編纂委員会 昭和34年) P168 『三島停車場由来記』引用部分より引用
- (イ)世古直道は、江戸時代三島宿にあった世古本陣の主人・世古家出身の人物である。明治時代には内国通運会社の経営に関与するなど交通関係に詳しかったこと、自叙伝よりわかったのだが川村純義等の政府要人と繋がりがあったことが、小浜山停車場設置に関する交渉の窓口役になった理由と私は推測している。
- (ウ)(ア)と同じ
- (エ)『三島市誌下巻』P169『三島停車場由来記』引用部分より引用
- (オ)『松翁六十路の夢』(著・世古直道 明治44年) P87より引用
- (カ)『三島市誌下巻』 P 168、169 『三島停車場由来記』 引用部分より引用
- (キ)沼津の古老によると「鉄道が出来ると、沼津に降りる人がなくなってしまう。そういうことで反対する人は反対しました。」(『昭和三十年十一月沼津の昔を語る古老座談会』発行・沼津市立駿河図書館 図書館郷土資料業書1 昭和 46 年)と東海道線敷設当時の鉄道に対する人々の考えを語っている。ここで言っている鉄道敷設反対の理由が、『三島停車場由来記』の先輩議員の考え方に類似していることから、このような考え方が当時の一般的なものだったと推測できる。
- (ク)『松翁六十路の夢』P78より引用
- (ケ)『駿豆鉄道仮約定書(沼津南条間電気鉄道敷設)』(明治27年1月花島家文書)より引用
- (コ) 『豆相鉄道株式会社発起并鉄道敷設ノ件』(明治 27 年 9 月 14 日 国立公文書館デジタルアーカイブ)より引用
- (サ)『三島市誌下巻』P172『三島停車場由来記』引用部分より引用
- (シ) 『三島停車場地について』(明治29年9月3日 花島家文書)より引用
- (ス)(シ)と同じ
- (セ)河合町長の辞任は『三島市誌下巻』では引責辞任としているが、『三島市郷土資料館報告2』(編集/発行・三島市郷土資料館 平成20年)の「伊豆箱根鉄道開設史」(著・桜井祥行)では、事態が収拾されたのを見計らっての辞任としている。
- (ソ)『静岡民友新聞 vol. 6』(静岡県立中央図書館)明治 31 年 5 月 22 日記事より引用
- (タ)鉄道唱歌(作詩・大和田建樹)第一集東海道編の十六番には、
 - 十六 三島は近年ひらけたる 豆相線路のわかれみち

駅にはこの地の名をえたる 官幣大社の宮居あり

(『長泉の昔と今』著・瀧口光 出版・長泉町 平成 10年)より引用とあり、歌になるほど三島停車場が東海道線と豆相鉄道の接続駅であるということが注目されていたことがわかる。

《参考文献》

- 『三島市誌 下巻』(発行・三島市、編纂・三島市誌編纂委員会 昭和 34 年)
- 『松翁六十路の夢』(著・世古直道 明治44年)
- 『静岡県史 資料編 17 近現代二』(編集発行・静岡県 平成 2 年)
- 『韮山町史 近現代一 第七巻』(編集・韮山町史編纂委員会 発行・韮山町史刊行委員会 平成5年)
- 『沼津史談 第十三号』(沼津郷土史研究談話会 昭和48年)
- 『三島市郷土資料館研究報告二』(編集発行・三島市郷土資料館 平成 20 年)
- 『近代三島をつくった人々』(編集発行・三島市郷土資料館 平成30年)
- 『三島文学散歩』(著・中尾勇 発行・静岡新聞社 平成3年)
- 『続・三島文学散歩』(著・中尾勇 発行・静岡新聞社 平成6年)
- 『長泉の昔と今』(著・瀧口光 出版・長泉町 平成10年)
- 『週刊歴史でめぐる鉄道全路線国鉄 JRNo.1 東海道本線』(朝日新聞出版 平成 21 年)
- 『静岡民友新聞 vol. 6 明治 31 年 5 月~同年 6 月』(静岡県立中央図書館)
- 『昭和三十年十一月沼津の昔を語る古老座談会』(発行・沼津市立駿河図書館 図書館 郷土資料業書 1 昭和 46 年)
- 『三島市郷土資料館だより 第 122 号』(編集・三島市郷土資料館 発行・三島市教育 委員会 平成 30 年)
- 『花島家文書目録』(編集・三島市郷土資料館 平成 23 年)
- 『伊豆大辞典』(伊豆学研究会編 羽衣出版 平成22年)
- 『よくわかる!建築』(著・A/E WOKS 編著・小見康夫 平成 18 年)

《その他参考・使用資料》

■ 花島家文書(三島市郷土資料館所蔵)

『駿豆鉄道 仮約定書(沼津南条間電気鉄道敷設)』明治27年1月 『後進達願 他((前)伊豆箱根関係)』明治29年2月10日 『三島停車場地について』明治29年9月3日

■ 国立公文書館デジタルアーカイブ

『豆相鉄道株式会社発起并鉄道敷設ノ件』明治 27 年 9 月 14 日 『豆相鉄道株式会社設立並ニ鉄道敷設免許状下付ノ件』明治 29 年 5 月 19 日

■ 伊豆箱根鉄道株式会社様 提供資料

今回この研究にあたりお話をして下さいました芹澤章裕様、及び資料を得るにあたってお 世話になりました方々に謝意を表します。

《資料》

【資料1】『東海道鉄道線路ノ儀ニ付意見書』明治19年12月4日 (静岡県史資料編 17 近現代二 P599、600)

謹テ書ヲ奉シ愚見陳述仕候。本年七月十九日閣令第廿四号ヲ以テ東海鉄道敷設ノ公布アル ヤ、沿道ノ人民以為ラク村落物産ノ興起スル、人智ノ開進スル、其便益枚挙ニ遑アラスト、 抃舞踊躍歓喜罷在候。 然ルニ道路ノ説ニ日フ、箱根山ノ峻険路ヲ執ルニ難ム。 故ニ相州足柄 上郡ヨリ酒匂川ニ添、足柄古道ヲ経テ、駿州駿東郡沼津ニ至リ、而シテ東海本道ニ接スト。 生等初メ此説ヲ聞クヤ信セス。何トナレハ鉄道敷設ノ事タル、一朝軽々ノ事業ニアラス。箱 根山ノ如キハ仮令本道険峻経費多額ヲ要スト雖モ、隧道ノ穿ツ可アリ、且ツ熱海往還ノ足柄 古道ヨリ里程短縮シテ工事ノ容易アルナリ。貴局於テ三方の路線篤ト御踏査ノ上、御決定相 成候儀ト愚案罷在候。(略)三方之路線篤ト調査ノ上其宜キヲ取リ、御決定ノ上ハ何レニ相成 候トモ遺感無之候得共、我伊豆国タル、従来東海道ノ内ニ位シ、本道一般ノ利便ヲ享有セシ モ、一朝鉄道ノ敷設ニ因リ、曩ニ抃舞踊躍ノ懽楽ハ、変シテ交通不便ノ地ニ僻在シ、物産振 ハス、人智ノ進マサル等、今ヨリ之ヲ想像スルハ実ニ一大息ノ至リニ堪エサルナリ。(略)仰 冀クハ出格ノ御詮議ヲ以テ、更ニ熱海筋御実測ノ上足柄古道ト比較シ、其便利ヲ執リ御決定 有之候様仕度候、以上。

> 田中鳥雄 (ほか三九人氏名略)

井上鉄道局長殿 十二月四日三島郵便ニ出ス。 赤坂葵坂町二番地

*傍線部より、田中鳥雄等が東海道線を足柄方面に敷設した場合の伊豆地方に与える影響 を危惧している様子がわかる。



(東海道本線 沼津~国府津間地図)

【資料 2】『豆相電気鉄道会社創立請願書』明治 26 年 9 月 30 日 (静岡県史資料編 17 近現代二 P612、613)

今般私共発起人ト相成リ豆相電気鉄道株式会社ヲ創立シ、神奈川県下国府津ヨリ同県下小田原ヲ経テ湯本ニ至ルノ鉄道及静岡県下沼津ヨリ同県下三島中村ヲ経テ南条ニ至ルノ鉄道ヲ敷設シ、運輸ノ業ヲ営ミ、現在ノ道路険悪ノ為メ障害ヲ被リ居ルコト少ナカラサル来往旅客及ヒ出入貨物ノ交通運輸ニ便シ、以テ此地方ノ繁栄ヲ計リ度。(略)追テ時運ノ進歩スルニ随ヒ東西相聯通セシムへキ希望ニテ、東西ノ小田原及三島線トモ米国ノ法式ニ依リ四呎八吋半ノ「ゲージ」ト致シ、以テ将来ノ大成ヲ期セントスルノ微意ニ御座候間、何卒前記ノ事情御諒察ノ上、至急会社創立鉄道敷設ノ儀御認許被成下度、別冊仮定款、特許請願書、起業目論見書、設計書概要、線路略図等相添へ伏テ奉懇願候也。

明治二十六年九月三十日

東京市京橋区築地二丁目四十一番地

雨宮敬次郎印

(略)

東京市本郷区今町二丁目一番地

小山田信蔵印

神奈川県足柄下郡小田原幸町一丁目

辻村熊吉印

日本橋区本町壱丁目拾番地

岩田作兵衛印

逓信大臣伯爵 黒田清隆殿

* 傍線部より豆相電気鉄道株式会社が沼津南条間に鉄道を敷設しようとする計画があったことがわかる。また、波線部には最終目標である小田原周辺に敷設した鉄道と傍線部に示した鉄道を接続する計画が明かされている。豆相鉄道という名はこの計画に由来する。署名者には、「鉄道王」と呼ばれた雨宮敬次郎や豆相鉄道株式会社社長の小山田信蔵、同社専務の辻村熊吉がいる。

1

氣 鉄道ラモ沼津線ラ愛更シテ三島町のり字夢ち 下附,出願。及以名處三島町、将三八從来官設鉄 鉄道発起着八點請心多,此縣請八三馬町。 原、連絡七三二九樣同町々會,決議可以了電氣 道,字薄中原停車場新設了熱望やルラステ右電 三島町,经了个縣田方郡並山村字南條"至少間今般静岡縣下販東都沼津町"了同縣若澤都 私設電氣鉄道敷設,計画,起之既、及免状 极

約

2

第三、三島町八契約外:持ラモ鉄道會社,土地買入 第二、電氣鉄道癸起者公島町,地所店萬坪寄 若一會社事業,都合二二一株,满株之五於 五拾圓、三八式檢枚(即干四)司三島町八差出天己 園·満タガルトキハ其端數、金員三五去出了事 府"對之更。報酬上之同致道株,是株满排一之 ,内:テ無代差出ス可ら ,數地是萬坪ョ要でル時八其餘八鉄道會社 適宜上撰定不字薄原或二馬停車堪敷地用

第一電氣鉄道受起者が三島町縣請。永諾シ 一逐一左,約定了締結文換又 八表者一電氣欽道奏起者終利十九之發起者。取り不利九处 旗,是、任七地所表萬坪,無代,差出又、己若之線路 ,間:於多鉄道線路敷地用トンラ鉄道発起者, 其線路日後東上下沿津、至之子薄中原至己九 薄,原ョ了全縣若澤都三島町南端写大道,添三亮 報酬上了三島町公静岡縣下販東郡長泉村字 処すし八全町で會 代上明:熟識



上は署名の部分であり、右から三浦丈八郎、花島兵右衛門、田中鳥雄、雨宮敬次郎、小山田 信蔵、南部助之丞、辻村熊吉となっている。

【資料4】『豆相鉄道株式会社発起并鉄道敷設ノ件』明治27年9月14日

国立公文書館デジタルアーカイブより

【資料5】『後進達願 他((前)伊豆箱根関係)』 明治29年2月10日 花島家文書(三島市郷土資料館所蔵) 請願書の控え 一部分

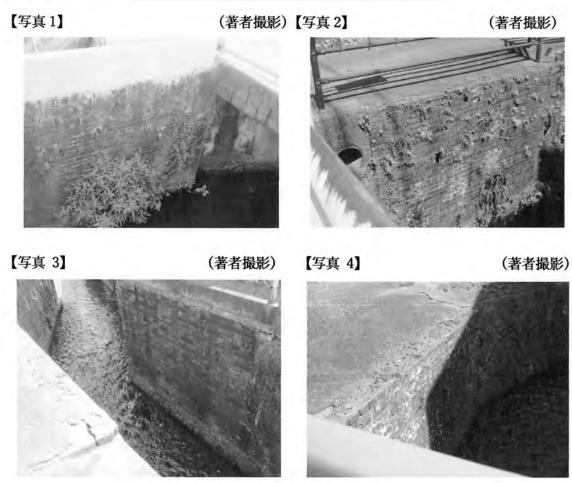


【資料 6】『後進達願 他((前)伊豆箱根関係)』 明治 29 年 2 月 10 日 花島家文書(三島市郷土資料館所蔵) 鉄道敷設場所を示した図面



【資料7】『三島停車場地について』明治29年9月3日 花島家文書(三島市郷土資料館所蔵)





豆相鉄道の橋の遺構として見つかったのは上の4か所である。橋はレンガ造りで、一段ずつ 組み方の方向が交互に変わるイギリス積みという方法でレンガが積まれていることがわか る。写真撮影地はすべて長泉町。

【写真5】 伊豆箱根鉄道株式会社様の社内に展示されている豆相鉄道のレール (著者撮影)



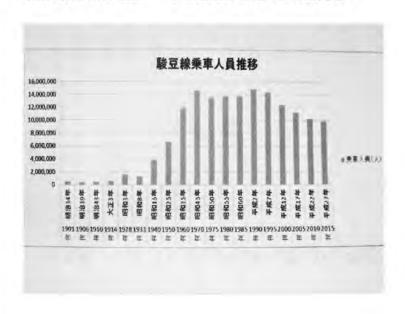
【写真 6】 (著者撮影) 【写真 7】 (著者撮影) 現在の下土狩駅(昔は三島停車場) 下土狩駅にある駅の歴史を伝える看板



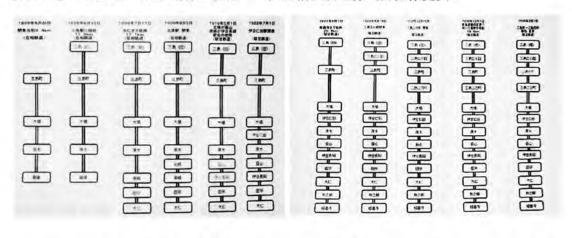


明治31年6月15日に三島停車場として開業したこの駅は、現在はJR御殿場線の下土狩駅となっている。駅の近くには、歴史ある駅だけあって今日に至るまでの駅の歴史を詳しく書いてある看板が設置されていた。

【資料8】 駿豆線乗車人員推移 伊豆箱根鉄道株式会社様提供



【資料9】 駿豆線 駅と路線の変遷 伊豆箱根鉄道株式会社様提供



明治→→→→→→→→大正→→→→→→昭和→→→→→→→→→現在

開通時には三島町南条間のたった 4 駅だったが、その後駅数を増やしていき、現在では現 三島修善寺間の 13 駅となっている。駅設置場所を巡って紛争となった三島町駅が、昭和 31 年に三島田町駅と駅名を変更したことが、駅と路線の変遷の最後となり、現在に至っている。





小地名「ホノケ」の研究 〜福岡県糸島市王丸集落〜

福岡県立修猷館高等学校 谷口生貴斗



第一章 はじめに

私たちが日常的に用いる最も細かな地名は、現在では地区・集落名と言える。しかし、 集落の中には小字や、かつては、さらに細かな地名、ホノケがあった。今回、ほとんど忘 れ去られようとする集落のホノケを復原するため調査を試みた。

第二章 調査に至る経緯

平成二十五年三月、自宅の蔵から古文書(谷口家文書)が発見された。その中には、天明三年の『大福萬日記』・明治五年の『地券御渡奉願候事』があり、聞いたことのない集落内の地名が記されていた。それらは、現在忘れ去られた小地名、「ホノケ」であることが分かった。

現在、王丸には二十の小字が残る(表1)。小字は、明治初期の地租改正の際に統合されたものであり、明治以前には、はるかに多くの地名があった。私は集落のすべてのホノケを復原させるとともに、地名が名付けられた由来を明らかにしたいと思った。

第三章 調査の概要

調査地は、福岡県糸島市王丸である。調査では、王丸の地名(ホノケ)について調べた。但し、一部は隣接する糸島市川原・末永・高祖並びに福岡市西区金武、同市早良区飯場・曲渕との境界付近の地名であることを記す。

平成二十八年までの調査は前述の通りである。平成二十九年、福岡県立図書館において 王丸集落の「王丸区有文書」(以下、区有文書と記す)・「家宇治家文書」の存在を知っ た。両文書とも、平成元年に当時の福岡県文化会館によって調査が行われており、その 際、目録の作成や一部の文書のマイクロフィルム撮影が行われている。マイクロフィルム で一部の文書の閲覧を行ったところ、ホノケが記された古文書が集録されており、未確認 のホノケが多数あることが分かった。このうち、区有文書に関しては、平成三十年、集落 に住む吉田浩さんを通じて、当時の王丸区長・坂木完治さんに相談をし、原本の閲覧並び に貸与の許可を頂いたため、自宅にて原本の調査を行った。家宇治家文書はホノケが記さ れるとみられる文書が少数であったため、図書館でコピーしたものを調査した。

区有文書・谷口家文書・家宇治家文書からホノケを抜き出した後、集落のお年寄りに聞き取り調査を行い、位置の比定を行った。この調査でも位置が分からないホノケについては、古文書の記述から位置を推定した。調査をもとに地図を作成した。

第四章 調査記録

第一節 古文書調査

(一) 区有文書

区有文書の中には、『怡土郡王丸村田野山川字書上帳』(図版参照)をはじめ、多数の古文書にホノケとみられる地名が記されていた。そのうち、特に多くのホノケが記される六冊を取り上げた。

・『怡土郡王丸村田野山川字書上帳』) 文政二年(1819)

『筑前國續風土記拾遺』の編纂に際して、福岡藩が各町村に提出させた書上の写しとみられる文書である。記されたホノケは「村内小名」・「田字」・「圃字」・「山野小名」・「村堺

小名」に分類して記され、延べ百六十二件(重複あり)にのぼる(表 2)。調査の基礎資料として用いた文書である。

文書の成立としては、大いに疑問の残る点がある。『筑前國續風土記拾遺』にはホノケのみを記す箇所は見当たらず、また、同書編纂に際して提出された書上等を収録する『筑前町村書上帳』にもホノケのみを記す文書は記載されていない。当初、『筑前國續風土記拾遺』には、各町村のホノケ一覧が収録される予定であったことが考えられるが、他にホノケのみを記した文書が見つからない以上、断言できない。なお、王丸村には『筑前國續風土記拾遺』を編集した青柳種信の助手を務めた福岡藩士の児玉琢が住んでおり、この文書も琢を通じて提出されたことが分かっている。

・『怡土郡王丸事跡一切書上帳』文政三年(1820)

同じく、『筑前國續風土記拾遺』の編纂に際して、福岡藩に提出された書上の写しとみられる文書である。村の人口・家数・石高・旧跡・伝説等が記された地誌であり、当時の村の様子が分かる。神社や旧跡にはホノケが記されるため、ホノケの位置の比定に関して重要な役割を果たした文書である。なお、本書は『怡土郡王丸村田野山川字書上帳』と合わせて綴じられているが、表紙があることから、別冊として取り扱った。

- ・『怡土郡王丸村藪坪御上納銀坪数書上帳』文政五年(1822) 九軒分の屋敷地が記される。
- ・『怡土郡王丸村御山書上帳』宝暦四年(1754) 山林が記される。
- ・『怡土郡王丸村忠右衛門竹木山仕立可申上望申』明暦四年(1658) 山林が記される。
- ・『怡土郡王丸村御証拠山坪数竹木立込書上帳』宝暦十五年(1765) かつて畠であった山を記したものか。

(二) 谷口家文書

- ・『大福萬日記』天明三年(1783) 幸六が私有の田畠の位置・等級・面積・石高を記したもの。
- ・『地券御渡奉願候事』明治五年(1872) 谷口和三郎が私有の田畠の位置・等級・面積・石高を、地券の発行のために記したもの。

(三) 家字治家文書

- ・『怡土郡王丸村天神社破損一件之覚』年月不詳天満宮の破損を知らせる書状。
- ・『(題不明)』(天満天神建立の由来)貞享三年(1686) 家宇治五郎右衛門が書いた、藩主・黒田光之公が天満宮を再建した由来書。 第二節 ホノケの一覧表の作成

第一節に記した文書から百六十余のホノケが見つかった。まず、『怡土郡王丸村田野山川字書上帳』に記載される地名を一覧表にした(図 2)。ただし、筆で書かれているため、読み取れないホノケも多数あった。次に、同書に記載のない、他の文書から見つかった地名も表を作成した(図 3)。

第三節 位置の比定

(一)聞き取り調査

集落在住のお年寄り八人(吉田浩さん、吉田ケイ子さん、吉田俊則さん、吉田絹代さん、吉田次男さん、谷口哲雄さん、坂木重子さん、家宇治正幸さん)の家を訪ねて、お話を伺い(図版参照)、古文書から見つかったホノケの位置を教えて頂いた。この結果、約五分の三のホノケの位置が判明した。また、古文書にはないホノケもいくつか伺い(表4)、ホノケが名付けられた由来等も伺った。吉田浩さんからは、川から水を引く井手の名前と(表5)、集落内の屋号も教えて頂くことができた(表6)。ホノケが、所在する家の屋号として使われることがあることも分かった。また、十一月の神待ちという行事に参加して、集落に古くから伝わる話を聞き、ホノケに関する話をさらに知ることができた(図版参照)。

(二)古文書・地形図からの推定

聞き取り調査でも位置の比定ができないホノケについては、古文書の記述をもとに推定した。『怡土郡王丸村田野山川字書上帳』に「村堺小名」として記載されるホノケは、どの村との堺にあるか明記されており、現在の行政区画の堺との違いはないため、既に位置が判明しているホノケを考慮した上で、位置の推定を行った。「尾」・「谷」・「山」・「頭」などの地形が含まれるホノケに関しても、記載された順番等を確認しながら、地形図を見て推定した。しかし、全く手掛かりの掴めないホノケもあり、すべてのホノケを推定することは不可能だった。

第五章 地図の作成

調査の結果から、ホノケを記載した地図を作成した(王丸村全図)。ここでは、国土地 理院がインターネット上で公開する、基盤地図情報を使用した。

第六章 ホノケに関する考察

聞き取り調査や古文書をもとに、ホノケが名付けられた由来や歴史を記し、考察を加えた。

・立庄司(タテショウジ)

『怡土郡王丸村田野山川字書上帳』には「竪小路」と記される。かつては地名であったが、現在は一軒の屋号として使われている。

- 新屋敷(シンヤシキ)元文六年(一七四一)に家ができたという記録が残っている。
- ・當出(トウノイデ) 川原川に面しており、かつては田に水を引く井手があったと伝えられている。
- 石原(イシハラ)

「大雨で王丸山が大きく崩れ、石だらけになった」や「王丸山が噴火して石だらけになった」との伝承がある。今でも、付近の田畑を掘ると小石が多く出るという。災害の痕跡を残す地名として、将来に残す必要があるだろう。

・石佛 (イシボトケ)

道の傍らに石が二つ立っていることから、付近を石佛と呼ぶようになったという。『怡 土郡王丸事跡一切書上帳』には、「高サ壱尺五寸程之石二ツ立則此地名を石佛と申候」と ある。また、伊能忠敬が測量の際にこの石に腰掛けて、「この石は可也山と同じ高さである」と言ったと伝えられている(実際の標高は、石佛が約百メートルであるのに対し、可也山は三百六十五メートル)。そのため、現在では、「伊能忠敬の腰掛石」として、

・ 横枕 (ヨコマクラ)

柳田国男は『地名の研究』の中で、「横枕」という地名について、

田の字に横枕という地名の多いことは自分も早くから不思議に思っている。二三の地図によって想像をしたところでは、成功開墾地の地割をするに当り、地形の都合上幹線に併行して割ることのできぬ分、すなわち大部分の田地の上端に横に長い形の地面のできたものをいうかと思う。上総下永吉の林寿祐氏もその地の字横枕はそんな場所だといわれた。田地の大割は山や林の陰を考えて、だいたいどの田にも日受けのよいように縄を引くから、横枕は多くは日射の十分でない若干不利益な地面に相違ない。それで特にこの地名ができたのであろう。区劃が多くは南北だと言われるのは、その地方が南のよく開いた東西に地割するように便宜なためではないか。田地は概して東西に長く、南北に短い方が日受けがよいかと思う。

と述べている。「日射の十分でない若干不利益な地面」には当てはまらないが、「大部分の 田地の上端に横に長い形の地面のできたものをいうかと思う」との言葉には当てはまり、 「横枕」は王丸集落の最北端の田に位置し、また、隣接する末永集落の最南端の田も「横 枕」と称されている。

・ 天神森 (テンジンモリ)

かつて天満宮があったことが、『怡土郡王丸村天神社破損一件之覚』から明らかになった。現在は、五穀神社がある。

・ヒトギデ

『怡土郡王丸村田野山川字書上帳』には「粢田 (シトギデン)」とあり、神田であった と記される。現代までに訛ったものと考えられ、由来が忘れ去られた現在では「人切」の 字を当てる人もいる。

・金山 (カナヤマ)

末永集落との堺にあり、昭和の初めごろまで銅山があった。昭和十年代には子供の遊び 場になっていたという。

・姥ヶ懐(ウバガフツクラ)

「姥懐」という地名は全国各地にあるが、未だ明確な共通性は明らかになっていないようだ。『日本国語大辞典』には、「風のこない暖かい場所。とくに、南面の山ふところをなす地形で、日だまりの地をいう。また、このような土地は製陶に適していたところから、陶土を産する場所の地名として呼ばれた。」とある。確かに、姥ヶ懐は王丸山の南面にあり、また、『筑前國續風土記拾遺』は、姥ヶ懐に接する「河内」から「温石を出す。瓦工の用藥なり。」と記している。

・虫伏峠(ムシブクトウゲ)

怡土郡飯場村(現・福岡市早良区飯場)との堺にある峠である。『筑前國續風土記拾遺』には、「飯場村に越るや山路あり。虫伏峠と云。其間一里あり。」とある。村の古文書にも「虫伏峠」とあるが、集落に住むお年寄りは「飯場峠」と言っていたという。車の通行はできないが、人馬の通行はあったという。平成十二年に、この峠の南側に「糸島峠」

が完成し、飯場との車での行き来が可能になった。

・早良谷(サワラダニ)

『筑前國續風土記拾遺』には、「東の嶺より早良郡金武村に出る道を早良谷越と云。川原村の居民府に通ふ捷經なり。」とあり、早良郡金武村(現・福岡市西区金武)に行く道にある谷として名付けられたと考えられる。

・駒の頭 (コマノカシラ)

王丸山の山頂付近の呼び名である。駒の頭とは子牛の頭のことであり、その形に見えたことから名づけられたという。明治三十五年に作られた「糸島地理唱歌」では、「東にめぐる山々の 中にその名もおもしろき 駒の頭や臥牛山 並びて包む怡土の郷」と唄われている。

第七章 終わりに

調査を始める前までは、小地名として「ホノケ」というものがあるということも、多くのホノケが地域に残っているということも、全く知らなかった。また、知らなくとも、現代の生活において困ることは一切ない、とも考えていた。多くの地域では、ホノケが残っていたとしても、正式でない、単なる通称地名としか扱われず、由来等はほとんど伝わっていないのが実情だろう。しかしながら、どの地名にも名付けられた由来があり、名付けた人がいて、人々が長い間、生活の中で用いてきた歴史があることは確かだ。地域の人々の歴史や生活と、ホノケ等の地名は切っても切り離せない関係にある。地名の中には災害の歴史を伝えるものなど、将来に伝えなければならない古人の知恵が詰まっているものもある。日本各地で、自然災害が多発している現在、そうした地名を軽んずることは、取り返しのつかない事態を招くことにつながるのではないかと考えている。だが、山林や田だった場所に、新しく作られた団地や住宅地には、価値を高めるため、響きが良く、親しみやすい地名が新たに付けられる例が少なくない。この風潮は、一刻も早く変えるべきであり、古くから伝わる地名を見直すべきではないだろうか。

そして、全国各地の集落に、今残そうとしなければ、永久に復原できない地名が多数ある。地方の人口減少や高齢化が進む今だからこそ、地域の伝承は次の世代に伝えていかねばならない。日常的に使う人がいなくなった地名は、急速に消えてしまう。小地名であるホノケは、尚更のことだろう。早急に聞き取り調査や古文書調査をして、後世に記録として残していく必要がある。私は、大学で、地域の歴史を伝えるホノケなどの地名を復原する活動を、広めていきたいと考えている。多くの地域の小地名を明らかにすることができれば、地名が名付けられた地形などに関する、新たな共通点が明らかになるのではないかと思う。

今回の調査では、ホノケを記した古文書が発見され、ホノケを伝える話者がいらっしゃったことで、集落のホノケを復原することができた。このことは、大変幸運なことだ。復原することのできたホノケは、集落の先人たちが、数百年間にわたり用いていた歴史を持つ地名である。集落の宝として、次の世代に繋げてゆきたい。

最後に、今回の調査に協力してくださった地域の方々に感謝申し上げます。

図版

·『怡土郡王丸村田野山川字書上帳』



・聞き取り調査の様子



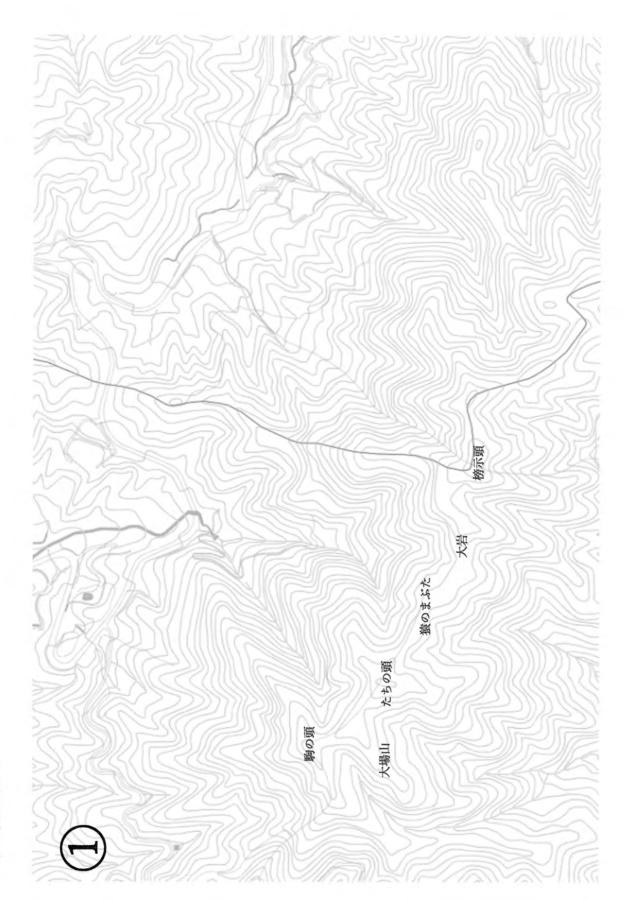


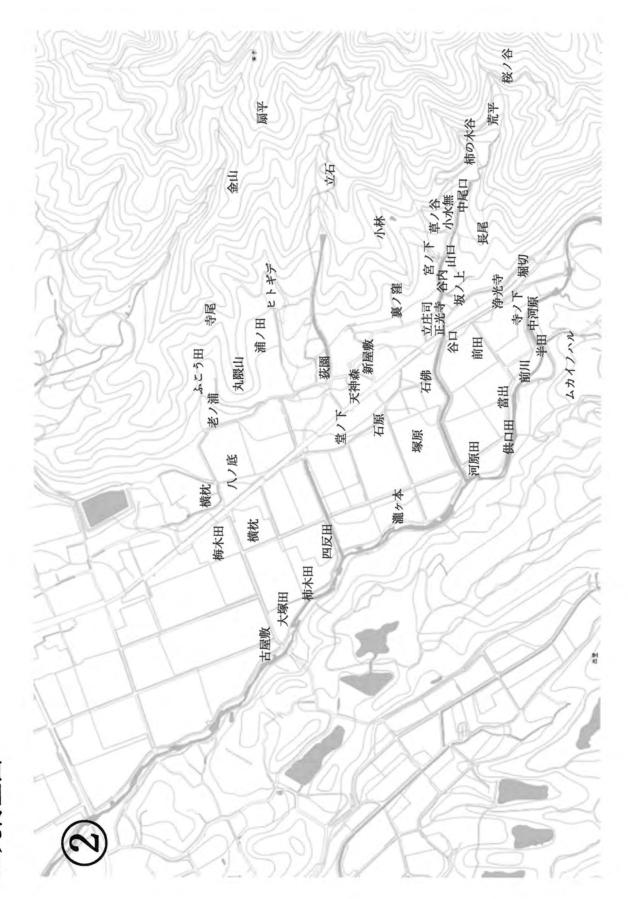
・神待ち行事



・集落の遠景







王丸村全図

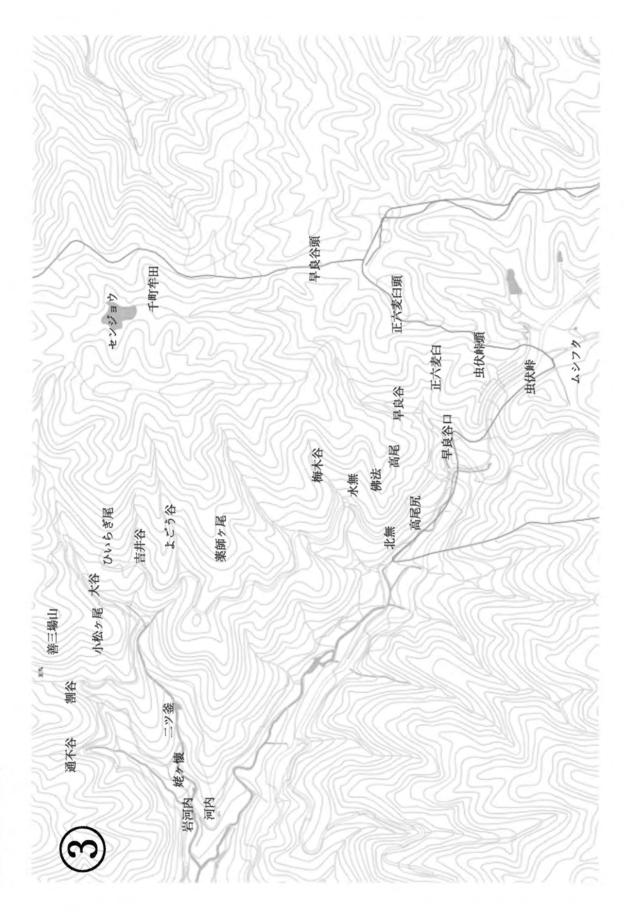


表 1 糸島市王丸小字一覧

| 字 | 地目 | |
|-----|-----------------------------|--|
| 河内 | 山林・原野・田・畑 | |
| 大場山 | 山林・原野・田・雑種地・保安林 | |
| 堀切 | 山林・原野・田・畑・雑種地・宅地・学校敷地・墓地・水路 | |
| 山口 | 山林・畑・宅地・水路 | |
| 小林 | 山林・原野・畑・雑種地・宅地・墓地・境内地 | |
| 前田 | 原野・田・畑・宅地・水路 | |
| 前川 | 田・水路 | |
| 當出 | 田・水路 | |
| 川原田 | 原野・田・水路 | |
| 塚原 | 田・水路 | |
| 石佛 | 田・畑・雑種地・宅地・水路 | |
| 石原 | 山林・田・畑・雑種地・宅地・境内地・水路 | |
| 瀧ケ元 | 原野・田・畑・宅地・水路 | |
| 四反田 | 原野・田・水路 | |
| 荻園 | 山林・原野・田・畑・雑種地・宅地・水路 | |
| 浦ノ田 | 山林・原野・田・畑・水路 | |
| 老ノ浦 | 山林・原野・畑・雑種地・墓地・水路 | |
| 八ノ底 | 原野・田・畑・水路 | |
| 横枕 | 田・水路 | |
| 大塚田 | 田・水路 | |

表2 『怡土郡王丸村田野山川字書上帳』記載地名一覧(□は解読できない文字を示す)

| 分類 | 地名 | 注記 |
|------|------|---------|
| 村内小名 | 坂上 | |
| 村内小名 | 谷内 | |
| 村内小名 | 竪小路 | |
| 村内小名 | 裏ノ窪 | |
| 村内小名 | 新屋敷 | 以上本村分 |
| 村内小名 | 荻園 | 又沖園ともかく |
| 田字 | 早良谷 | |
| 田字 | 北無 | |
| 田字 | ほきの原 | |
| 田字 | 堀切 | |
| 田字 | 浄光寺 | 古社□ |

| 田字 | 寺の下 | |
|----|------|-------------|
| 田字 | 西畠 | |
| 田字 | 谷口 | |
| 田字 | 正光寺 | 古社□ |
| 田字 | 中河原 | |
| 田字 | 前川 | |
| 田字 | 尻面 | 修理免にて古神佛の田□ |
| 田字 | 半田 | |
| 田字 | 供口田 | 昔神田□ |
| 田字 | 口田 | |
| 田字 | 塚原 | |
| 田字 | 粢田 | 昔神田□ |
| 田字 | 裏田 | |
| 田字 | 八ノそこ | |
| 田字 | 八ノ木田 | |
| 田字 | 石佛 | |
| 田字 | 横枕 | |
| 田字 | 當ノ出 | |
| 田字 | 丸熊 | |
| 田字 | 六反田 | |
| 田字 | 坂口 | |
| 田字 | 老ノ浦 | |
| 田字 | 木ノ本 | |
| 田字 | 浦田 | |
| 田宇 | 河倚 | |
| 田字 | 荻園前 | |
| 田字 | 大塚田 | |
| 田字 | 才目路 | |
| 田字 | 麥ノ本 | |
| 田字 | 井尻 | |
| 田字 | 河原田 | |
| 田字 | □中前 | |
| 田字 | 三角田 | |
| 田字 | む□田 | |

| 田字 | 梯木田 | |
|----|--------|------|
| 田字 | 水通 | |
| 田字 | 壱町田 | |
| 田字 | 瀧ケ元 | |
| 田字 | 北ノ又 | |
| 田宇 | 中口 | |
| 田宇 | 寺ノ前 | |
| 田宇 | ロノロ | |
| 田宇 | 河内 | |
| 田字 | 大場山 | |
| 田字 | 園田 | |
| 田字 | 小林 | |
| 田宇 | 小□尻 | |
| 田宇 | 永田 | |
| 田字 | 志□の田 | |
| 田宇 | 口中口 | |
| 田字 | 於呂目 | |
| 田字 | 岩河内 | |
| 田字 | 寺ノ下中河原 | |
| 圃字 | 長原 | |
| 圃字 | 山口 | |
| 圃字 | 古屋敷 | |
| 圃字 | 射場平 | |
| 圃字 | 小林 | |
| 圃字 | 石原 | |
| 圃字 | 天神森 | 古社地口 |
| 圃字 | 堂ノ下 | |
| 圃字 | 坂口 | |
| 圃字 | 堂ノ下 | |
| 圃宇 | 森ノ元 | |
| 圃字 | 老ノ浦 | |
| 圃字 | 丸熊 | |
| 圃字 | 山□老浦 | |
| 圃字 | 石佛 | |

| 圃字 | 小林笹ノ尾 |
|------|-------|
| 圃字 | 小林堂ノ下 |
| 圃字 | 天神森 |
| 圃字 | 小水無 |
| 圃字 | 山口宮ノ下 |
| 圃字 | 堀り切 |
| 圃字 | 小林 |
| 圃字 | 荻園堂□ |
| 圃字 | 浦ノ田坂志 |
| 圃字 | 山口宮ノ上 |
| 圃字 | 小林射場平 |
| 圃字 | 南 |
| 圃字 | 荻園天神森 |
| 圃字 | 裏ノ田 |
| 圃字 | 老ノ浦坂口 |
| 圃字 | 堂ノ裏 |
| 圃字 | 裏ノ平 |
| 圃字 | 寺尾 |
| 圃字 | 志とぎてん |
| 山野小名 | 松尾 |
| 山野小名 | □尾 |
| 山野小名 | □うかう |
| 山野小名 | 大水無 |
| 山野小名 | 千町林 |
| 山野小名 | 草ノ谷 |
| 山野小名 | 柴原 |
| 山野小名 | 荒平 |
| 山野小名 | 長尾 |
| 山野小名 | 桜ケ谷 |
| 山野小名 | 片平山 |
| 山野小名 | かもで□尾 |
| 山野小名 | 大葉山 |
| 山野小名 | 鞍掛 |
| 山野小名 | こたつの尾 |

| 山野小名 | 岩河内 | |
|------|-------|--------------|
| 山野小名 | 姥ケ懐 | |
| 山野小名 | 二ツ釜 | |
| 山野小名 | 狸尾 | |
| 山野小名 | ロちロ | |
| 山野小名 | 通不谷 | |
| 山野小名 | 割谷 | |
| 山野小名 | 善三場山 | |
| 山野小名 | 小松ケ尾 | |
| 山野小名 | 大谷 | 七ツ谷又□建□云 |
| 山野小名 | ひいらき尾 | |
| 山野小名 | 吉井谷 | |
| 山野小名 | よごふ谷 | |
| 山野小名 | 薬師ケ尾 | |
| 山野小名 | 矢□谷 | |
| 山野小名 | 梅木谷 | |
| 山野小名 | 水無 | |
| 山野小名 | 佛法 | |
| 山野小名 | 高尾 | |
| 山野小名 | 早良谷 | |
| 山野小名 | 正六麦臼 | |
| 村堺小名 | 虫伏峠 | |
| 村堺小名 | 早良谷口 | |
| 村堺小名 | 高尾尻 | 以上當郡飯場堺谷限 |
| 村堺小名 | 北無 | |
| 村堺小名 | かふり石 | |
| 村堺小名 | ほきの原 | |
| 村堺小名 | 小□□□ | |
| 村堺小名 | 中河原 | |
| 村堺小名 | 半田 | 以上當郡川原村堺但川中限 |
| 村堺小名 | 供口田 | |
| 村堺小名 | 河原田 | |
| 村堺小名 | 柿木田 | 以上川中限 |
| 村堺小名 | 口中口 | |

| 村堺小名 | 八のそこ | 以上田□限 |
|------|-------|---------------|
| 村堺小名 | 寺尾 | |
| 村堺小名 | 金山 | |
| 村堺小名 | 扇平 | 以上當郡末永村堺山尾限 |
| 村堺小名 | 駒の頭 | |
| 村堺小名 | たち之頭 | |
| 村堺小名 | 猿のまぶた | |
| 村堺小名 | 大岩 | |
| 村堺小名 | 榜示頭 | 以上高祖村堺嶺尾限 |
| 村堺小名 | 大口口 | |
| 村堺小名 | 赤□川 | |
| 村堺小名 | 千町牟田 | |
| 村堺小名 | 早良谷頭 | 以上早良郡金武村堺峯尾限□ |
| 村堺小名 | 正六麦臼頭 | |
| 村堺小名 | 虫伏峠頭 | 同郡曲渕村堺峯尾限 |

表3 『怡土郡王丸村田野山川字書上帳』以外の文書から新たに分かった地名一覧

| 小谷 | 永田 | 小水無宮ノ下 | 小水無中尾口 | |
|----|----|--------|--------|--|
| | | | | |

表 4 聞き取り調査から新たに分かった地名一覧

| ふこう田 | 柿木谷 | 立石 | ムカイノハル |
|------|-----|----|--------|
| | | | |

表 5 井手一覧

| 上井手 (ウワイデ) | 中井手(ナカイデ) | 車井手(クルマイデ) |
|------------|----------------|-----------------|
| 大井手(オオイデ) | 河原田井手 (カワラダイデ) | 安蔵寺井手 (アンゾウジイデ) |

表 6 屋号一覧

| 上の屋敷(ウエノヤシキ) | 立庄司 (タテショウジ) | 店 (ミセ) |
|--------------|--------------|-----------|
| 紙屋(カミヤ) | 板場 (イタバ) | 往還 (オウカン) |

参考文献

王丸区有文書・谷口家文書・家宇治家文書

『筑前國續風土記附錄』加藤一純・鷹取周成 寛政10年頃

『筑前國續風土記拾遺』青柳種信 天保8年頃

『地名の研究』柳田国男 昭和11年

『糸島伝説集』糸島新聞社 平成7年

『日本国語大辞典』小学館 平成18年



未解明の古墳時代の集落に迫る

~ 壱岐・車出遺跡とその遺物から見た巨石古墳との関係~

長崎県立壱岐高等学校

東アジア歴史・中国語コース歴史学専攻2年

大多和泰熙 亀井琢磨

清川智希 筑後裕哉

平田太輝 松尾泰地

村上直哉 本田あかり





Ⅰ.研究の目的と方法

長崎県の壱岐には古墳が約 280 基確認されている(壱岐市教育委員会 2012)。長崎県にある 480 基の古墳のうち、約 6 割を壱岐の古墳が占めていることになる。それらの古墳の大きさ 30m を基準として振り分けた結果、30m 以上の古墳が 7 基あることが分かった。その 7 基の中、6 基は巨大な石材で石室を構築したものがあり、それらを巨石古墳という(田中 2007)。私たちは古墳の分布図を作成したところ、双六古墳、笹塚古墳、鬼の窟古墳など大規模な巨石古墳が島中心に集まっていることがわかった(図 1)。これほど巨石古墳があるが、「被葬者は誰か。生活拠点はどこか。」ということがわからないため、疑問を持った。

壱岐の集落遺跡として、弥生時代の原の辻遺跡・カラカミ遺跡が有名であるが、これらの 遺跡は弥生時代から古墳時代前期まで存続した集落で、古墳時代後期に該当する巨石古墳 の造営とは関係がない。一方、古墳時代の集落については、石路遺跡という遺跡が発掘調査 された程度で、その実態はほとんどわかっていない。

そのため、私たち壱岐高校東アジア歴史・中国語コース歴史学専攻2年生は、長崎県埋蔵文化財センターの方々に協力していただき、古墳時代の集落と巨石古墳の関係について調べていくことにした。そこで、古墳時代の遺物を採集し、利用時期を明らかにするために車出遺跡に注目した。車出遺跡は過去の調査で断片的に須恵器の出土が報告され、現地では土師器・須恵器などの散布が認められており、なおかつ遺跡周辺に古墳が存在している。このことから私たちは古墳時代の有力な集落の一つであると考え、興味を持った。車出遺跡周辺の数基の古墳を調べ、その中で最も近い山ノ神古墳が車出遺跡と関連しているのではないかと考え、実際に測量調査を行うこととした。

調査する方法として車出遺跡周辺の地表調査と測量調査を行った。詳細として、5月8日 に古墳時代の集落である車出遺跡を地表調査し、5月29日に車出遺跡周辺にある山ノ神古 墳を測量調査した。

Ⅱ.車出遺跡の地表調査

(1) 車出遺跡の概要と調査の目的

車出遺跡群は車出遺跡、大谷遺跡、戸田遺跡、田ノ上遺跡、鉢形遺跡というほぼ同時期の隣接する遺跡で構成されている(図 3)。車出遺跡は、壱岐南西部の郷ノ浦町田中触に位置し、田中川流域の支流である沖積低地と背後の北面する丘陵斜面に広がる形で立地する遺跡である。遺跡の北部に標高 50.9m の鉢形山が位置する。遺跡南部の丘陵上に大谷遺跡、北面に隣接する丘陵斜面に戸田遺跡が位置している。鉢形山からみて河内川を挟んだ北西および北には、それぞれ山中遺跡や柳田遺跡が位置している(図 2)。車出遺跡周辺の遺跡では当時、幡鉾川の水源を活かして周辺の丘陵部には、人が集まり集落を形成していたとみられる(写真 1)。

これまで数次にわたる発掘調査が行われており、その概要は次の通りである(表 1)。これまでの調査によると、車出遺跡群の中央部、西部、南西丘陵部に弥生時代中期末~弥生時代後期にわたって人々が住んでいた集落があったとされている。弥生時代の状況については、部分的に濠が発見されており、環濠があったと考えられている。また鉢形遺跡(天手長男神社遺跡)などからは高杯などの祭祀に使われていた遺物が発見されたことから祭祀的なことが行われていたと考えられている。その他にも鉢形遺跡からは中世の陶磁器も見つか

っている。しかし、これまで数々の調査が行われてきたにもかかわらず、弥生時代の集落という側面に主な焦点があてられており、古墳時代の車出遺跡に対する研究はそれほど活発ではなかった。このことから私たちは古墳時代の様相を明らかにすることを目的として車出遺跡の地表調査を行うことにした。

(2) 車出遺跡地表調査の成果

5月8日に13名で車出遺跡 A,B,C,D 地点で表面調査を3時間おこなった(図3,写真2)。その結果、400点近い遺物を採集した。そのうちの40点の遺物を図示した。図4の7、8はB地点採集で、それ以外は、A地点採集遺物である(図4,図5,写真3,表2)。以下の遺物説明は図4・図5に記されている番号である。

1~15 は弥生土器である。1 は甕の口縁部付近で、弥生中期のものであり、端部が尖っ ている。2 は甕の口縁部で、弥生中期後葉のものであり、断面形状は L 字型で、膨らみを もっている。3は甕の口縁部付近で、弥生中期後葉の時期のものであり、胎土は粘土質 で、内外面はナデ調整されており、断面 M 字型の突帯がめぐる。4 は甕の口縁部で弥生後 期のものであり、胎土は石英・長石である。5は壺の口縁部で弥生後期のものであり、断 面形状は、くの字型である。6は壺の胴部で突帯がめぐる。7は突帯がめぐる壺の胴部で ある。丹塗り土器であり、赤みがかった色調で、突帯の断面は M 字型で、弥生中期後葉の ものである。8 は壺の胴部であり、弥生後期の時期のものである。9 は壺の底部であり、 弥生中期のものである。10 は壺の底部で、弥生中期のものであり、ナデで調整されてい る。表面が全体的に損傷しており、変形している。11は甕の底部で弥生中期のものであ る。被熱痕があり、内面がひどく損傷し、変形している。12は壺の底部であり、外面には 窪みがある。13は高坏の口縁部付近で弥生中期のものである。14は高坏の脚部で端部が 面取りされている。15 は高坏の脚部であり、端部は丸みを帯びている。16~18 は土師器 である。16は古式土師器で、甕の肩部で古墳前期のものである。外面はハケメ・内面はケ ズリで調整されており、端部が尖っている。17は甕の底部である。18は甕の底部で、外 面にハケメが縦方向に入っている。19~38は須恵器である。19は坏蓋で、内外面は回転 ナデで調整されている。20、21は坏蓋の胴部である。22は坏蓋のつまみ部であり、つま み部の中央はやや膨らんでいる。23 は坏身の受け部である。直立しておらず、内部がやや 内湾している。24 は坏身の受け部であり、外面ぎみに沿っている。25 は壺の口縁部で端 部が尖っており、内外面は回転ナデが見られる。26 は壺の口縁部であり、口唇部は丸くお さまる。27 は壺の肩部であり、内外面は回転ナデで調整されている。28 は壺の肩部であ り、内外面は回転ナデで調整されている。29 は壺の肩部であり、外面はカキメ、内面は当 て具痕で調整されている。30 は底部であり、内外面はナデで調整されている。31 は胴部 であり、外面は平行タタキ後に、カキメで調整されている。内面は当て具痕がみられる。 32 は胴部であり、外面は平行タタキ、内面は当て具痕がみられる。33 は胴部であり、外 面は平行タタキで調整されており、内面は当て具痕がみられる。34は胴部であり、外面は 平行タタキで調整されており、内面は当て具痕がみられる。35は胴部であり、外面は平行 タタキで調整されており、内面は当て具痕がみられる。36は胴部であり、外面は平行タタ キで調整されており、内面は当て具痕がみられる。37は胴部であり、外面は平行タタキで 調整されており、内面は当て具痕がみられる。38 は胴部であり、外面はタタキからナデで 調整されており、内面はナデで調整されている。39 は古墳後期の製塩土器の胴上部片である。外面は平行タタキで調整されており、内面はナデで調整されている。40 は三韓系土器である。弥生後期のものであり、外面は縄目タタキで調整されており、内面はナデで調整されている。

(3) 須恵器の詳細な年代の検討

今回調査した車出遺跡から、古墳時代後期のものと思われる遺物が多く採集された。そこで、巨石古墳群造営の時期と車出遺跡の関係を明らかにするため、より詳細な年代について検討する。ここでは、壱岐島の古墳出土須恵器を基に作成された小田富士雄、下原幸裕による編年案(小田・下原 2006)を利用する。小田・下原両氏は双六古墳から出土した須恵器を基に双六 I ~VI期の6つの時期に分期しており、さらに、周辺の首長墓と群集墳出土の須恵器編年を加味し、奈良時代に該当するVII期を加えた編年案を作成した。それによると実年代としては双六 I 段階が6世期第3四半期、双六VI段階が7世紀第4四半期であると見積もられている。

車出遺跡出土須恵器坏蓋(図 5-19)に類似している資料として釜蓋 6 号墳(芦辺町教育委員会 2003)出土の須恵器杯蓋の図 8-3 と 8-4 がある。図 8-3 は端部が下方に細く伸びてかえりは短く尖っているという点や、回転ナデで調整をされているという点で類似している。図 8-4 は端部の屈曲度合いが類似している。これらのことから、小田・下原編年の双六IV新段階(7世紀第 2 四半期後半~第 3 四半期前半)に該当すると思われる。

車出遺跡出土須恵器蓋(図 5-22)に類似している資料として笹塚古墳(壱岐市教育委員会 2005b)出土の図 8-5 と 8-6 がある。図 8-5 はつまみ部の中心の造形が僅かに盛り上がっており、天井部の始まりがほぼ平坦になっている。図 8-6 はつまみの接地部分の曲がりが類似し、天井部の始まりがこちらもほぼ平坦になっており、内面部の平坦さも類似している。どちらとも同年代のものと思われ双六Ⅵ段階(7世紀第4四半期)に該当すると思われる。須恵器坏身口縁部(図 5-23)に類似している資料として百田頭 3 号墳(芦辺町教育委員会 2003)出土の図 8-1 がある。図 8-1 は須恵器坏身口縁部で端部は短く丸い。内外面は回転ナデで調整されているところが類似していることから、双六Ⅲ段階(7世紀第1四半期前半)に該当すると思われる。須恵器坏身口縁部(図 5-24)に類似している資料として、百田頭 7 号墳(芦辺町教育委員会 2003)出土の図 8-2 がある。須恵器杯口縁部で立ち上がりはなだらかに上方に伸びて端部は尖り気味に納めるという点や、受部が短く丸いという点が類似していることから双六Ⅰ段階(6世期第3四半期)に該当すると思われる。このことから、巨石古墳の造営時期や追葬時期と同時期に車出遺跡が集落として利用されていたことがわかる(表 3)。

Ⅲ.山ノ神古墳の測量調査

私たちは車出遺跡の地表調査を行った後、遺跡周辺に存在する古墳との関係性を調べるために、車出遺跡の東側に広がる丘陵にある山ノ神古墳の平板測量調査を5月29日に実施した(写真12,写真13)。

山ノ神古墳は郷ノ浦町田中触字山ノ神に所在する古墳であり(図 1,図 2,写真 14)、車出遺跡の東側約 480m に位置する。これまで報告されている古墳の中で車出遺跡に最も近いため山ノ神古墳の被葬者は車出遺跡と関係のある人物ではないかと考えられる。

山ノ神古墳は標高 48m の丘陵の頂上に築造された円墳であると報告されているが(壱岐市教育委員会 2012)、大きさや高さなど詳しい状況は不明であった。測量調査の結果、山ノ神古墳の平面形態は長径約 7.9m・短径約 6.3m の楕円形であり、高さは約 1.1m であった(図 6)。墳丘の南側は削られテラス状になっている。墳丘から石材が露出しており埋葬施設は横穴式石室であると予想されるが、開口部分は土砂で埋まっており確認することはできなかった。

この山ノ神古墳の相対的な大きさを把握するため、壱岐島にある巨石古墳のうち円墳である兵瀬古墳(壱岐市教育委員会 2005a)、鬼の窟古墳(芦辺町教育委員会 1990)、笹塚古墳(壱岐市教育委員会 2005b)、掛木古墳(長崎県教育委員会 1992)と比較した(図7)。その一つの兵瀬古墳は壱岐における最大級の円墳で長径 54m、短径約 53m、高さ13m である。このことから山ノ神古墳の大きさは兵瀬古墳の約 7 分の 1 程度の大きさしかない小規模な古墳であることがわかった。

車出遺跡周辺には山ノ神古墳以外にも数基の古墳が点在している(図 2)。確認のため 8 月 19 日に追加で計測調査を行った。その結果、車出遺跡から南南西約 490m に位置する円墳の鏡塚古墳は直径 6.26m であった。車出遺跡から東南東約 1030m に位置する円墳の上平川古墳は直径 10.57m であった。なお、車出遺跡から東南東約 1000m に平川古墳が所在するが、破壊のため形態・大きさは不明である。測量調査した山ノ神古墳を含めた車出遺跡周辺の古墳は、兵瀬古墳をはじめとする巨石古墳ほどの規模を持たない小規模古墳ということがわかった。

IV.考察

以上の検討内容を整理すると次のようになる。

- (1) 車出遺跡から採集した土器を見ると弥生時代の土器と古墳時代の土師器・須恵器がどちらとも多く出土したため、弥生時代から古墳時代まで続いていた集落であったことが考えられる。また、出土した遺物から巨石古墳が造営された年代にも車出遺跡が利用されていた。
- (2) 車出遺跡周辺の古墳との関係性を調べるために、車出遺跡から一番近い(約 480m)山ノ神古墳の測量調査をおこなった結果、直径 7.2m で小規模な古墳であることがわかった。兵瀬古墳(直径 53.5m の円墳)と比較したところ、大きさが約 7 分の 1 だった。更にその他の周辺の古墳も壱岐島中央の巨石古墳ほど大きなものはなかった。

以上を踏まえて、壱岐島内にある古墳時代の他の集落との関係性を検討する。そのために古墳時代の集落のなかで発掘が進んでいる『石路遺跡』と比較した。石路遺跡は、壱岐島の西方、片苗湾に面した標高 50m 前後の台地上面の島状丘陵頂上部を中心に広がっており A地点、B地点の 2 つの地点がある(図 1)。石路遺跡 A 地点では古墳時代前期の住居跡が確認されている(勝本町教育委員会 1987)。石路遺跡 B 地点では A 地点とは異なり古墳時代後期を中心とする遺物包含層が確認されている(壱岐市教育委員会 2014)。石路遺跡 B 地

点と車出遺跡の出土遺物を比較すると、須恵器坏身(図 5-23 と図 9-1 および図 5-24 と 図 9-2)や製塩土器(図 5-39 と図 9-3)などに形態が類似する資料がみられ(図 10)、ほぼ同時期に存在していた集落という共通点を見出すことができる。一方、差異点として、集落の本格的な利用開始時期と、付近の巨石古墳の有無が挙げられる。利用開始時期については、車出遺跡は弥生時代中期に利用が開始され、その後古墳時代後期・飛鳥時代まで継続して利用されている一方、石路遺跡 B 地点は古墳後期に突如出現した集落である(表 3)。付近の巨石古墳については、石路遺跡周辺には壱岐の巨石古墳のひとつである対馬塚古墳(壱岐市教育委員会 2005c)が東側に約 960m の位置にあるが、車出遺跡周辺には山ノ神古墳のような小型古墳しかない(図 2)。巨石古墳造営時期と石路遺跡の集落の本格的な利用開始時期がほぼ一致することからみて、この 2 つの現象は関係があると考えられる。車出遺跡は弥生時代中期以来の伝統的な在地集落である。一方、石路遺跡はそうではなく、突如集落が形成された点に特徴がある。このようなことが起きる理由として、従来の集落からの移動や分村も想定されるが、石路遺跡周辺には該当する古墳時代の集落は確認されていない。そのため、壱岐島外からの影響で形成された可能性が最も高いものと推測される。

以上の検討から、巨石古墳の造営というのは、在地の勢力が伸長して造営されたものではなく、島外からの影響により造営されたのではないかと考えられる。今回の私たちの分析によって明らかになったとおり、車出遺跡のような弥生時代以来の伝統を持った有力な集落があるにもかかわらず、その周辺に巨石古墳が築かれなかったことは、壱岐島の勢力のみでは巨石古墳は造営され得なかったということを示しているのである。

ところで、田中聡一氏は古墳自体の石室の時期的変遷と文献記録に見られる「筑紫君磐井の戦争」との関連から兵士だけでなく生産者、工人、商人など、島外から多数移住してきたと述べている(田中 2007)。私たちは、古墳そのものの分析ではなく、集落と古墳の関係性という田中氏とは異なる方法で、巨石古墳の造営について検討したが、田中氏の見解に近い結論を得ることができた。

今後の活動として、今回の考察を踏まえて「巨石古墳に葬られた人物や古墳を造営した 人々はどこに住んでいたのか。そしてなぜ巨石古墳を造ったのか。本当に巨石古墳は島外からの影響で造られたのか。」といった謎を解き明かしていくために、巨石古墳付近の集落を 発掘調査し、明らかにしたい。

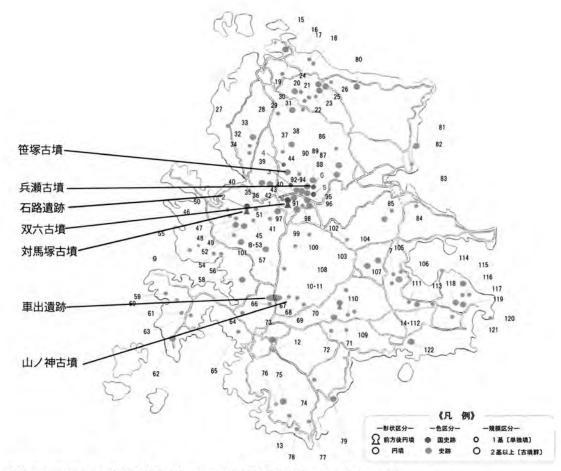


図 1 壱岐島全体地図(壱岐市教育委員会 2012 の巻頭地図壱岐島の古墳分布に加筆)

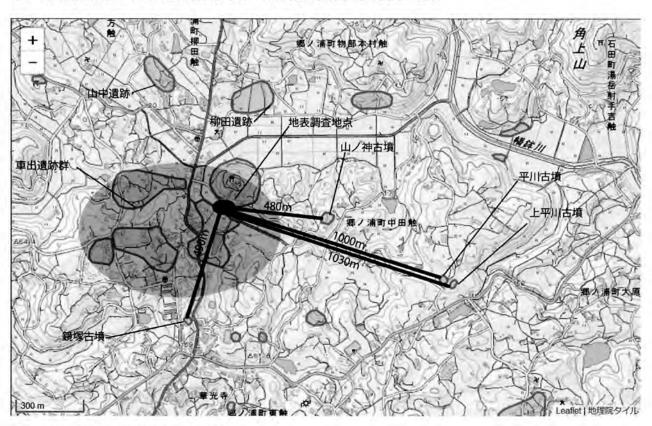


図2 地表調査地点およびその周辺の古墳

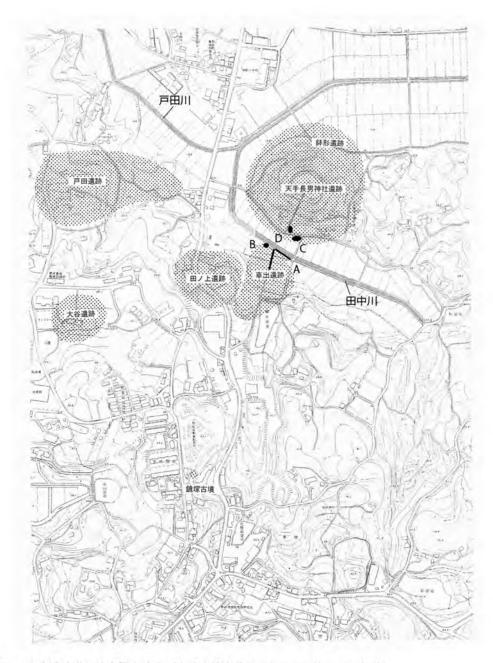


図3 車出遺跡群と地表調査地点(壱岐市教育委員会2011の第1図に加筆)



写真 1 地表調査地点全景(南側の天手長比売神社より) 写真 2 地表調査

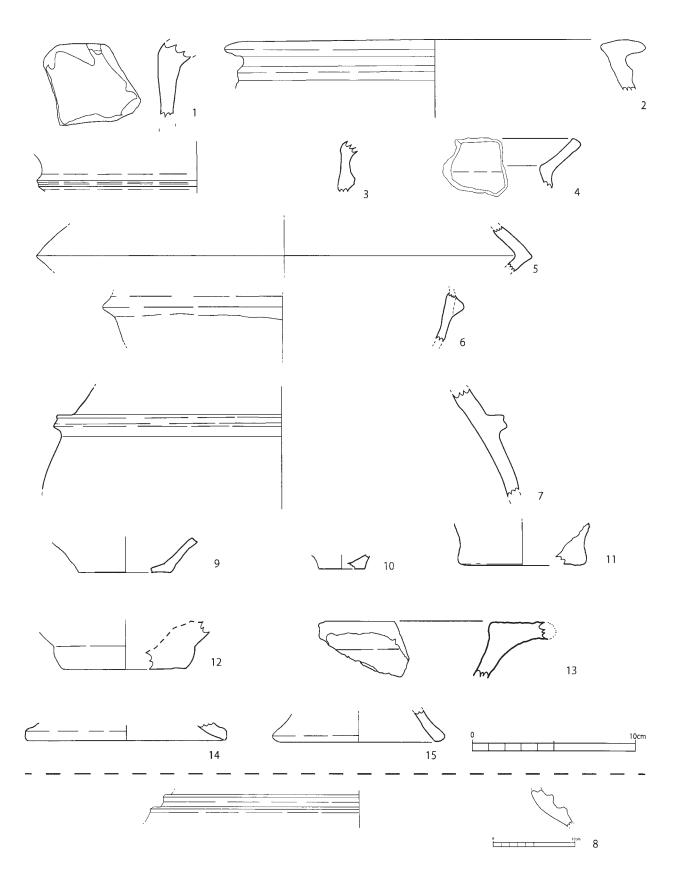


図 4 車出採集弥生土器実測図

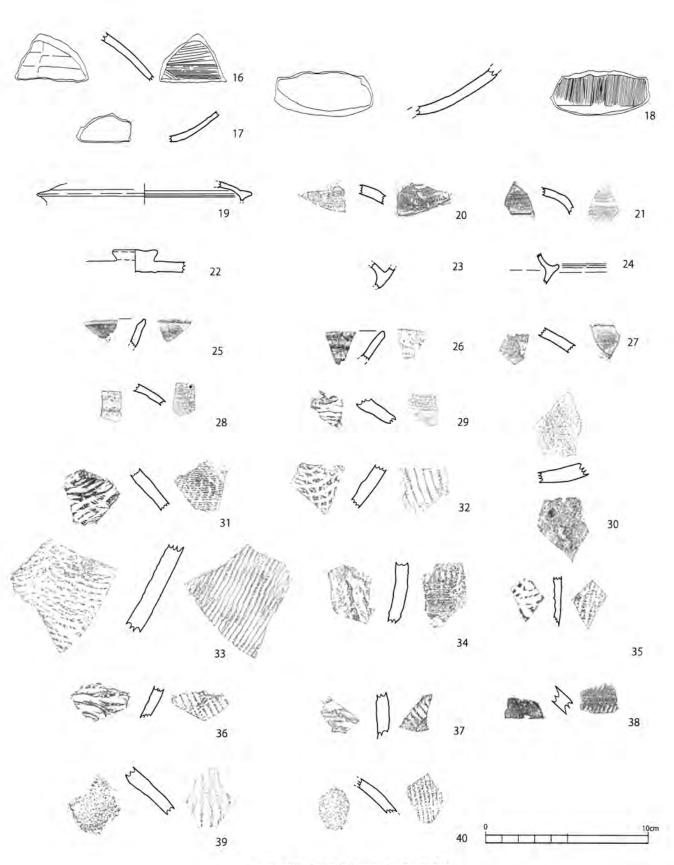


図 5 車出遺跡採集土師器·須恵器実測図

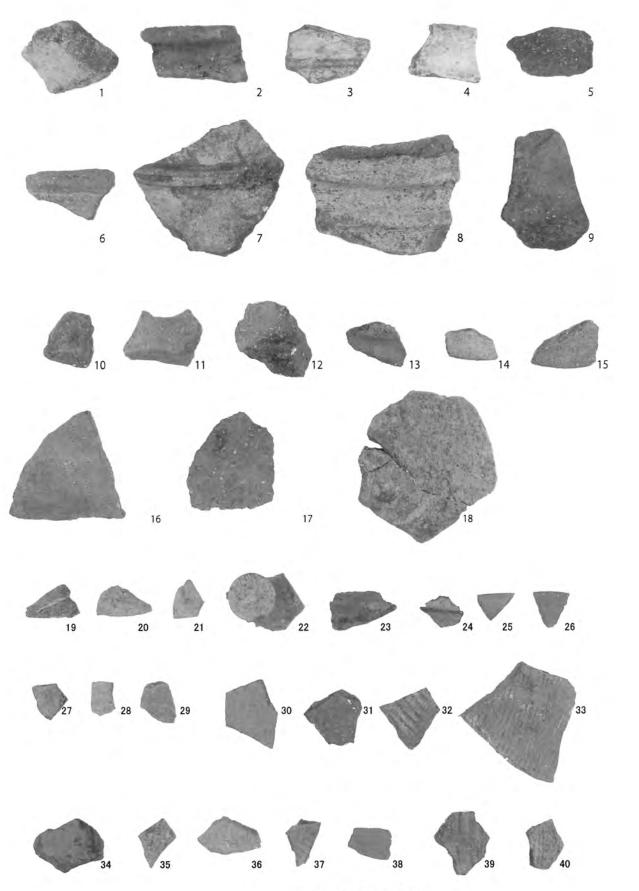


写真 3 車出遺跡採集土器写真

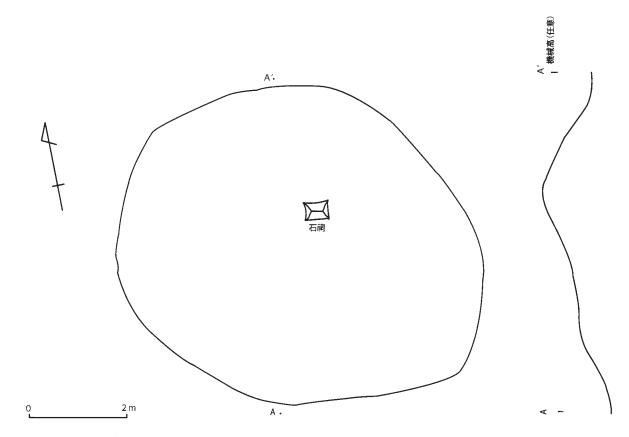
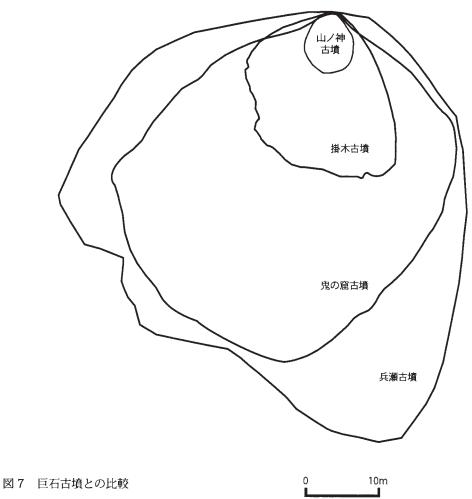


図6 山ノ神古墳(平板実測図)



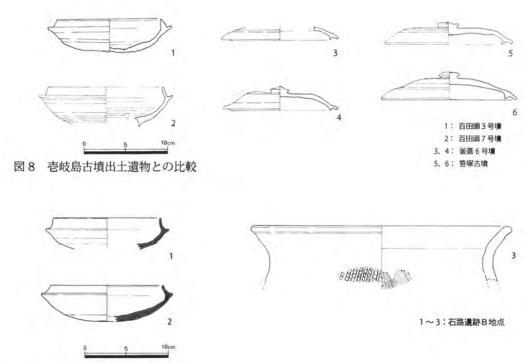


図9 石路遺跡出土遺物との比較



図 10 石路遺跡と車出遺跡資料の比較

表 1 過去の車出遺跡群発掘調査経歴集約表

| 発掘年度 | 調査主体 | 地区 | 主な遺構 | 主な遺物 | 猫文 |
|------|------------------------|-----|--|--|----------------------------|
| 1992 | | 华山 | [弥生]自然流路・落ち込み、[中世]掘立柱建物 | [弥生]土器 | 長崎県教育委員会・郷ノ浦 町教育委員会1998 |
| 1993 | 長崎県教育委員会・郷 ノ浦町教育委員会 | 車出 | [弥生]遺物包含層 | [改生後期後半]十架 四五 麻五 麻岳 計畫 | 長崎県教育委員会・郷ノ浦 町教育委員会1998 |
| 1998 | 長崎県教育委員会・郷 ノ浦町教育委員会 | 車出 | []小工中划で区別]源「木、得2木、灯刷八「墨、工器油 | [旧石器]ナイフ形石器、細石刃、細石核、[弥生]土器、石 斧、石鏃、石錘、磨石、凹石、石皿、砥石、方格規矩鏡、小 型仿製鏡、貨泉、銅鏃、ガラス玉、[古墳時代]土師器、須恵 器、[中世]育磁片、白磁片、滑石製石鍋 | 長崎県教育委員会·郷ノ浦 町教育委員会1998 |
| | | 車出 | [弥生中期から後期]濠1条、溝1条 | [弥生中期~古墳初頭]土器、石斧、石錘、鉄鏃 | 郷ノ浦町教育委員会2002 |
| 2000 | 郷ノ浦町教育委員会 | 戸田 | [弥生中期後半~古墳]濂1条、[弥生中期後半]土坑 | [弥生]土器、石器 | 郷ノ浦町教育委員会2002 |
| 2001 | 郷ノ浦町教育委員会 | 戸田 | [弥生中期後半~古墳初頭]濛2条 | [弥生]土器、石製支石、鉄鎌、[古墳初頭]土師器、陶賞土器 | 郷ノ浦町教育委員会2002 |
| 2001 | 郷ノ浦町教育委員会 | 大谷 | [弥生]遺物包含層 | [弥生]土器 | 郷ノ浦町教育委員会2002 |
| 2002 | 郷ノ浦町教育委員会 | 芦田 | [弥生~古墳初頭]遺物包含層 | 「弥生~士権が領」士架 を泊土架 二輪互催土器 カビエ | 郷ノ浦町教育委員会2003 |
| 2002 | 郷ノ浦町教育委員会 | 車出 | [弥生~古墳初頭]遺物包含層 | | 郷ノ浦町教育委員会2003 |
| 2005 | 壱岐市教育委員会 | 車出 | かエ」/ ノヘい返信、ヒット、エ外、未行返信、赤小舟い返 進ル茨も清増「時期太明 準化清増 | [弥生]土器、クド石、敲石、凹石、扁平片刃石斧、磨製石器、両刃石庖丁、ガラス製管玉、[古墳]須恵器、土師器、[中世]白磁器、白磁皿、青磁皿、 | |
| 2006 | 壱岐市教育委員会 | 鉢形山 | | [弥生中期~後期]土器、[中世]土師器、瓦賞土器、磁器(龍泉·同安窯系青磁、白磁、高麗青磁 | 壱岐市教育委員会2007 |
| 2008 | 壱岐市教育委員会 | | | | 壱岐市教育委員会2008 |
| 2009 | 壱岐市教育委員会 | 車出 | [数件]整工化造機 土拉化造機 | 「弥生] 土男 灯製石架 ガニッ製小玉 土縄 「士権)消毒 | 壱岐市教育委員会2010 |
| 2010 | 壱岐市教育委員会 | 田ノ上 | [主接条期内略] 工管护连接 主用护连接 足…」 | [改生] 十架 明石 石雄 [士禮] 土極架 須電器 [山州]以 | 壱岐市教育委員会2011 |

表 2 採集土器観察表

| 番号 | 種類 | 時期 | 器種 | 部位 | 胎土 | 色調 | | | | 調整 | | |
|----|-------|--------|--|-------|-----------|-------|----------|-----------|----------------|----------|----------|-------------|
| | | | | | | 外 | | 内 | | | - | 備考 |
| | | | | | | 色 | Hue | 色 | Hue | 外 | 内 | 1 |
| 1 | 弥生土器 | 弥生中期 | 臺 | 口縁部付近 | 石英·長石 | にぶい黄橙 | 10YR7/4 | にぶい橙 | 7.5YR7/4 | ナデ | ナデ | T |
| 2 | 弥生土器 | 弥生中期後葉 | 甕 | 口縁部 | 石英·長石 | 浅黄橙 | 7.5YR8/6 | にぶい黄褐 | 10YR5/3 | ナデ | ナデ | |
| 3 | 弥生土器 | 弥生中期後葉 | 甕 | 口繰部付近 | 粘土質 | 黄 | 2.5Y8/8 | 明黄褐 | 10YR6/8 | ナデ | ナデ | |
| 4 | 弥生土器 | 弥生後期 | 甕 | 口縁部 | 石英·長石 | 淡黄 | 2.5Y8/4 | 浅黄橙 | 10YR8/4 | ナデ | ナデ | |
| 5 | 弥生土器 | 弥生後期 | 壶 | 口縁部 | 石英·長石 | 黄褐 | | 檜 | 7.5YR6/8 | | ナデ | |
| 6 | 弥生土器 | 弥生 | 壺 | 胴部 | 石英·長石 | 橙 | 7.5YR7/6 | にぶい黄檀 | 10YR7/4 | ナデ | ナデ | |
| 7 | 弥生土器 | 弥生中期後葉 | 壺 | 胴部 | 石英·長石 | 赤 | 7.5R4/8 | 明黄褐 | 10YR7/6 | ナデ | ナデ | 外面丹 |
| 8 | 弥生土器 | 弥生後期 | 壶 | 胴部 | 石英-長石-角閃石 | | | 浅黄橙 | 10YR8/3 | ナデ | ナデ | |
| 9 | 弥生土器 | 弥生中期 | 壺 | 底部 | | 明赤褐 | 5YR5/6 | 赤灰 | 2.5YR6/1 | ハケメ | ナデ | |
| 10 | 弥生土器 | 弥生中期 | 壶 | 底部 | | 橙 | 5YR6/8 | にぶい黄褐 | | ナデ | ナデ | |
| | 弥生土器 | 弥生中期 | 変 | 底部 | | にぶい橙 | | | | ナデ | <u> </u> | 被熱痕 |
| | 弥生土器 | 弥生 | 壺 | 底部 | | 橙 | 5YR7/6 | | | ナデ | <u> </u> | 1 |
| | 弥生土器 | 弥生中期 | 高坏 | | | 橙 | | 橙 | 2.5YR7/6 | | ナデ | 1 |
| | 弥生土器 | 弥生 | 高坏 | 脚部 | | にぶい黄橙 | | 浅黄橙 | 10YR8/3 | ナデ | ナデ | |
| 15 | 弥生土器 | 弥生 | 高坏 | 脚部 | | 橙 | 2.5YR6/8 | | 5YR7/8 | ナデ | ナデ | |
| | 古式土師器 | 古墳前期 | 甕 | 肩部 | | 褐灰 | | 橙 | | | ケズリ | |
| | 土師器 | 古墳 | 臺 | 底部 | | にぶい黄橙 | | にぶい黄檀 | | ナデ | ケズリ | |
| | 土師器 | 古墳 | 菱 | 底部 | 石英・長石 | 橙 | | 橙 | 5YR7/6 | ハケメ | ケズリ | |
| | 須恵器 | 古墳後期 | 坏蓋 | TO AF | 石英・長石 | | 5Y4/4 | 明黄褐 | 10YR6/6 | 回転ナデ | 回転ナデ | |
| | 須恵器 | 古墳後期 | 坏蓋 | 胴部 | 石英・長石 | 灰 | 5Y6/1 | 灰白 | 10YR7/1 | 回転ナデ・工具痕 | | 1 |
| | 須恵器 | 古墳後期 | 坏蓋 | 胴部 | | | 7.5YR7/1 | | 10YR7/1 | 回転ナデ | 回転ナデ | |
| | 須恵器 | 古墳後期 | 坏蓋 | | 石英·長石 | 灰白 | 5Y7/1 | | 2.5Y7/1 | ナデ | ナデ | 1 |
| | 須恵器 | 古墳後期 | 坏身 | 受け部 | 石英·長石 | 炭 | 5Y6/1 | 灰 | 7.5Y6/1 | 回転ナデ | 回転ナデ | _ |
| | 須恵器 | 古墳後期 | 坏身 | | 長石 | 黄灰 | 2.5Y6/1 | 旋 | 5Y5/1 | 回転ナデ | 回転ナデ | |
| | 須恵器 | 古墳後期 | 壺 | 口繰部 | 長石 | 灰 | 5Y5/1 | 黄灰 | 2.5Y5/1 | 回転ナデ | 回転ナデ | _ |
| | 須恵器 | 古墳後期 | 菱 | 口線部 | 石英・長石 | にぶい赤褐 | | 明黄褐 | 10YR6/6 | 回転ナデ | 回転ナデ | |
| | 須恵器 | 古墳後期 | 亚 | 肩部 | 長石 | | | 褐灰 | 7.5YR6/1 | 回転ナデ | 回転ナデ | _ |
| | 須恵器 | 古墳後期 | 亚 | | 長石 | | 10YR7/1 | 黄灰 | 2.5Y6/1 | 回転ナデ | 回転ナデ | |
| | 須恵器 | 古墳後期 | * | 肩部 | 長石 | | 2,5Y7/2 | 灰白 | 2.5Y7/1 | カキメ | 当て具痕 | |
| | 須恵器 | 古墳後期 | 38 | 底部 | 長石 | 養炭 | 2.5Y5/1 | 炭岩 | 5Y4/1 | ナデ | ナデ | - |
| | 須恵器 | 古墳後期 | | 胴部 | 石英•長石 | オリーブ黒 | | | 5Y5/2 | | | - |
| | 須恵器 | 古墳後期 | | 胴部 | 長石 | 黒 | 5Y2/1 | 灰 | 5Y4/1 | 平行タタキ | 当て具痕 | _ |
| | 須恵器 | 古墳後期 | + | 胴部 | 石英·長石 | 養灰 | 2.5Y5/1 | 浅黄 | 2.5Y7/4 | 平行タタキ | 当て具痕 | - |
| | 須恵器 | 古墳後期 | | 胴部 | 長石 | 暗灰黄 | 2.5Y5/2 | 浅黄 | 2.5Y7/4 | 平行タタキ | 当て具痕 | \vdash |
| | 須惠器 | 古墳後期 | | | 長石 | オリーブ黒 | | 灰 | 5Y4/1 | 平行タタキ | 当て具痕 | |
| | 須惠器 | 古墳後期 | | 胴部 | 長石 | 灰 | 5Y6/1 | 灰白 | 5Y4/1 5Y7/1 | | | |
| 20 | 須惠器 | | | 胴部 | | | | | | 平行タタキ | 当て具痕 | |
| | | 古墳後期 | | | 長石 | 灰 | 5Y5/1 | 灰白 | 7.5Y7/1 | 平行タタキ | 当て具痕 | - |
| | 須恵器 | 古墳後期 | ├ | 胴部 | 石英・長石 | | 5Y6/2 | 灰 | 5Y6/1 | タタキ→ナデ | ナデ | - |
| | 製塩土器 | 古墳後期 | - | 胴部 | 石英·長石 | 黄橙 | | 黄橙 | | 平行タタキ | ナデ | - |
| 40 | 三韓系土器 | 弥生後期 | ı | 胴部 | 石英・長石 | にぶい黄橙 | 10YR7/4 | オリーブ褐 | [2.5Y4/3 | 縄目タタキ | ナデ | 1 |

表 3 出土遺物に見る遺跡の活動時期判別比較表

| 時代区分時期細分須恵器編年 | | 弥生時代 | | | 古 | 墳時代 | | | 奈良時代 | | | |
|---------------|--------|------|----|----|----|--------|----------|-----------|----------------------------|-----------------|--------------|------------------|
| | | 中期 | 後期 | 前期 | 中期 | 後期 | | | | 時代 | | |
| | | | | | | 6世紀3/4 | П | 7世紀1/4 前半 | IV 7世紀1/4 後半~ 2/4 | V 7世紀 3/4 | VI 7世紀4/4 | VII 8世紀前 葉 |
| | | | | | | | 6世紀4/4 | | | | | |
| 集落 | 車出遺跡 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | | 0 | | 0 | 0 | |
| | 石路A地点 | | | 0 | | | | | | | | |
| | 石路B地点 | | | | | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 巨石古墳 | 双六古墳 | | | | | • | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | Δ |
| | 笹塚古墳 | | | | | | • | 0 | 0 | 0 | 0 | |
| | 兵瀬古墳 | | | | | | A | 0 | | 0 | | |
| | 鬼の窟古墳 | | | | | | • | 0 | | 0 | | |
| | 掛木古墳 | | | | | | • | 0 | | 0 | | |
| | 対馬塚古墳 | | | | | • | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | Δ |
| 群集墳 | 百田頭3号墳 | | | | | • | | 0 | 0 | | | |
| | 百田頭7号墳 | | | | | • | 0 | 0 | 0 | | 0 | 0 |
| | 釜蓋6号墳 | | | | | | | | | • | 0 | 0 |



写真4 鬼の窟古墳入口



写真 5 鬼の窟古墳石室内



写真 6 双六古墳入口 県内最大の前方後円墳の墳丘の稜線がわかる



写真 7 兵瀬古墳前景



写真 8 兵瀬古墳入口



写真 9 兵瀬古墳石室内



写真 10 百田頭 5 号墳前景



写真 11 百田頭 5号墳石室内

■写真に見る壱岐島の巨石古墳、群集墳、山ノ神古墳の違い

写真 4~9 : 巨石古墳 写真 10·11 : 群集墳 写真 12~14: 山ノ神古墳

入口および前景では、立っている人の大きさから

石室内では中に入っている人数から

巨石古墳と群集墳の大きさの違いを感じることができる。

山ノ神古墳がどれだけ小さいかは一目瞭然。



写真 12 山ノ神古墳にて平板実測(1)



写真 13 山ノ神古墳にて平板実測 (2)



写真 14 山ノ神古墳全景



写真 15 整理作業 (須恵器の拓本どり)



写真 16 整理作業 (土器実測)

参考文献

芦辺町教育委員会 1990『鬼の窟古墳』芦辺町文化財調査報告書第4集

芦辺町教育委員会 2003『百田頭古墳群・山ノ神古墳群・釜蓋古墳群』芦辺町文化財調査報告書第 16 集

壱岐市教育委員会 2005a 『兵瀬古墳』壱岐市文化財調査報告書第4集

壱岐市教育委員会 2005b『笹塚古墳』壱岐市文化財調査報告書第5集

壱岐市教育委員会 2005c 『対馬塚古墳』壱岐市文化財調査報告書第6集

壱岐市教育委員会 2006『双六古墳』壱岐市文化財調査報告書第7集

小田富士雄・下原幸裕 2006「須恵器―双六古墳から壱岐島の須恵器へ―」『双六古墳』壱岐 市文化財調査報告書第7集

壱岐市教育委員会 2006『覩城跡・車出遺跡』壱岐市文化財調査報告書第8集

壱岐市教育委員会 2007『天手長男神社遺跡・原の辻遺跡(原の久保 C 地点)・カラカミ遺跡。 壱岐市文化財調査報告書第 11 集

壱岐市教育委員会 2010『車出遺跡』壱岐市文化財調査報告書第 15 集

壱岐市教育委員会 2011『車出遺跡群田ノ上遺跡』壱岐市文化財調査報告書第 17 集

壱岐市教育委員会 2012『壱岐の島の古墳群〜現状調査』壱岐市文化財調査報告書第 20 集

壱岐市教育委員会 2014『石路遺跡 B 地点』壱岐市文化財調査報告書

勝本町教育委員会 1987 『片苗イシロ遺跡』勝本町文化財調査報告書第5集

郷ノ浦町教育委員会 2002『車出遺跡・戸田遺跡・大谷遺跡』郷ノ浦町文化財調査報告書第 4集

郷ノ浦町教育委員会 2003 『戸田遺跡・車出遺跡』郷ノ浦町文化財調査報告書第5集 田中聡一 2007 「壱岐島の古墳について」『西海考古』7

長崎県教育委員会 1992 『県内古墳詳細分布調査報告書』長崎県文化財調査報告書第 106 集 長崎県教育委員会・郷ノ浦町教育委員会 1998 『車出遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告 書第 8 集





明治期の種子島における異文化交流 ードラメルタン号漂着事件を中心に一

種子島中央高等学校 3年 鎌田廉正





はじめに

種子島は,本土の最南端,佐多岬の南の海上にあり,東シナ海を北上する黒潮の流路にあたるため,古来,漂着船が多く,1543年の鉄砲伝来に代表されるように,外国との交流の窓口となってきた。事実,この島は,戦国期から明治期にかけて外国からの多くの漂着船が記録されている。

筆者は、平成30年7月、AIG高校生外交官プログラムに合格し、3週間、米国に留学した。このプログラムに参加し、17年間住み慣れた種子島を離れ、米国の高校生と交流する中で、双方の文化の違いを痛感するとともに、日本文化だけでなく種子島の伝統文化の価値を再確認することができ、異文化交流の持つ意義に気づくことができた。

帰国後,筆者は,種子島における異文化交流史を学びたいと願うようになり,調べていく中で,明治時代に英国人と種子島の人々が深い交流と絆を育んだ「ドラメルタン号漂着事件」に強い関心を持つようになった。そうした中,ドラメルタン号漂着に関する第一級の同時代史料であり,数十年間行方不明になっていた才川周右衛門日記(註 1)が再発見されたことを知り,筆者は,鹿児島県立中種子養護学校の藤﨑琢郎氏,広田遺跡ミュージアム学芸員の石堂和博氏,中種子町教育委員会の稲垣友裕氏の献身的なご協力のもと,種子島中央高校地歴同好会(仮称)を立ち上げ,才川周右衛門日記の解読などをすすめてきた。

本稿では、明治期の種子島における異文化交流についてドラメルタン号漂着事件に焦点をあて、再発見された才川周衛門日記から得られた新事実などにも触れながら、ドラメルタン号漂着事件における異文化交流の特徴についてまとめたい。

ドラメルタン号漂着事件と異文化交流

ドラメルタン号の漂着事件は、種子島の人々にとって、初めての長期に渡る英国人との接触である。この事件は、明治 27 年の出来事であるため、当時のことをよく知る古老からの聞き書きが残されており、同時代史料としては、才川周右衛門日記などの比較的詳細な記録が残されている。

ここでは、まず、そうした聞き書きの記録や日記などから、当時の人々が異文化と接触 し、交流した際の反応を見てみたいと思う。

なお、引用は、明治 10 年生まれで、この事件を直接体験した名越シオ氏からの聞き書きを中心とし、詳細に出来事が記録されている「ドラメルタン号漂着物語(註 2)」(以下、漂着物語と略す)と再発見された才川周右衛門日記(以下、日記と略す)から主に行う。

「漂着物語」によると、下中の人々は、初めて見る英国人を「肌色、顔付、服装、身振等、総て自分達とは違う異国人」と感じたという。また、当時の種子島では忌み嫌われていた牛肉食を英国人が好んで行ったことに対し、「牛肉を食べるなど、英国人は大変なことをする、汚らしい、なんとも思わないのか。」といった感想を抱き、一部の人は、「その日、一日中食事が喉を通らなかった」と感じたほどに文化の違いに衝撃を受けたようだ。他にも、才川周右衛門邸ほかに宿泊したドラメルタン号の船員たちは、椅子がないことに当惑し、一段高くなっている床の間に腰をおろして座ったため、大変困ったという逸話などが伝わっている。こうした文化的な違いの他にも、人物が前にも横にも写る「千人鏡」と呼んでいた鏡や焼いた餅を英国人に振舞った際に彼らが用いた「とても良い匂いのする、

甘いもの」(おそらくは,バターかオレンジ・マーマレードのようなもの),船員が船と陸の間で行った意思疎通を図る手旗信号などにも,下中の人々は大変驚き,今に口承として伝えている。

また,当時,英語を話せる人物が下中にはなく,種子島全体でもほとんどいなかった。 たまたま,隣の茎永校区の小学校長の伊地知氏が英語を話せたので,困ったことがあると 英国人は「イヂッチー,イヂッチー」と伊地知氏に通訳を頼んだという。

なお,種子島の村の北端にいる通訳の緒方直十氏も英語を話すことができたが,「日記」によると,長くは下中に滞在していなかったらしく,彼の逸話はほとんど残っていない。

このように、種子島と英国は、お互いにとって強烈な異文化であり、異文化間コミュニケーションを図ろうにも、言語が通じず、ごく少数の、しかも常駐していない通訳を介さないと、言語によるコミュニケーションが図れないという状況であった。さらに、異文化コミュニケーションにおいて、一般に、日本の文化は「空気を読む」ことや「状況を察する」ことが重視されることから、ハイコンテクスト文化に属するとされるが、英国は言語による意思伝達に対する依存の強いローコンテクスト文化に属するとされ、両者は大きく言語コミュニケーションのタイプが異なることもよく知られている。

こうした状況であるから、おそらくは、滞在した英国人は、相当なカルチャーショックを感じていただろうし、下中の人々も同じであっただろう。このような環境下では、一般に、自分の属する文化の価値観を唯一の基準として、他の文化の価値観などについて判断する自文化中心主義(ethnocentrism)に陥ることが多いと考えられる。自文化中心主義に陥ると、自文化の優越性を信じ、他文化が劣っていると評価する傾向が生まれるとされ、異文化コミュニケーションを深める上で、一般に大きな障壁となるとされる。また、自分化中心主義は、相手の文化をネガティブなステレオタイプとして捉えることにもつながることが多いとされる。

しかし、「ドラメルタン号漂着事件」における異文化交流は、ネガディブなものとはな らなかったようだ。これまで知られている史料の中で両者が争ったり、深刻な問題が発生 したりした事実は知られておらず、ネガティブな反応として捉えうるものとしては、「漂 着物語」にある,英国人の船員の一人が,ヘビを捕まえてそれを馬上で振り回しながら、 面白がって通行する村人に投げつけたりした出来事が知られるくらいである。また、種子 島人側の反応として、次の逸話が伝わっている。西之村立石あたりの出身で肝玉の太いバ キー (種子島弁で妻のこと) さんがいた。このバキーさんが英国船の船員をつかまえ, 「どこの誰それがあちらの船に乗っているという事だが,その人を知らないかねー」と幾 度も大声で種子島弁を用いて聞いても,通じなかった。そこで,そのバキーさんは,「分 からんもんじゃなあインギー」と言いながら、身振りよろしくその船員をからかった。ま わりにいた人々はその場面が面白くてたまらなかった。このことがあってからか、種子島 では、言葉の分からない人、こちらの話す意図を理解しない人を「インギー」と呼ぶよう になった、というものである。この話もまた、自文化中心主義的なネガティブな反応とし て捉えそうになる。しかし,私は,現在,ジェンダーに関する数々の問題が指摘されてい るが、明治期の種子島で、むしろ、女性が異文化との交流をおそれずに、ジョークもまじ えながらオープンに接したことで、異文化間交流の重要な糸口となった事例という点で大 きく注目したいと考える。

さて、「ドラメルタン号漂着事件」における異文化交流のポジティブな面を紹介していきたいと思う。「漂着物語」によると、漂着船の乗組員、軍艦の水兵は、皆規律正しく行動して、悪事というほどの事は誰もしなかった、下中の人々も、先方に悪意を示したり、危害を加えたりなどしなかった、という。また、船員の一人、ジョーン・スミスは、名前を呼ばれると「ハイ」と返事をした。それだけでなく、「コンニチハ」「コンバンワ」「ニッポン」などの言葉をよくつかって愛嬌をふりまいたという。異文化交流を円滑に行う上では、一般に、他者の文化を尊重し、他者への関心を持ち、オープンであること、新しいことを学習する際の積極性や前向きな姿勢があることが重要であるとされるが、そうした姿勢を両者が有していたことが、これらの事例から読み取ることができよう。

その他にも、異文化交流には、自らの所属する集団、及び他者の所属する集団に関する知識があること、社会レベルや個人レベルで他者との的確なインターアクションに関する知識があることなども重要であるとされるが、明治期の種子島における両者の交流では、次の事例から、当初、両者の交流は、前提として両者の文化を非常にネガティブなステレオタイプにより理解していたことが伺える。

「漂着物語」には、英国船の船員のもとに、英国から手紙が届いた時に、彼らは手紙を読んで泣いた。その様子をみていた下中の人々は「インギーも泣くけりゃー」(イギリス人も泣くものなんだなぁ)と言って不思議がったという。これは、「嘘のような本当の話」と強調されて伝わっている。

これらの事例から、当初、強い偏見にもとづく適切でない他者に対する知識をもっていた彼らが、些細な交流の連続を通して、異文化間交流を改善していったことが伺え、異文化交流において重要とされる、他者の信念や行動に関して直ちに判断を下すことなく、好奇心を持ち、理解しようとする気持ちがあることや、他者の視点から物事を理解・分析しようと努める気持ちをもつことなどを、この交流で実践できていた可能性が高いことが伺えよう。

「ドラメルタン号漂着事件」によって生まれた両者の異文化間交流は,英国人と下中の 人々の間に深い友情の絆を育んだことが「日記」における次の記載から伺える。

「今夜はイギリス人と共に祝いを始めた。イギリス人一人を日本人が挟む形で座り,カンを付けて歌い,手を取ったり引いたりして踊り,賑やかなことこの上なかった。」

「イギリス人も三日滞在の情に惹かれた。(別れの際に)実に互いに涙を落として分かれ、私共の家より途中の所まで見送りをした。」

「イギリス人より夜に、礼物や機物など数品もいただいた。諸品をたくさんもらった。」 また、船員の一人、ジェイムズ・ナッチーは、次のお礼の手紙を送っている。

「簡単にお礼申し上げます。親愛なるみなさん、感謝のいろいろの気持ちをこめてこの手紙を書きます。このわずかの行のことばを持って、貴島における私たちに対する御親切に対して皆様御一同様に感謝いたします。私はあなた方に対する最も深い感謝の念をいつまでも心にとめておきます。私はただいま日本の神戸港からアメリカのニューヨークに向かいます。

やさしい思い出と共に真の友なるジェイムス・ナッチーより 下中のトト様 (お父さん), カカ様 (お母さん) へ」

これらの交流の物語は、口承としても、下中の人々に今も伝えられている。また、毎朝、

下中の小学校の児童は、ドラメルタン号の物語を伝える短文を暗唱し、乗組員にもらった 11 羽の鶏(インギー鶏と呼んでいる。)の子孫を校内の鶏舎で大切に飼育している。ほか にも、交流の物語を次の世代につなげるために、この地域の母親たちが、『母が語るドラ メルタン号物語』という絵本を製作し、地域で両者の交流を劇にするなど、「ドラメルタ ン号漂着事件」は、今や下中地区のシンボルとなっている。

このように、「ドラメルタン号漂着事件」における両者の異文化交流が、非常にポジティブなものとして伝わっている事実は、滞在期間が、4月26日から6月16日の2ヶ月に満たないもので、異文化コミュニケーションにおける、いわゆる「ハネムーン期」の期間内であったことに一因があるという指摘もできよう。だが、私がもっとも重要な要因とみているのが、種子島の人々が、初めて出会う異国の人々から共通点、相違点を見出すことで自然と国際的感覚を身に付けていった点にあると考える。さらに、文化相対主義(cultural relativism)という、一般に、文化と文化の間に優劣はなく、それぞれの文化に独自の価値観や、ものの考え方があるとする考え方があり、異文化の習慣や考え方に出会ったとき、たとえそれが自分の文化の価値観と異なるものであっても、相手の文化を認め、また敬意ある態度で接することが重要であるとする考え方であるが、「ドラメルタン号漂着事件」は、私たちに、異文化交流における文化相対主義的な考え方の重要性も教えてくれると考える。

最後に、英国人との非日常的な生活の中で種子島の人々は国際的な感覚を身に付けていったことは前に述べたがその中でも特に英国など日本とは違う海外の生活に憧れた人物がいる。それは桑畑正樹が「彦次郎少年の密航奇譚」で取り上げた島崎彦次郎である。彦次郎は漁師として働いておりドラメルタン号の事件をきいた。「日記」によると、ドラメルタン号の離礁作業には茎永地区を含む下中の周辺より大勢の人夫が複数回にわたり集められたというから、その中に茎永の漁師であった彦次郎も含まれていたとみられる。彦次郎は、おそらくは英国人とコミュニケーションをとったはずで、その結果、彼は海の向こうの生活に思いを募らせ、ドラメルタン号に密航した。その後、彼はドラメルタン号の下働きとして海を旅し、独学で一級外洋船長の資格を取って海外に移住した。そして、彼の人生についてはあまり記録が残っておらず脚光を浴びることはないが、彼は自分の意志で自分の将来を決め、その時代の慣習にとらわれず、言語も通じない中、ただ自分の見たことない新しい世界に憧れその気持ちのまま行動した。そして自分で勉強を続け、ついにまだ当時国際交流という言葉もない時代に異国の地で成功を収めた。彼の生き様に敬意を表すと同時に同じ種子島に生まれた者として誇りに思う。

おわりに

明治時代は私の曽祖父が生きていた時代である。そして、明治期は、日本がグローバリゼーション化した世界の中で、様々な葛藤をはじめた時代で、異文化交流の原点とも言える。

私は今回の研究を通して明治時代の種子島における異文化交流を見てきたが、それは本当に驚きの連続だった。異文化コミュニケーションにおいて重要とされる様々な素養を、当時の種子島の人々の行動の中に見出したからである。まだ異文化交流という言葉もなく、東洋の文化圏の中にあって、今のように欧米文化が浸透しているわけでもない時代の出来

事であるから、非常に興味深く感じた。明治期の他地域の異文化交流の実態を見ても、このような成功例は少ないとみられる。その要因として、私は、種子島の人々の気質が関係するのではないかと思う。これまでみてきたように、明治期の種子島の人々は、寛容な心、進取の心を持っていた。私は、自身の異文化交流の経験から、この心は、今の種子島の人々にも脈々と受け継がれているのではないか、と感じている。

さらに今回の研究を通して明治期における種子島の生活状況について知ることもできた。 日記の中で、漂着時に役場員や郡役所員、警察署長などが出勤していることから当時の自 治体制を見ることができ、前述したような当時の食習慣も見ることができた。明治時代は、 今の私たちの生活や文化と直接関わりのない、遠い昔の出来事と感じていたが、その時代 の日記を読み解き、当時の異文化交流を紐解く中で、今に生きる私たちに多くのヒントを 与えてくれることに驚いた。

今回の研究は、私にとって初めての長期にわたる研究であり、多くの学びや楽しさがあった。特に、多くの文献を参考にしながら研究していく中で、どの資料にも共通する事実を見つけたときに、歴史が私の中で姿を現した気がした。

最後に今回の研究で多大な協力をいただいた皆様に感謝申し上げたい。

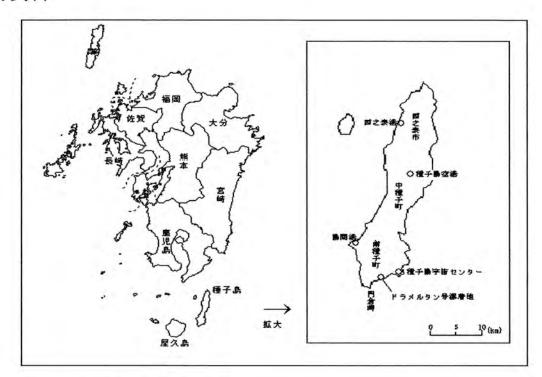


図1 ドラメルタン号漂着地の位置



写真1 才川周右衛門の肖像写真



写真3 インギー鶏



写真 2 才川周右衛門日記



写真4 ドラメルタン号の写真



写真 5 ジェイムズ・ナッチー のお礼の手紙



写真6 古文書読解の様子



写真7 現地調査の様子 (インギー鶏)



写真8 ドラメルタン号漂着の碑

本文 引用文献・註

註1) 1873 才川周右衛門 「才川周右衛門日記」 参考資料として読み下し文を掲載

註 2) 1979 名越覚次郎 「ドラム・エルタン号漂着物語 (一)・ (二)・ (三)・ (四)・ (最終回)」 新聞『離島民友』第 30 号 ~ 第 34 号

ドラメルタン号漂着事件に関する研究史 種子島中央高校3年 鎌田廉正

ドラメルタン号漂着事件とは、次のような事件である。明治 27 年 4 月 25 日午後 11 時頃、英国から上海経由でニューョークを目指していた英国帆船ドラメルタン号が、種子島神で座礁し、南種子町下中の前之浜に漂着。6 月 16 日に英国

東洋艦隊に救出されるまでの約2か月間、主に英国籍の船員29名が下中に滞在し、種子島の人々と異文化交流が行われた。彼らは、下中の人々にお礼に11羽の鶏を贈り、その鶏は、イギリス人をこの地域の方言でインギーと呼んでいたことにちなみ「インギー鶏」と呼ばれ、今も下中の人々によって大切に育てられている。また、ゼラニウム(この地域ではインギー花と呼ばれている)なども贈られたとされ、両者の交流の物語は、この地に今も息づいている。

明治時代の種子島における異文化交流の代表例は、米船カシミア号の漂着事件(1885 年)と英船ドラメルタン号の漂着事件(1894 年)である。カシミア号漂着事件については、1899 年刊行の南島偉功傳(註 1)で紹介され、種子島における最初の郷土誌の一つとされる種子島郷土誌(註 2)などにも記載があるなど、この島における異文化交流の代表例として紹介がされてきた。

一方で、英船ドラメルタン号の漂着については、今回、再発見された才川周右衛門日記といった当時の記録や当事者に対する聞き書き記録などを除くと、1942 年刊行の南種子村沿革史(註 3)が最初のまとまった記録である。南種子村沿革史は、岩坪増五郎氏が南種子村議会より委嘱を受けて編纂したもので、当時の古老よりの聞き書きなどからまとめたものとされる。簡潔ながら仔細な描写もあり、才川周右衛門日記の記載内容と一致する点も多く、同日記を参照している可能性もある。つづいて、1960 年に刊行された南種子町郷土誌(註 4)には、主に南種子村沿革史に依拠しながらも、インギー鶏の特徴について新たに紹介されている。

同時代史料としてほぼ唯一のものである才川周右衛門日記は、ドラメルタン号漂着事件の実態を知る上で、第一級の不可欠な史料とされ、頻繁に才川家から研究者へ貸し出しがされたという。そうした中、1960-70 年代頃に、才川周右衛門日記のうち、ドラメルタン号漂着の記録のある明治 27 年前後の日記が失われた、とされてきた。不幸なことに、その紛失は才川周右衛門日記が活字化される以前であったため、それ以降の研究・記録は、古老等からの聞き書き調査と、インギー鶏の生物学的な調査が主流となっている。

インギー鶏の生物学的な調査・記録は、地元医師である森越功氏によるもの(註 5) と、研究者によるものとがある。研究者による調査は、鹿児島大学の橋口勉氏により 1970 年代からはじまった調査が嚆矢である。橋口によると、インギー鶏の最大の特徴は、尾骨・尾羽の数は一般的な鶏と同数であるが、尾羽はその全てが縮れ、薄く長いほっそりとした軸を有するために、尾がないように見える点にあるという(註 6)。田名部雄一は、本種の特徴を「単冠、赤耳朶、脛色は黄で、尾羽の発育が不全であるが、無尾(Rp)遺伝子によるものではなく、別の遺伝子(Hy)による。羽色は赤であるが、コロンビア斑を欠き、全身赤。」としている(註 7)。

また、本種に対する橋口尚子らによる「インギー鶏は、中国東南部が原産の鶏と考えられるが、南種子町に土着化する 過程で、(淘汰と更新によって)原種とは(形態が)異なる固有種として確立された」(註 8)と評価した。鮫島正道氏 は、橋口や田名部が抽出した属性は、本種の特徴を捉えているとみていいとし、一方で、鞍部の形態などにも本種の特徴 が認められることから、インギー鶏を九斤種の系統に属すると判断している。また、インギー鶏の他種にない特徴的なそ の形態は、100年以上にわたる淘汰と更新によって、下中地域の人々によって固定化されたものであることを指摘した (註 9)。

古老等からの聞き書き調査記録については、南種子町出身で、大妻女子大学教授であった名越覚次郎氏が、明治 10 年 生の名越シオ氏から聞き取った内容を中心として報告しており(註 10)、ほぼ同様な内容を、新聞「離島民友」(註

11) 及び「たねがしま」第1号に再掲している。

その他、日高稔典氏、古市十衛氏がドラメルタン号漂着の聞き書きを紹介されている(註 12、13)。種子島研究第 5 号 (註 14) では、才川周右衛門邸の間取り図が、また、種子島研究第 17 号では、当時のインギー鶏の飼育状況を簡単に紹介されている (註 15)。下野敏見氏は、タネガシマ風物誌の中で、ドラメルタン号とインギー鶏の概要を述べている (註 16)。

才川周右衛門の子孫である才川貞巳氏は、ドラメルタン号が漂着した下中校区にある花峰小学校の 100 周年を記念した 冊子に、ドラメルタン号とインギー鶏について寄稿されている(註 17)。また、同校では、児童へドラメルタン号の物語を語り継ぐことを目的に、『インギー心の記念樹』(註 17)と『母が語るドラメルタン号物語』(註 18)を刊行している。これらの書籍は、当時の花峰小学校の教員が中心となり新聞記事を引用し、地域の古老より話を聞いてまとめたものとされる。

柳田栄子氏は、自身の祖父であり、ドラメルタン号に最初に泳いでいった人物の一人である「羽生大平」より聞いた内容をまとめている(註 19)。

桑畑正樹氏は、南日本新聞紙上に 1998 年に連載した「インギー夢と絆」を中心とするドラメルタン号とインギー鶏にまつわる記録を、単行本にまとめている (註 20)。同書は、これまで紹介した文献や古老からの聞き書き等をまとめ、新聞記事としたものを主体とするもので、ドラメルタン号漂着事件について、詳細にまとめている。ただ、才川周右衛門日記が当時、行方不明であったため、同日記の内容については触れていない。

鹿児島県官報(1894年5月7日付)によると、ドラメルタン号は、種子島に漂着する以前に、中国上海に寄港したことがわかる。

なお、南種子町では、長く船名をドラムエルタン号と呼び伝えてきた。しかし、1997 年 7 月 21 日の南日本新聞朝刊に 掲載された島崎保彦氏によるドラメルタン号の写真発見のスクープ記事によって、この船の名称は、ドラメルタン号であ ることが判明し、以後、呼び名が修正されている。

ドラムエルタン号という呼び名の文献上の初出は、南種子村沿革史(1942 年)の「此の船は・・・(中略)ドラムエルタン號乗船員二十九人・・・」という記述である。同時代史料を見てみると、才川家に伝わる才川周右衛門日記他関係資料には、風破船などと記載されているだけで、船名については、記述がなく、乗組員などの名刺にも、彼らの名前や住所は書かれているものの、船名の記載はない。他の史料では、鹿児島県官報(1894 年 5 月 7 日付)では、「英国ケルシンジャーブリー会社所属風帆船ブメルタン号」とあり、「困難船及漂民救助雑件・英国の部」9 巻(外務省外交史料館蔵)には、1894 年 5 月 4 日付電報として「英国風帆船ドルメルタン号」の記述がある。こうしてみると、同時代史料では、ブメルタン号、ドルメルタン号などと呼ばれていることがわかる。南種子では、この船の名称をドラムエルタンと聞き伝えてきたか、船名の英語表記「DRUMELTAN」を直読みし、ドラムエルタンとしたか、そのいずれかが原因で、おそらくは、ドラムエルタンという名称が定着したのだろう。

(引用文献)

- 註 1) 1899 『南島偉功傳』
- 註 2) 1929 榕城尋常高等小学校 編 『種子島郷土誌』

- 註3) 1942 岩坪增五郎 編 『南種子村沿革史』
- 註 4) 1960 南種子町教育委員会 編 『南種子町郷土誌』
- 註 5) 1970 森越 功 「インギー鶏について」『種子島民俗第 20 号』 種子島科学同好会編
- 註 6) 1978 T. HASHIGUSHI, T. FUJISAKI, Y. MAEDA AND M. TAKETOMI :Br. Poult, Sci., 19, 487-490,
- 註7) 2006 田名部雄一 「インギー」 『世界家畜品種辞典』正田陽一監修 東洋書林
- 註 8) 1997 橋口尚子・田中浩人・長谷学・和田洋 「インギー鶏の飼養状況および性能調査」 『鹿児島県養鶏試験 場報告』35 号
- 註9) 2013 鮫島正道 「鹿児島県南種子町のインギー鶏」 鹿児島県文化財保護審議会資料
- 註 10) 1975 名越覚次郎「ドラム・エルタン号漂着物語」『源三郎』第 16 号 源三郎同人会
- 註 11) 1979 名越覚次郎 「ドラム・エルタン号漂着物語(一)・(二)・(三)・(四)・(最終回)」 新聞『離島民友』 第 30 号~第 34 号
- 註 12) 1975 日高稔典 「源三郎雑感」『源三郎』第 15 号 源三郎同人会
- 註13) 1975 古市十衛 「源三郎を読んで」『源三郎』第15号 源三郎同人会
- 註 14) 1967 鹿児島県立種子島高等学校郷土研究部 『種子島研究』第 5 号
- 註 15) 1979 鹿児島県立種子島高等学校郷土研究部「(3) インギー鶏」『種子島研究』第 17 号
- 註 16) 1969 下野敏見 『タネガシマ風物誌』 未来社
- 註 17) 1980 才川貞巳 「インギー鶏の由来」 『花峰小学校 100 周年記念誌』
- 註 17) 1999 花峰小学校 『インギー 心の記念樹』
- 註 18) 2000 花峰小学校家庭教育学級 『母が語るドラメルタン号物語』
- 註19) 1999 柳田栄子 「ドラメルタンと前之浜」『みなみたね物語』 南種子町地名研究会編
- 註 20) 2008 桑畑正樹・島崎保彦 『彦次郎少年の密航奇譚 英船ドラメルタン号と種子島の人々 -インギー夢と絆 -』

添付資料「才川周右衛門日記読み下し文」

明治拾六年七月十五日製

才川周右衛門

本夜午后十一時比英國

明治廿七年四月廿五日

明治廿七年四二月廿五日

周助羽生太平進候各自直二集リ薪木ヲ過日分御集也火ヲ起 キ陸人蓋ヲ人家江通達シ夫ヨリゟ船体江直集タルモノ才川 風雨降り振方クレナリ者口口川尾ノ丑方東直セシ也発見人 シ酒宴シ候 ハ真所之羽生嘉助塩タキニ候発見也船ハ火花ヲ五発上ケ鷲 本夜ハ英國船午後十一時比前濱へ難船達着致候該夜ハ南

廿六日南風雨天

センカ為数名ツヨキモノヲヘカセ当地ノ船モツキ浜口上陸 本日モ引續キ未明ヨリー般人民直集リ難船中客ヲ上陸サ

難船ヲ直ニ当又本船パンテイラヲ浜ゟ船中乗候弐拾九名上パッテーラ(船)

名ナリ 陸サセ候養物品所御宿三ケ所周助方八人覚蔵方拾名私方拾

仕当日午后八時比帰村セリ 本日ハ西ノ表警察署へ通知者験知周助馬乗才川仁市出

昨廿五日之晩ハ西ノ巡査名越巡査長通知直々出仕致候

昨日夜八難破船江通知者太平治仁市畩助三名夜ルヲヘ

关処当辨分カラス出仕重シテ読候西ノ巡査名越巡査分

茎永ノ教員伊地知氏而分リ始メテ英國分リ候左之通而

右三名

壱円五十銭御禮与タリ

世七日西風晴

役場貧上賽勇蔵氏教員伊地知出仕拙宅江止宿

本夜ハ英国人ト共二祝ヲ始メナニヲリカンヲ付 ウタ

ヲトリ為シ

日本人モ英人壱人アイハサミ坐シテヲ引テヲトリ実ニ

事此上ナシ

ニキヤカシキ

廿七日西風晴

本日郡役所貧羽生能藏警察署長通辨者緒方直十殿日高

殿出仕セリ上妻貞治方宿

世人申

本日当地御役負難船江帰又英國人三ケ所ノ宿と廿一口本

船へ出仕致候

廿八日西風晴

モ午后十時比御出仕候三拾名程夫出仕セリ 時比而養物運ヒ方大引込ミ下中斗而ハ夫方迄兼西ノ村江 本日ハ郵便三島船本嶋へ入付該船江乗候出発シ候午后十

私共家ゟ中ハカリノ所迄見送り為シ候 英人モ三日滞在ノ情ニヒカレ実ニタカイニ泪ヲ落シテ分

英人ヨリ禮物又機物夜数品モ事為候諸

品澤産賞候

世日

英國養料品多数候所也本日役場負上妻勇

蔵氏遠藤某人氏通辮者伊地知茂七氏出仕セリロノ上所候

一、難船帆梶木紛失直シ難キニ付村民并ニ直正中得候ヲ以て

酒為シ关鶏得候本夜ヨリー時壱人分両為シ

民ゟ御禮致候此節役場貧河東時寄氏覚蔵氏方出仕アリ内 候也口火消シテハ酒会祝会私所候船ランブ貸與へ、村人

三名ヲ得テ貸致关請負人口口若松拾左衛門ニ傳ス

四月廿九日ヲ両厳シ先ニ記

役場貧出仕シタルニ付御品ニ御帰出来兼午后私ヨリ当邑役 本日未明 三嶋船出発到候左之通伊地知殿二出仕致候同

場諸品為シ候処午后口時前上妻勇蔵御出仕致候夜中週一御

兼時々二應ジ关

旧三月廿九日

本日苗床置シカ勢人口江門見付三人周助口口口周太郎下本日苗床置シカ勢人口江門見付三人周助口口口周太郎下

人休市太平致候十二時比迄仕致口候

記

廿七年 旧四月二日

本日午后六時比英国船御調へシ為本県警

江止宿致候人名左ノ通リ 察署警官并二種子島警察熊毛郡役所西ノ請捕巡査出仕拙宅

保安課長口口警官 高岡口口氏

巡査部長 南七郎氏

警備巡査 佃識将義氏

郡役所官吏 羽生能蔵氏

西ノ巡査名越氏出仕セリ

五月六日

本日滞在諸品被調致候

茎永巡查本田氏御出仕致候

役場員上妻勇蔵氏遠藤栄一氏口 勇藏午后七時迄所出候 泉蔵出仕致候也上妻

五月七日

佃識将義氏西ノ表方帰村致候 廿三日晩ヨリ廿七昼頃迄

五月八日

リ当又風破舩ゟ帰舩貧弐名モ同時出仕セリ難船江一時間位 比汽船沖海江入付該船ヨリ風破舩々中口入始各乗御出仕セ 本日ハ風破船帆梶之カケタモノ并二両人御調而午后弐時

モ乗詣 口 并二船改致候舩者入札拂舩 口 詣得ナリ舩酒為一 ****

等運テン助手各帆前長大工三名致拙宅江宿セリ

御着人南七郎氏羽生能蔵氏本田氏午后ヨリ覚蔵殿方移

本縣警午后汽船ヨリ出縣致候

南氏羽生氏本田氏有留氏三名ハ五日晩ヨリ八日昼時ヨ

リハ時迄宿候

五月九日

昨日ハ種子嶋警察署長半原氏所下リ候也宿ハ覚蔵方ナリ

五月十日

本日直十通知人詣候二付口柱木運并御直候

五月十一日

本日村長并伊地知出仕致候本日午後ヨリ各字所一般人民

口ケ出口シ物品船エヲ通知シ引渡致候

五月十二日

本日ハ警察署負郡役所負西ノ表帰所致候

英國人ギラニヤ子買入方西ノ表江熊毛口口

拙宅关英人午后船江出仕シタリ

五月十三日東風晴

本船役場員茎永巡査帰宅候也西ノ巡査本夜帰宅候

昨日西ノ表江査上セリ吏共者午後八時比帰致候和ギラ

ニヤ子シリ伴向四日ロロハ伴向ロロロロ六日英人江舩 ****

昨日八高岡秀口口ステ直十太平关口口口

英人午后船見所差越候見改口口口重二付上船調置帰所

五月十四日

本日午後西ノ巡査御出仕候左之通英人今晩船見シ所三人

共二差越大箱口上陸シタリ 五月十五日

本日午后伊地知茂七氏御出一泊致候英人ハ船乗り布フリ

下シタリ

五月十六日

本日西ノ巡査出仕セリ伊地知氏ハ生誕日付帰便致候

四月十日

五月十七日当ル本日西ノ巡査出仕拙宅而仕候午后六時比

口祝事

沖事御口ヨリ来候

五月十八日

長崎ゟ出帆

破舩長コーエル数名検査致候見伺ゟ御運為シ兼四時位運艦 留置其ヨリ直ニ長崎之舩帰付候 本日午前十一時比英國運艦本嶋江入付モ十人両人并二風

五月廿二日

五月廿二日

本船運艦入着風破船船長モ出仕セリ別ニ長崎縣庁

役人壱人英國人数十名出仕本日ヨリ船帆ハシメ梶 口 ヲロ

口着手シ候

茎永ヨリ人夫五拾名伝来リ

長崎縣庁高橋元吉云人ナリ

風破船長コーエル云人ナリ

支那人弐名

英国人三拾数名

右ノ数名船道具ヲロシ着手為シ候高橋氏ハ今夜ヨリ踏査

五月廿四日

本日部長牧野氏御出仕致候

鹿児嶋縣長崎壱名警察署警官壱人出仕セリ 種子嶋警察署部長モ他各字巡査モ同時出仕

五月廿五日 西風晴

本日ハ高橋氏弐時宿候仕事ハ前日同様

五月廿六日南風晴

本日平山西ノ下中ニテ百名ノ人夫ナリ

五月廿七日 高橋氏一時モ養セス者宿為候

五月廿九日 前浜二关運艦壱セキカイ置被入方候長崎江出航セリ 本日ハ運艦四入着シタリ高橋氏ト三時調査出仕也昼時ハ

本日ハ午後ヨリ雨下り关夫方夜業止り候

六月五日 内又本日午后ヨリ拙宅江宿セリ左之通リ 越候漂着船本船引出方所梶帆木用具積メル斗候漂着船中之 六月三日南風雨天 出仕候夕時所宿候 五月世一日 五月三十日西風晴 六月七日 江モ招待為シ数人ニギヤカシキ事ニ关伊地知氏御 六月二日南風雨 六月一日南風雨 ヲキニロタリ 本船船長西ノ表出仕致候者人馬ハ羽生太平才川仁市口差 伊地知氏帰村候 本日モ各字ノ人夫数人来タリ 帆前長三人大工壱人 六月四日晩ヨリ運テン助手弐名本船江帰上船ス 本日ハ漂着船運艦ヨリツナヲ引关本夜ヨリ四日 本日ヨリ英國両人前浜へ出仕船具ノ集為候也 本日伊地知出仕昼時踏査候午后帰宅セリ 本日松蔵之墓石立付ニ付キテ同時致候 本日役場員始メ有志各字使丁□□□□警察署員 ロロイハ三名加勢シ帰為候 六月十四日 知添田ゟ上ノ迄植仕シ候 ロロ駄助三人口ロナリ人名 五月十八日当ル南風晴天 六月廿日南風晴 六月九日 六月十七日南風晴四五月十四日当ル 夫ヨリ沖海ヲ進ミ東ニ向テ行ケリ 六月十六日 六月十五日南風晴 ノ口口口難キ付出仕為シタルモノト信ズ 一進メ同時浜場差越シ薪木ヲ以テ火起シ候 本日モ前日同様今晩船具場江出仕致シ御話ニ付私ヨリ特 本朝七時比運艦入付美風南風ハゲシキニ付難破船ノ所テ 本日ハゲンブ茎永伊地知方江差越也帆ケダ口本日迄候夫 本日モ前日同様船具場江出仕セス伊地知殿今晩出仕致候 本日田植始メ為シ关左之通莖永ゟ加勢人松原平蔵寸ト爲 本日モ田植力勢人並永ノ三人并ニ当村ゟ屋?三人為帳記 六月廿一日 上中ノ五名ノ宿ハ私方引受宿候 七月四日 江直々請負也口口左ノ通リ 致候第五国立銀公ヨリ請負へり通知書通知等西ノ巡査名越 のゟ直々拂关本日スコシ雨下リ关今夕方伊地知氏御出仕候 氏西ノ表出仕ニ付出仕ヲ以上妻剛 口 江壱時 ***** 六月廿八日南風 六月廿七日 六月廿四日 植付モ御久 六月廿三日南風晴 六月廿二日南風 一宿致候 本舩未明二莖永江帰宅候 口莖永孫七郎ゟ英人ゲンブ殿買入致候者代金ハゲンブと ロロー反ロロロロ 本朝ゼギブソン江長崎ゟ郵便ゟ書面達セリ 本日宮田田植為シ美口口田若松口口キニ付 本朝雨少降リー般況口 英国人宿禮言ロニ付金三円候鹿児縣内務第四課ヨリロ渡 内三円 金九円六拾戔 三円 代金七十菱 記 周太郎渡ス 周助江渡ス

舩ナリ 七月十八日 舩一ヲ引入着セシ也英国漂着舩口荷積方出仕口也舩三菱ノ 廿七年七月十七日 七月九日 舩梶原八郎氏ゟ請負口所候也 七月廿日南風晴天 七月九日 浜之様出航致候也ロロ見送り此時口口出仕また。 本朝ハ氣舩ヨリゲンブソンジョン両名トモニ七時比乗艦 伊地知氏去八日夕方出仕本舩帰所致候 右之通記关也 為シタガイニ見口口マ子キ為シテ分レ关 本日ヨリ帆口十積入為候也氣舩本夜去 金壱円弐拾菱 鹿児島出発セリロロ十九日ノ晩又前濵へ入着ロリ关也 本日午後町中宿ゟ前濵へ出仕口口吞致候七時乘舩直帆前 右英国人宿泊ニ付口使夫御両人迄西ノ表沖海江口口口本 壱円 弐円 六拾斐 源藏氏方也私所候 請負也 口口江渡ス也覚蔵氏出付之シロロロロ 虫 まぃ 覚蔵渡ス 羽生太平 有留十助 八月二日 旧八月廿九日 口口 方入舩ス也乗組負 浜口江八月二日帰宅為シ关 八月十一日西風 ヲ五名差越十二時比迄出仕致候帰リ為也 明治廿七年八月西風晴天 口迄仕リ关 候口出口口也 年舩大口晴一両カラヲ國ニ拂ヒロタル年ナリロ出召口承リ 着病人為モ状氣ニキ居口口口為シ仁市口ハ直返リ口拙者ハ 直二出発也馬乗リロ引仁市ヲ例出仕為候御処帰ゟ十二時比 本日十二時比前濵英国人漂着舩ノ々具積口 明治廿七年旧七月十口日 本日大四郎(有田) 栗生屋人三次郎 仁市 拙者本年御年四十九才生月八五月十九日生ナリ生年日本 左ノ通り 明治廿七年旧六月廿六日東風 金壱円也 昨日ヨリ道路所直致候字立切揚口下リ 本日□□英□□名□為シ差越候処休角□□召休其時休角 本舩ハ真所ヨリロ市ト云者ロ病気煩ヒニ付使者入置拙宅 ロロロロロ孫蔵拾江門口七周太郎四名西之表ヨリ出仕口 貞治 氏占 太平拙者之 右口口甑島蔵八氏江口元口覚十江送並永役場而直二口口候 九月十八日 明治廿七年旧八月十一日 年第口十月十日 風二迫り二時比迄二止り例年ノ不風ゟヨリロロツヨキ風ナ 旧九月十四日 内弐円入 廿九年旧口 牧田壱□六□周太郎助カ□□ 比処□□云□□□□氏置 拾壱円四十五戔 宅ニ請ロロ負候ロロ田ロロロリシ也 右上妻勇蔵ゟロ又口八助氏ゟ泉蔵氏 廿七年十一月九日 金弐円也 御助江ロス 廿七年九月廿九日 旧拾月廿口日 金四拾円也 鹿児島縣藥賣シャカ木 本日午前十一時比ヨリ大風記也風本東風ゟ午后十二時西 壱円前口口ト口五戔渡ス 内拾円也 ロロロヘ写シ 金弐拾円也 十月十二日 口太郎 口市口口五口口請負候 三円也 下仕置口口アロロス 口左衛門江渡ス 良蔵氏キリロ伐口口買入廿七

佳作ポスター

(高等学校等コード順に掲載)

享保期幕府代官 池田喜八郎による忘れられた水利改良

歴史研究部 櫻井聖人・関口董

はじめに

栃木市新井町に人名がつい た沼がある。おそらく開発命 令者であり、忘れられた開発 があったのではと考えた。明 治18年(1885)の皆川八ヶ 村『地誌編輯材料取調書』 (以下『地誌』と略称) や明 治9年(1876)の地籍図、泉 川条里跡の研究成果などでこ の仮説を検証した。



『地誌』新井村表紙

栃木県立学悠館高等学校

1. 栃木市新井町・泉川町・大皆川町 の地勢 (右地図)

栃木市は関東平野の北端、日光山地の裾 部に位置する。北西の皆川地区東部は、永 野川左岸、砂礫層上にローム層が堆積した 低位台地で、南に緩かに傾斜する。

この地域は古代からの遺跡が多く. 条里跡の地割もある。赤津川放水路は栃木 市街地を洪水から守るため、昭和26年 (1951) に竣工した人工の水路である。

木八橋







中班行 西土 恐惧 1222332

『地誌』新井村 管轄沿革(左)溝渠(中)橋梁(右・喜を木に訂正)

『地誌』新井村・泉川村・大皆川村の記載から(左写真)

享保9年(1724)より代官池田喜八郎が新井村・大皆川村を支配。 新井村の木八堀は喜八郎のことだろうか。木八橋では「喜」を「木」 に訂正している。本来は喜八であった可能性が高い。享保10年 (1725) 東新井村のうち360石を大久保伊勢守が領有する。

木八沼は今も存在する。小さな沼で東に水路が伸びる。木八堀に違 しかし地元に伝承は何もなかった。

泉川村永沼堀の水論や、大皆川・泉川・箱森三ヶ村と片柳村との水 ないら、この地域で水の分配が深刻な問題であったことが分かる。





木八沼の現状

東から南に向かう木八堀

3. 幕府代官池田喜八郎と享保の改革

私たちはネット検索で喜八郎の年譜を作成した(右表)。享保の改革の大規模開発に飯沼新田がある。喜八郎は代官として担当した。エ 事前に天領替えが行われたが、東新井村を大久保と二給したのはその 代替地だろう。同時に喜八郎自身も支配地で開発を行ったに違いない。

|) 調かり、 | この地域で | 水の分配か深刻な问題でめったことか分かる。 | | | |
|-----------|---------|------------------------|--|--|--|
| 年 | 西曆 | できごと | | | |
| 延宝6年 | 1678 | 生誕 | | | |
| | | 勘定役として6代将軍徳川家宣に仕える | | | |
| 正徳3~享保2年 | 1713~17 | 関東代官 江戸在陣 | | | |
| 享保2~9年 | 1717~24 | 九州代官 豊後高松在陣、生目神社で和歌を詠む | | | |
| 享保7年 | 1722 | 荻原乗秀と共に上総国東金を視察 | | | |
| 享保9~14年 | 1724~29 | 関東代官 江戸在陣 | | | |
| 享保14年 | 1729 | 手代の不正により処罰され小普請に入る | | | |
| 享保18~19年 | 1733~34 | 許されて出羽代官に復職 寒河江在陣 | | | |
| 享保19~元文4年 | 1734~39 | 美作代官 倉敷在陣 | | | |
| 元文4~寛保3年 | 1739~43 | 摂津代官 大坂在陣 | | | |
| 宝暦元年 | 1751 | 致仕(隠居) | | | |
| 宝暦4年 | 1754 | 77歳で没 | | | |
| | | W + - +0 - 10 - 4 | | | |

池田喜八郎季降の年譜

4. 泉川条里跡の水利と新田開発

喜八郎はどこをどのように開発したか。鍵は泉川 条里跡の存在であった(下図)。

今は埋立てられた天沼には、天満宮があり弁財天 も合祀されている。天沼を水源とする天神堀は主要な用水であった(右写真)。

これらは泉川条里跡以来の水利システムに違いな い。木八沼も天沼のすぐ東である。喜八郎の開発は、 水量を増やして条里制を再利用する、小規模で効率 的なものだった

地籍図風野村に字元新田がある。喜八郎が開発さ せた可能性がある。または水量を増加させて、水論 の発生を抑え、米の増産を図ったのかもしれない。





境内東側の市道が天沼跡



錦着山の方向へ南流する天神堀



泉川冬里跡・『栃木市遺跡分布地図』に加筆 (天神堀は条里地割に沿って南流する)

風野村地籍図の字元新田



地籍図の天沼と木八沼 (付近は泉川条里跡の水源地)

赤津川放水路と瓦工場

5. 水田にかかわる地域の歴史

新井町・泉川町の特産品である瓦は、 水田下で生成された良質な粘土を原料に している。赤津川放水路建設に対して新 井町では、先祖からの水田を守りたいと 激しい反対運動があった (左写真) の地域では水田を大切に思う心情が強 かったことが分かる。

おわりに

享保の改革を背景に幕府代官池田喜八郎が新井村で、条里制を再利用 した小規模で効率的な水利改良を行ったと推定した。飯沼新田のような 大規模なものばかりでなく、このような村レベルのきめ細かな開発が各 地でおこなわれたなら、全体的には大きな生産向上となったに違いない。

<主な参考文献>

『石下町史』常総市/デジタルミュージアム1988年

『栃木市史』通史編 栃木市史編さん委員会1988年 『栃木市史』 史料編・近世 栃木市史編さん委員会1986年

『栃木市遺跡分布地図』栃木市教育委員会2015年

『水海道市史 上巻』常総市/デジタルミュージアム1973年 ※史料提供は栃木市教育委員会、掲載写真は部の現地調査で撮影。

「和戦一如」の地、東金城 ~本土決戦の要と「文化の礎」~ 歴史研究部 市原中央高等学校

I はじめに

「本土決戦本土決戦と云ふけれど、一番大事な九十九里浜の防備もできておらず(中略) 之でどうして戦争に勝つことが出来るか。」

これは、昭和20年(1945)8月10日の昭和天皇の言葉である。昭和天皇が戦争をやめる 決断をしたのは、九十九里浜の防備が出来ていないという点が大きかったことがここか ら感じられる。

千葉県東金市にある「東金城」【図1】は、前述した九十九里浜の防衛の要であり、本 土決戦の中心となるであろうと思われていた場所である。結果として戦いの場とはなら なかったその場所は、戦争と平和とは何なのか考える重要な材料となると考える。

その東金城跡の多くを占める「御殿山」の所有者、小川幸三郎さん【図2】等東金城跡に、第二次世界大戦中・戦後関わった方々に取材をした内容や、東金城跡の麓にある東金高校の校務日誌などの史料、東金城周辺の石造物、防衛研究所の資料などから、戦争と平和に関わるこの場所の存在音差について、その価値を考えていきたい。

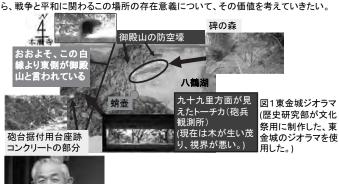




図2 小川幸三郎さんの写真

Ⅱ小川家と近衛師団の関わり

御殿山のサイン帳から、大正8年(1919)6月1日に、成東中学校行啓記念献上写真記念会が開かれたことが分かり、そのサインの中に「近衛歩兵第二連隊付、陸軍歩兵少佐利根政喜」の字がある【図3】 そこから、天皇と皇居を警衛する部隊である、近衛師団の少佐が御殿山を訪れていたことがはっきりと分かる。

更に、大正10年(1921)11月14日の手紙**【図4】**には「近衛師団機動演習二際シ尊家宿泊二際シテハ種々御世話二相成、難有奉存候」とあり、大正時代、近衛師団の機動演習に来た「壬生東宮武官」すなわち、大正天皇の皇太子(後の昭和天皇)付きの武官による、宿泊させてもらったことに対する謝礼の手紙であると分かる。

これらのことから、演習という面での<u>戦争</u>と、行啓を記念する記念会という<u>平和</u>的な形の両面で、小川家が近衛師団の人物と関わりがあったことが読み取れる。

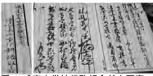


図3 成東中学校行啓紀念献上写真 紀念会中の、近衛歩兵第二連隊附、 陸軍歩兵少佐 利根政喜のサイン



図4 壬生東宮武官から小川荘三郎さん 宛ての手紙

Ⅲ戦時下の東金市周辺

①東金城の防備

関東平野への侵攻作戦に備え、御殿山を含めた東金城跡には防空壕や、一人用の 塹壕である蛸壺などが作られた【図1】 展望台からトーチカへと続く道は、現在は鬱蒼 としているが、戦時中の御殿山ははげ山であったそうだ。連合軍の上陸が予想された 地の一つである、九十九里浜を見張る地点とするのには丁度良かったといえるだろう。

②東金市への機銃掃射

幸三郎さんは御殿山にて、米軍機に対する機関砲での応戦を見たことがあり、その際、米軍機は低空飛行でパイロットの顔まで見えたという。東金市に疎開してきていた、東京都本所区(現墨田区)の菊川小学校の生徒の手記にも、機銃掃射が酷く、一日中御殿山に掘られた横穴の壕から出ることが出来なかった、という内容の記述がある。

③東金市の疎開児童と、兵士の食糧難

旧制成東中学校に駐留していた近衛歩兵第三師団の兵士の食料は、<u>小麦と大麦のみのぼろぼろのご飯</u>であったという。また幸三郎さんの証言では、当時の兵士は<u>アマガエル等を焼いて食す</u>こともあったそうだ。戦時中は兵士も食糧難であったのだ。

しかし、疎開児童だった酒井喜美子さんは、同じ東金高等女学校に寝泊まりすることになった範部隊の兵士に食糧をとられたのではないか、と述べていた。東京の空襲を避け、東金市に疎開してきたにも関わらず、東金市は本土決戦の最重要な場所に位置づけられ、更に東京に戻った六年生の多くが東京大空襲で死んでしまう。そのような**登業場所と最前線が混在する地が東金の御殿山周辺であった**ということが分かる。

Ⅳ文化の礎、東金城

①蛸壺の標石

「蛸壺の標石」は、小川幸三郎さんの父である小川一郎さんが、御殿山に建てた碑である。二つの碑の碑陰には「昭和二十年 一九四五年 範部隊構築」とあり【図5】日本本土への上陸作戦に備え、範部隊こと近衛歩兵第三師団が蛸壺などを、つくったこと表している。また、小川一郎さんが語ったことをまとめた手記の一節には「御殿山遺跡は、範部隊の苦労の跡を帰るして建てられたのだと分かる。更にその手記の題には「御殿山一戦わざる古戦場」とあり、二つの碑の側面には「不戦古戦場」と刻まれている。



②図5 蛸壺の碑

②東金城と文化

小川一郎さんは文学や芸術といった文化的なものに親しんでおり、最高裁判所印等を作った石井雙石さん、世界で活躍するピアニストの大野亮子さん等の人物と親交があった為、御殿山の碑には小川家及び東金市に関わる者の言葉や句等が彫られている。

③小川一郎さんの追悼集

東金市文化団体協議会が発行する会報の中に、小川一郎さんの追悼集がある。そこに、東金市の名誉市民であり、詩人の鈴木勝さんの句がある。その句には、「史は床しいしぶみ固し御殿やま君が遺せし文化の礎」「いくさ場の名のみ残りて黄金まち文化の都市となりて栄へる」とある。自身の詩集にも、御殿山をも含む、「上総丘陵」について、「塹壕化」した、など戦時中の内容を含むものが多々ある。小川一郎さんへの追悼句にある「いくさ場」とは本土決戦のことなのではないだろうか。御殿山は前述した通り、日本本土への上陸作戦に備え、防空壕等が作られていた地である。その御殿山に小川一郎さんは、数多くの碑を作った。言い換えれば、「文化の磯」を作ったのだ。

Ⅵ 文化から平和へ

戦後、御殿山には第二次世界大戦時における、陣地構築の実地把握のため、自衛隊の方がよく来るという。サイン帳にも自衛隊の方の署名【図6】があり、また、自衛隊市ヶ谷第三十二連隊長の一等陸佐であった前川清さんは署名のみではなく「和戦一知」という言葉も残している。「和戦一如」について、前川清さんに取材したところ、「平和から戦争が生まれる。戦争の中から平和が生まれてくる。」という意味合いを持つのだという。つまり、戦争の遺跡がある場だからこそ、文化的・平和的な場であろうとする。それを見ることで、平和を意識しつつも、戦争に思いを致すということを、感想として書いたのではないかと考えられる。

その他にも「和是萬事本」等「和」という字が戦後のサイン帳には幾つかみられ、小川一郎さんが、かつての戦場である御殿山に碑を建てることにより、**平和の象徴として御殿山があるのだ**と、戦後訪れた方々は思ったのではないだろうか。文化の礎というのは、戦争の無い戦後の平和な時代に築かれてきたといえる。つまり、前述した小川一郎さんが御殿山に数多くの碑を作ったことは、まさに、平和の時代を象徴する意味で、文化の礎、ひいては平和の礎を御殿山に構築したのだともいえるだろう。



図0 御殿山に行った方のサイン帳より 「和戦一如」及び自衛隊の方のサイン



図7 倒木が多くみられる、現在の東金城

Ⅶ 危機にある「和戦一如」の地、東金城

東金城は戦国時代には東金酒井氏の居城であり、現在は前川清さんへの取材から、 本土決戦の際の陣地の中心であり「象徴的な東金陣地」と言われ、正に「戦」の場所で あると意識されていた。

同時に江戸時代では東金の名所に数えられ、戦後には文化人の言葉を記した石碑が、千葉県下でも多く纏まってある事で知られる場となった。つまり「戦」と、その対極をなす「和」の場所とが一体の「和戦一如」の場所であることが示されたのである。このような非常に重要な意味を持つ場所にも関わらず、筍掘り等を目的に入り込む人もいるため、御殿山への入場門を閉鎖してしまおうかという、揺れ動く気持ちを持っている。また、台風15号により東金城にも甚大な被害があった【図7】ため、現在は立ち入り禁止となっている。

Ⅷ 終わりに

この多くの歴史のつまった東金城も、実際はほとんどの人に知られておらず、閉鎖され他に誰も伝えることがなければ、この場所の歴史も忘れ去られてしまうだろう。

「東金城」を始めとした、戦いと平和の両方を兼ね備えた場から、今、令和の始まったこの時代において、我々はこの日常を「異質」な日常にすることがないよう、様々な場所で発表する機会を得て、出来うる限り多くの人がこの場所に来て、戦争と平和について考えられるよう、伝えていきたい。

文化を運んだ軍用鉄道

~横須賀線が運んだのは"もの"だけではなかった~

高校2年 平形康貴 武相高等学校(神奈川県)

1. はじめに



昨年の研究で私は陸軍が主導した 相模原軍都計画(神奈川県相模原市) が周辺を走る鉄道に多大な軍事協力 や周辺地域へ大きな影響を与えてい たことを知った。そして、今年は反 対に横須賀海軍(神奈川県横須賀市) のために敷設された IR横須賀線が周 辺地域へどのような影響を与えたか

久里浜駅 を調べることにした。 その結果、横須賀線が軍用鉄道としての働き以外に、別荘文化や海水浴 という新しいレクリエーションや鎌倉文士など地域に多彩な影響を与えてい たことが分った。

2. 軍都・横須賀とは

1871 (明治 4) 年 横須賀製鉄所建設(主な輸送手段は海運だった)

1872 (明治 5) 年 上記が横須賀海軍造船所となる

上記が横須賀海軍工廠となる 最盛期には8万人が従事 1903 (明治36) 年

1884 (明治17) 年 横須賀鎮守府が誕生

他、横須賀海軍航空隊や航空技術・航空廠、海軍機関・工機学校など設置。 横須賀は広島県の呉や長崎県の佐世保と並ぶ軍都となった。

3. 横須智線の歴史

海軍大臣西郷従道、陸軍大臣大山巌が横須賀線大 1886 (明治19) 年 6月

船~横須賀間建設を請議

1889 (明治22) 年 6月 大船~横須賀間が単線開通 10往復、20本に増便 東京駅に乗り入れを開始 1894 (明治27) 年 1916 (大正 5) 年 9月

1924 (大正13) 年12月 全線複線化し、翌年12月には全線電化完成

4. 「衛生国家」の始まり

明治期の日本では富国強兵のため、また結核対策として清潔な国家を作 る「衛生」が意識され始めた。

「近代医学の父」と称されるドイツ人医師のベルツは優れた自然環境を 持っている片瀬や鎌倉、葉山を新たに海浜保養地として紹介する。またベルツの影響を受け、明治10年頃になると初代内務省衛生局長であった長与専斉 や陸軍軍医を務め、海水浴法概説を著した松本順らにより海水浴という文化 が誕生した

当時の海水浴は西洋医学に習い「海気」に身をおいて「海水」に身を浸 し、身体に刺激を与えて病気や体調不良を治療するものであった

しかし、明治末になると各地で鉄道が開通、各鉄道会社が海水浴場に海の家を設置し、日帰りで海水浴を楽しむ人が増えた。それにより海水浴の行 為自体が医療からレクリエーションへと変わった。

5. 横須智線が与えたもの ~短子~

①逗子海岸の海水浴と横須賀線

1903 (明治36) 年8月18日に発行された『横浜貿易新聞(現神奈川新 聞)』によると東海道沿いの当時の海水浴場の入場券は1日で1,400枚~ 1,500枚に達した。海水浴を楽しんだ後に海水浴場周辺の宿泊施設に滞在す る人は宿や別荘、貸間に滞在する人は700人以上にも達した。海水浴はとて も大きい経済効果をもたらすものであった

関東近郊では逗子海水浴場が人気の海水浴場だった。そこで鉄道省は 1929(昭和4)年に海の家を設置した。同年の利用者数は大人3万5,942人、 子供9,600人で収益は8,628円になった。

②別荘地としての発展

逗子の別荘地としての発展は横須賀線の開通で交通の便が改善されたこと や隣町である葉山が葉山御用邸建設の影響で別荘地のメッカとなっていたた め、大いに影響を受けた。逗子には1913 (大正2) 年の時点で96名の別荘所 有者がいた。その後、1927(昭和2)年になるとさらに増加を遂げて、197人 になった。別荘の所有者は東伏見宮を始め皇族や外国領事、実業家などが多 くいた。

5. 横須賀線が与えたもの ~葉山~

①交通の発達

横須賀線の開通以前の葉山町の移動手段は徒歩移動が主だった。横須賀線 開通で交通の便が大幅に改善できた。1912 (明治45) 年に町の最寄り駅とな る逗子駅から葉山町へ乗り合い馬車や人力車が走り始めた。その後乗り合い 馬車は乗り合いバスに代わられた。

②別荘地·葉山

葉山は気候が温和で風光明媚な場所であったため鎌倉 時代から行楽地・保養地として発展していった。1889 (明治22) 年にベルツ自身が別荘を建て、葉山の良さ を伝えていた。そして横須賀線開通により要人の別荘 も増えていった。1894 (明治27) 年には葉山御用邸が 竣工し、別荘地・葉山のブランドがあがった。明治時 代の葉山の別荘所有者は華族・閣僚・海軍軍人・教育 人など幅広い職業の人がいた。



写真 葉山御用邸の海

6. 横須賀線が与えたもの~鎌倉~

①交诵の発達

鎌倉は山々に囲まれて訪れることが困難な場所であった。横須賀線開通以 前は藤沢まで東海道線を使い、そこから約6kmの道を人力車に乗って大仏坂の切り通しを越えて鎌倉に入るのが一般的だった。当時の所要時間(東京~ 鎌倉) は2時間半から3時間かかっていた。横須賀線により1時間半にも短縮 することができた。

②海浜ホテルと結核療養

1887 (明治20) 年、長与専斉が初めて湘南地域に結核療養場である海兵院を設置した。海兵院は完全な病院ではなくホテル的な要素が強かった。その 後海兵院は療養施設から鎌倉海浜ホテルへとなっている。1896 (明治29) 年 になると大改築を行い湘南の帝国ホテルを目指し、高級ホテルとして知られ

その後、明治期の鎌倉には本格的な結核療養所が多数開院している。明治 期から大正期の鎌倉は元来保養地だったことを生かし結核療養の場にもなっ

③別荘と鎌倉

鎌倉での別荘地としての発展も始まった。井上馨ら政府高官が別荘を持つ ようになり、つぎつぎと当時の名士の別荘が作られた。1908 (明治41) 年に は別荘族の社交クラブである「鎌倉倶楽部」が発足し、明治末には鎌倉は全 国最大規模の別荘となっていた。大正元年には480戸の別荘があった。1915 (大正4)年には「鎌倉同人会」が発足し、地域への積極的な働きかけをす るようになっている。

④鎌倉文士と鎌倉

横須賀線により鎌倉は東京との通勤圏に組み込まれ、居住しながら東京 に通勤する作家達が増加した。彼らを鎌倉文士という。1934年 (昭和9) 年 久米正雄を中心に文士達が協力し鎌倉カーニバルを開催した。1938年 (昭和 13) 年の開催時には当時の鎌倉市の人口と同じ5万人が見物に来た。1936 (昭和11) 年には久米正雄の発案で鎌倉ペンクラブが発足した。文士達は同 志の結束感を持つことができ、これにより新たに作家、出版関係者が移り住 み益々鎌倉は文十の町となった。

第二次世界大戦の戦況が悪化すると、多くの文士達は戦争の影響で執筆た 作品を発表できず貧窮の状態となった。そのため、1945 (昭和20) 年5月に 鎌倉文庫(貸本屋)を開業した。店内には文士達の執筆本や蔵書約千冊の本 が並び、文学に飢えた人達で連日混雑し、繁盛した。

7. 横須智線が運んだもの

横須賀海軍のために誕生した横須賀線が軍事以外の"もの"を逗子や葉山、 鎌倉といった沿線地区にもたらしていた。

①交通の利便性

三浦半島は陸路が厳しい地域であったが鉄道で利便性が向上し京浜地区からの通勤圏となった。また行楽・観光の日帰り圏内となった。

②别莊文化

保養地として鎌倉・逗子・葉山には多くの別荘が建てられた。特に葉山は 御用邸があったことで高いブランド力を持つようになった。鎌倉は別荘族 の社交クラブができ、彼らは地域向上も働きかけた。

③人口増加

別荘により夏の居住者が増えたり、逗子は横須賀海軍への通勤者も居住し た。また、戦争中別荘への疎開者の増加もあった。

4)結核治療所

鎌倉を中心に多くの結核治療所が作られた。また治療所に入らなくても 治療目的に居住するものもいた。

⑤鎌倉文士

鎌倉が通勤圏となったため多くの文士達が居住した。彼らは交流を持ち 文学的なつながりをもった。その中から、鎌倉ペンクラブの結成や鎌倉 カーニバルの開催、鎌倉文庫の開店など地域に対する活動が生まれた。 文士達の活躍で鎌倉は文化的な都市となった。

私は軍用鉄道である横須賀線が、軍事とは正反対の性質である行楽や文 化を沿線に伝えていたということに驚いた。しかし、明治期には海水浴や保養による「健康な国民」と言った考え方も「富国強兵」策の一環と言える。 その意味では、やはり横須賀線は「軍用鉄道」だったのである

横須賀線により、元来保養地や行楽地であった逗子や鎌倉が再発見され、 現在まで続く県内でも有数の観光地となることが出来た。

今後は横須賀線がもたらした各地に残る別荘文化、海水浴場、文化都市 鎌倉が、今現在の地域にどのような影響を与えているかを調べて、考えてみ たい。

主な参考文献 各市町市史(鎌倉・逗子・葉山・横須賀)・海水浴別荘

時代 文芸散策の会 JTB 1997年 文士の愛した鎌倉 島本和也 島本和也(自費) 1993年 鎌倉別荘物語 神奈川文学振興会 神奈川近代文学館 1995年 鎌倉 文 学の理想郷 畔柳昭雄 中央公論新社 2010年 海水浴と日本人

老川慶喜 河出書房新社 2017年 鉄道と観光の近現代

史 増山新吉 松林堂書店 1913年 逗子と葉山 横須賀海軍工廠原書房 1983年 横須賀海軍工廠史 (3) 上山和雄 成文堂出版 2017年 軍港都市研究IV横須賀

では 田中宏巳 有隣堂 2017年 横須賀鎮守府 横須賀線百年出版委員会 神奈川新聞社 1990年 横 須賀線百年

協力:鎌倉文学館 交通統計研究所

相模鉄道と神中鉄道の大山ケーブルカー敷設計画~大山を巡る様々な思惑と二人の社長~

池上 要太

はじめに

神奈川県には横浜と県央部の海老名を結ぶ相模鉄道と、茅ヶ崎と海老名を経由して橋本に 至るJR相模線と二つの相模を冠した鉄道がある(図1)。相模鉄道はもともと神中鉄道という別 会社が敷設してもので、相模鉄道は現在のJR相模線を運営していた。神中鉄道は、当時信仰 登山として有名な、現在の伊勢原市にある大山阿夫利神社への鉄道を計画していた。現在大 山には山麓と神社の下社を結ぶケーブルカーがあり、これと関係があるのではないかと調べ てみると、伊勢原市史資料編にはケーブルカーを敷設するにあたって4人の発起人が申請し、 てのると、けずが川文具が帰にはアーアルカーでかなす。のにのレスにホルディーのと その中には当時の相模鉄道と神中鉄道の社長の名前を発見した。この経緯については伊勢 原市史や相模鉄道の社史にも記載がないので、国立公文書館の「鉄道省文書」や当時の神 奈川県の地方紙「横浜貿易新報」を参考に、仮説をたて考察した。





神中鉄道と相模鉄道の創業

明治時代に入り日本初の鉄道が神奈川県に開業し全国に広まった。しかし県央部の海老名、 厚木、伊勢原には鉄道が通っていないので、時代に取り残されると危惧した地元の有力者に よって両社は立ち上げられた。偶然にも1916年、茅ヶ崎~橋本~八王子に至る相模鉄道、 程ヶ谷停車場前と厚木を結ぶ神中軌道[当初神中鉄道は軌道(路面電車のような小規模な路 線]で計画されたが、将来的に輸送量が増えると予想し、相模鉄道と同じ軽便鉄道[地方発展の為の簡易な鉄道]に切り替え神中鉄道と改称した。)に免許が下付(授けられるの意)された 両社の発起趣意書(会社が設立された後の目標などをまとめたもの 図3)をみると、どちらも 地域に根ざしていることがわかる。しかし第一次世界大戦による資材の高騰、戦後恐慌に影 響され、思うように工事は進まなかった。

相模鉄道 発起主意書
・茅ケ崎~橋本~八王子を結び地域経済に貢献 大山阿夫利神社の参拝客

- (年間47万人)の利用が期待 ・平塚~厚木間を往復する商人
- (年間100万人)の利用が期待
- ・相模川の砂利採取・販売を兼業して増収を図る

・農産物の肥料供給が円滑になる

二人の社長

戦争、恐慌に見舞われた神中鉄道は経営陣は用地買収もままならないので、斉藤和太郎 (図4)を二代社長に迎え、相模鉄道は途中の寒川まで開通させたものの赤字続き、路線延長は絶望的だったため南俊二を三代社長に迎えた。2人の社長による改革は功を奏し、神中 鉄道は二俣川までとはいえ8年越しの開通を果たし、相模鉄道は全線開通を果たすばかりで なく砂利採取業で成功し黄金時代を迎えた。





図4(左) 斉藤和太郎 図5(右) 南俊二 資料:相模鉄道四十年史 斉藤は社長に就任すると役員を全員退 任させるなど社内環境を一新し、翌年 の定時株主総会では起点を貨物専用 駅となる程ヶ谷から横浜に移転し、相 陽鉄道の免許を譲受することを取り決 めた。起工式も行う予定だったが関東

神中鉄道 発起主意書

・相模平野の開拓、沿線の町村の振興、開発に貢献 ・輸送時間の短縮、物産の運賃軽減による利益が大

横浜と厚木を結び、取引の速達化。

大震災で被災し一年延期となった。震災で耐震対策としてコンクリートの原料、砂利の需要が増 え、相模鉄道は砂利販売を行った。南が1925年に就任するとさらに積極的な販売を行い輸送 量は7~8万tにのぼり、路線延長のめどが立ち1926年5月に厚木まで延長した。一方の神中 鉄道は1924年に起工式を行い、相模鉄道より早い4月に厚木~二俣川間が開通、創業から実 に8年。一部開通とはいえ神中鉄道にとって大きな一歩となった。その後相模鉄道は厚木延伸により砂利輸送量が増え、1929年まで株主へ高配当が続く黄金時代を迎えた。1926年の株主 総会では会社の目的に不動産業や遊園地などの経営を加え、企業活動の多角化を図る事な どが決められた。1931年には橋本まで延長すしたが建設費が高くつき、世界恐慌の影響が あって南は社長を退任した。斉藤は二俣川から北程ヶ谷(現星川)まで開業させ、さらに横浜 駅への延伸が認可されたのち斉藤は退任した。ここでの厚木駅は海老名村河原口にある。海 老名村長望月珪治が県央部初の鉄道には厚木が相応しいと考え、厚木町助役中野再五郎に 厚木と命名してほしいと働きかけていた。望月は相模鉄道の重役であり、中野は神中鉄道の 重役だったため神中鉄道に厚木町に誘致するべく活動していた。駅の命名には様々な思惑 あったと考えられる。(注1)

Ⅳ 大山への道・相陽鉄道の創業

大山阿夫利神社は伊勢原市(当時は中郡大山町)にある雨降山に位置し、標高700mのとこ ろに下社、山頂に本社がある。歴史は古く崇神天皇の時代に建立されたとされ、古くから信仰 登山で栄え、明治に入って江戸時代より参拝者は減ったものの、東海道線が開通すると平塚 から大山まで人力車、乗合馬車・自動車、バスと時代ごとに進化しても、鉄道は計画が何度か されただけで資金難などで未通だった。相陽鉄道は河合繁雄らが出願したが、他にも厚木鉄 道、阿夫利鉄道という会社と競願となっていた。相陽鉄道は沿線町村長からの信用度が高いこと(図6)から1921年に免許が下付されたが、資金が集まらず3年後に神中鉄道に免許譲渡と なった。神中鉄道社長の斉藤和太郎はこの時の発起人代表笠井愛次郎をよく知っており、ま た重役の佐々木文一が発起人(図7)であったことから譲渡の話が進んだと考えられる。



図7 相陽鉄道発起人資産信用顕著 資料:神奈川県史資料編17 近代・現代 相陽鉄道の発起人には阿夫利神社・順前/海影司 がおり、このことからも相陽鉄道の期待度が わかる。また、神中鉄道重役佐々大ツーもおり 質似するにあたってなにかしらの働きがあった のある。1 れたか

大山ケーブルカーをめぐる競願

南俊二と斉藤和太郎が社長を務めていた1926年頃、大山に鋼索鉄道(ケーブルカー鋼索 [ケーブル]に繋がった車両を巻き上げる鉄道)敷設の計画が上がった。ケーブルカー敷設を目論む発起人は4団体挙がり、佐藤潤象外13名(佐藤を13名の発起人に合計して14名)の大山鋼索鉄道、土志田与(與)吉外6名の大山鋼索鉄道、そして斉藤和太郎外7名の大山鋼索電気 鉄道、南俊二外6名の大山鋼索電気鉄道である。なんと、この2人の社長が出願していたの

だった。なぜ、2人は申請したのだろうか。 神中鉄道の仮説

言うまでもなく神中鉄道は相陽鉄道の免許を取得していた 言うまでもなく神中鉄道は相陽鉄道の免許を取得していたこれにより構派・平塚方面からきた客の為に、連絡させて 収入を得ようとしたのではないだろうか。斉藤らが出した 申請書の中には「本大山鋼索電気鉄道へ神中鉄道株式 を社/免許線に国スル相観線即予緒線平塚駅がはらり伊 勢原即う経子大山町二至ル鉄道 便利を誤ラントスルモノ ナル故何卒可然(しかるべく)御詮議ノ上御免許相願度候 位為いねがいたくそうろうなり(図7)」と候文で書かれて ある。大山鋼索電気鉄道は神中鉄道相陽線に連絡し大山 を注まの個別社のどもかなる。何本となるとなった。 のる。人山脚系电ス飲道は4件十次道伯協療に上郷市し入山 参拝者の便利を図るものなので、何字よくお考えの上免 許を認可してほしい。だが全ての発起人の申請書には相 陽鉄道や小田急との連絡について記されている。しかし斉 藤介ス人が他の発起人と決定的二栗なのは、斉藤が社 長を務める神中鉄道が相陽鉄道の敷設権を持っているこ とである。大山に通じる(小田急線は伊勢原まで)唯一の 鉄道である強みをもって申請したと考えられないだろうか。 同じ会社同士の連絡ならば円滑に済むはずだ。そういっ た意味で便宜を得ようとしたのだろう。免許を取得出来れば横浜・平塚方面からの大山参拝者を独占ができ、沿線に目ぼしい観光地がない神中鉄道にとってはこの上ない

相模鉄道の仮説

相模鉄道は「…相模鉄道は拝殿から頂上までケ カーを敷設の計画中である...(注2)」と報じられている。実際に南は4団体の中では最も早い6月1日に申請している。 際に、同は3回体の中では最も早い6月1日に中語している。 当時の相模鉄道は黄金時代を迎えており、砂利採取・輸送で得た利益でケーブルカーを敷設して増収を図ろうとしたのではないだろうか。余談だが南は社長を辞したのちに大阪造船所(現ダイゾー)を設立し、戦後にはバナマの船団を買収し南極の漁業権を得るなど様々な事業を展開し、「日本の三大億万長者」と称された。前述の9月12日の路、株土 ***をプロジーがの事業でまる出しる名のは、他の事業でまる出しる名の 時株主総会では会社の目的に他の事業に手を出し、多角 化を図ることが決められた。これは戦後に南が行った手法 れど図ることが次められた。これは戦後に用か打つだナ法 と同じであり、相模鉄道の事業拡大を画策したのだろう。 つまり、南には先見の明があったと言える。そう考えれば、 一番に出願したというのもわからなくはない。



儲け話だ。 こうして4つの団体による競願となったが、1団体にまとめなければならない。1927年7月27日 に当時の神奈川県知事は「大山鋼索鉄道免許申請ノ件(図8)」を鉄道大臣に宛てた。これによ り9月22日に石田栞(なぜか発起人代表が変わっているが、その後社長に就任したのは佐藤で あった)外13名に免許が認可され、ほか3団体は却下された。結局神中鉄道は相陽線との連絡 で便宜を得ようとしていたが、一里(約4km)離れ連絡する必要はないと見なされ、大山に通じ る鉄道としての便宜を図り免許を得ることはできなかった。また、佐藤外発起人(注3)の中には 大山町長大木利一、阿夫利神社社司内海景弓、小林順三がおり、地元の協力で工事が円滑 に進むとある。斉藤も南も発起人の中には自社の重役が多く占めており、地元在住者は一 としていなかった。(土志田も同様)このことから地元からの信頼に欠けていたと考えられる。発 起人は鉄道技師や実業家も多くおり、その中に五島慶太や中川正左が含まれ、この二人は東京横浜電鉄(現東急)の取締役であり中川は大山鋼索鉄道の取締役も務め、東急とは関わり が深かったとされる。このような大口の資本家が発起人であったことも、免許認可になった理由 といえよう。内海は相陽鉄道の発起人の一人であり、大木はその認可を後押しし意見書に連 署している。恐らくいつになっても工事しようとしない神中鉄道に嫌気がさしたのだろう。これが 影響して神中鉄道は地元有力者を発起人に組み入れることはできなかったと考えられる。その 後大山鋼索鉄道は1931年に開通し大賑わいを見せ、新聞には連日取り上げられた。しかし、 あくまで参拝者のために作られたので夏季の例大祭以外は、信仰登山者が主であったため業 績が悪化した。その後小田急、神中、相模鉄道とともに東京横浜電鉄に戦時買収され、1944年 に不要不急線指定を受け会社は解散し、線路・車両は撤去された。戦後、復活のため新たに

VI 相陽鉄道のその後

小田原急行鉄道が新宿~小田原間に開通すると大山を巡る交通系統にも変化を及ぼした。今 まで平塚から大山へ客を運んでいたが、伊勢原に駅ができ徐々に衰退していった。さらに厚木 などの商人は平塚の問屋で仕入れており、商業上深い関わりがあったが、小田急の開通でそ の商人が東京に流れ、平塚町は衰退すると懸念された。これにより相陽線開通の声が町村長間で高まるも、一向に敷設の兆しがない神中鉄道に対し小田急へ権利譲渡を求めた。しかし神 中鉄道にとって生命線であり手放したくなかった。さらに、厚木~横浜間を含めての譲渡の野 心があると取り沙汰されている。神中鉄道は開業後営業成績がいいとは言えず、権利は手放 したくないがための行動だったのだろう。平塚町としては町の進展に関わる問題であったため、 新聞では神中鉄道が批判されている。しかし平塚町の懸念は思ったほどでもなく夏季大祭以 外は大した影響はないとされ、一時的にこの計画は立ち消えになったが、1928年ごろ平塚には 市政施行の話の中で相陽線の計画が再燃し神中鉄道は1930年3月に起工式を行ったが、世 界恐慌を受けて神中鉄道も小田急にも敷設は難しかった。市制施行を来年に控えた1931年に 沿線町村長は小田急・神中鉄道に働きかけたが進展は無く、神中鉄道はバスでの輸送を試み たが認可されず、1933年に相陽線は免許失効となった。(注2)

大山をめぐっては、参拝客独占を目論む斉藤の神中鉄道、事業拡大を図る南の相模鉄道、そ して町の発展を杞憂した平塚町、そして大山鋼索鉄道。計画におよぶまでは小さな町村、発起 -人から、東急のような大企業、実業家が複雑に入り交じり、関係していた。かつて源 氏、後北条氏、徳川氏などから崇敬を受け、江戸時代は五穀豊穣を祈る百姓、娯楽目的で町 人が大山を訪れていた頃と同じように、明治・大正・昭和においても人々の注目は大山にあっ たのだ。断片的な資料からこれを見ると当時の人々が何を考えどう行動したか垣間見ることが でき、改めて歴史の奥深さを実感した。まだ解らない点も多く、当時の資料が思っている以上 に少ないので今後も調査を続けるつもりである。

くずし字で書かれたものや候文という文体での記述があり、本校の渡辺奨太先生に解読 していただきました。この場を借りて御礼申し上げます。

〈参考文献〉

(参考)大阪/ (注1)「外国会の年史』(小田会電鉄株式会社 1980) (注2)「採集貿易原報[展末貿易新報社 名号(1926~1931) (注3)「鉄道名文章 等一門・監管・一種・一地、力鉄道・イ、免許・大山網索鉄道・昭和二年~昭和十三年』 『假設線物版』『原相根線物語』(230クラブ新聞社 サトウマコト 1997 2000) 『薄木近代史誌【厚木市史編纂委員会 1970》 『柳悠原神史史神祇西原代1』「伊勢原中屯東中城市で東北 (日今) 1993 2015 「神機鉄道20年史』(社学編名人委員会 1967) 『神機鉄道100年史』 「中田会25年史』(小田会3治東安編第委員会 1957) 「中国会25年史』(小田会3治東安編第委員会 1957) 「中国会25年史』(小田会3治東安編第委員会 1957)

撫順東方における歴史観光構想とその挫折

岐阜県立関高等学校地域研究部 江崎晃定 片桐昂大 石原伶緒 吉川奎騎

1 研究テーマについて

渡辺三三(わたなべさんぞう、1890~1977)は、旧満州で漢代から高句麗、清朝に至る考古学・歴史学の研究を行った人物である。今回は新たに発見された新聞スクラップを用いて考察を深めた。



北関山城調査(1940)

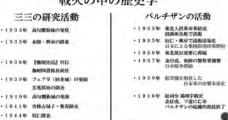


鉄背山城調査(1939)

2 パルチザン掃討作戦と渡辺の活動

渡辺がフィールドワークとして撫順東方の山岳地帯は、高句麗や清朝の遺跡の集中地域であると同時に中国共産党指導下の抗日パルチザンの拠点でもあった。そのため<u>渡辺の</u>活動は日本軍の抗日パルチザン掃討作戦と密接にかかわりがあった。

戦火の中の歴史学



3 当初からあった観光開発計画

昨年9月、渡辺充氏(渡辺三三の親族)より、新たに新聞スクラップが発見されたとの連絡が入った。記事の文中には、遺跡調査に関する報道とともに観光資源開発についての言及もある。たとえば、最古の宮殿跡、旧老城(フェアラ)の発掘に関する「撫順新報」の報道には、「撫順から鴨緑江までの観光コース開発を期待」(1939.6.2)「満州の奈良」(同年 7.27)との記載があり、発掘当初から、調査担当者や当局、報道関係者の間に観光開発という思惑があったことがはっきりと読み取れる。





当時の新聞記事の特徴

- ・満州と朝鮮を縦断する鉄道開通にあ わせた観光客誘致策を展開
- ・具体的な史跡観光コース提案
- ・植民地支配を正当化する満鮮史観
- ・ジャーナリズムの手厚い支援
- ・郷土史としての撫順史

4 考察と今後の課題

おそらく渡辺は、文化財保全の理解を広げ、当局からの支援を引き出す方策の一つとして 観光資源開発を打ち出したのだろう。渡辺が立案した観光開発計画は敗戦とともに雲散霧 消したが、現在そのルート上には3つの世界文化遺産(永陵・桓仁・集安)が所在しており、 渡辺は先見の明に優れた人物であったことがうかがえる。



改正文化財保護法が施行される。今日、我々は文化財の活用推進に異論はない。ただ過剰な商業主義に走ることによる保存軽視、捻じ曲げられた歴史解釈がなされることを恐れている。かつての渡辺の研究が植民地政策に迎合したのと同様に、今日の研究も経済的利益に迎合してしまうのではないかと懸念される。

我々が、まぼろしに終わった「満州遺跡観光ツアー」の失敗から学び未来へ生かしていくことは実に多い。

近世筝曲とキリシタン音楽

~筝曲『六段』とラテン語聖歌『クレド』へ

^{』~} 西野 桜 京都府立鴨沂高等学校

I はじめに

日本の伝統芸能に箏(そう・こと)【図1】は、奈良時代に中国から伝来し、私の暮らす京都を中心に雅楽の楽器として皇族や貴族の間で楽しまれてきた。京都には、近世筝曲の始祖「八橋検校」の道場跡や墓所が残っている。そして近年、八橋検校の代表作とされる箏曲『六段』とキリシタン音楽との関連性が指摘されている。私は西洋弦楽器を学んできたが、この点に興味を持ち、この研究発表で、謎の多い八橋検校の生涯やキリシタン音楽と関わる歴史的背景を調べた。

Ⅱ 八橋検校とその生涯:1614(慶長19)年 ~1685(貞享2)年

八橋検校は江戸時代初期の盲目の筝曲家である。出生地は『筝曲大意抄』(1779年)によると、 磐城(福島県いわき市)とされるが、他にもいくつかの説がある。【図2】大坂で柳川検校ととも に三弦を弾き三味線の祖となった後、江戸で筝曲を習得し、上洛して「検校」の位を得て多くの 筝曲を作り、演奏家としても活躍した。京都の道場で彼に学んだ弟子達によって、八橋流筝曲が 広められた。【図3】八橋は江戸や東北(磐城)でも活躍したとされ、その墓所は京都黒谷の金戒 光明寺の墓地内にあり、墓参する人々に筝に似せた菓子「八ッ橋」が売られるようになったとさ れる。【図4・図5】



図5 京都名菓「八ッ橋」 写真) 聖護院八ッ橋総本店 ホームページ上り



図4 金戒光明寺の八橋検校墓所 (京都市左京区黒谷町)



図3 八橋検校道場跡 (京都市下京区鶏鉾町) 写真) 2019年10月20日本人撮影

Ⅲ キリシタン音楽の伝来

キリシタン音楽は、1549(天文18)年にイエズス会のフランシスコ=ザビエルが来日して布教活動を開始するとともに伝来した。 ザビエルの死後最初のクリスマス、周防山口の南蛮寺でラテン語

聖歌を加えたミサ典礼が行われた。また、1582(天正10)年、九州のキリシタン大名の名代としてローマへ派遣された「天正遣欧少年使節」は、キリシタン音楽の訓練を受け、ポルトガル・スペイン・イタリアの各地で歓迎され、本場ヨーロッパの音楽に触れた。1590年(天正18年)の帰国時には、既に豊臣秀吉によりパテレン追放令が発布されていたが、翌年、使節団は京都の聚楽第で、西洋から持ち帰った楽器を用いてキリシタン音楽を演奏し秀吉を大いに喜ばせたと伝えられる。

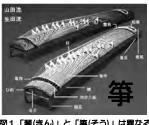


図1「琴(きん)」と「箏(そう)」は異なる 楽器で、琴は平安末期に廃れ、現在一般 的に「おこと」と呼ばれるのは箏である。

写真資料) 筝の歴史ホームページより



図2『筝曲大恵抄』 山田松黒編 (1777(安永8)年) 鴨汗高校図書館所蔵 等曲の歴史などが記されている本 書の中に、「山住勾当(八橋検校が 名乗っていた名前)といふ人、生国 岩城」(拡大部)とある。

Ⅳ 『六段』とキリシタン音楽『クレド』関わり

箏曲『六段』に影響があると指摘されるキリスト教聖歌『クレド』は、ラテン語で「我は信ず」を意味する「信仰宣言」の聖歌である。一聴しても共通性は感じられないが、『六段』を西洋音楽的な五線譜として『クレド』に重ね合わせると、曲構成や総拍数に類似性が多く見られるというのだ。

『クレド』は、当時ヨーロッパから伝来した活版印刷技術で刊行された「キリシタン版」書籍の中で、『けれど』として日本語訳されて伝えらており、筆記された断片的なものにも『けれど』を書き写した史料は多い。日本でラテン語聖歌『クレド』が広く知られ、歌われていたことがうかがえる。そして、聖歌を伴奏していた日本人が、慣れ親しんだ日本の箏や三味線などで演奏してみようと試みたことも十分考えられる。

また、1614年の江戸幕府による伴天連追放令で、東北へ追放されたキリシタンが多くいた。磐城でも活躍した八橋が、東北キリシタンを通して『クレド』などのキリシタン音楽に触れる機会があった可能性も高い。

Ⅴ おわりに

以上の様に、楽譜や構成の比較、時代背景などから筝曲 『六段』とキリシタン音楽は深い繋がりがあると考えられる。 しかし、それを確実に検証できる史料はまだ見つかっていない。今回の研究で、文字資料として記録されにくい音楽の歴 史を繙くことの難しさの一端を垣間見た。文献史料以外にも、 様々な方向からの検証が必要なのだと強く感じた。

筝曲『六段』は日本の近世音楽を代表する文化遺産であり、 キリシタン音楽との関連性があるとすれば、西洋と日本の文 化融合という新たな価値を持つものとなるだろう。

主な史料・参考文献

『箏曲大意抄』山田松黒、1777(安永8)年 『キリシタン音楽入門』皆川達夫、日本基督教団出版局、2017年 『オラシヨ紀行』皆川達夫、日本キリスト教団出版局、2006年 『新版・八橋検校十三の謎』釣谷真弓、

アルテスパブリッシング2018年 『クラシック音楽全史』松田亜有子、ダイヤモンド社、2018年

第13回全国高校生歴史フォーラム 研究タイトル一覧

(高等学校等コード順に掲載)

| | (高等学校等コード順に掲載) |
|---|-----------------|
| 研究タイトル | 高等学校名 |
| 私の歩く町は緑、白、青 ~ソー・ヤ「礒岩の多い岸」~ | 北海道稚内高等学校 |
| 南部地方における義経北行伝説の発生、流行についての研究、考察 | 青森県立八戸高等学校 |
| 岩手に根付いた700年 ~南部氏とはどのような一族で、なぜ700年間続いたのか~ | 岩手県立盛岡第二高等学校 |
| 江釣子古墳群と地元の歴史 | 岩手県立花巻北高等学校 |
| 江釣子中学校芸能発表会と後継者問題 ~ 40年以上続く歴史、どう受け継いでいくか~ | " |
| 東北の伝統舞踊 鹿踊 ~鹿踊の起源を探る~ | " |
| 岩手県の伝統芸能について | " |
| 遠野物語と人々の関わり | " |
| 賢淵(かしこぶち)伝説と蜘蛛塚 ~石碑からのメッセージ~ | 宮城県仙台二華高等学校 |
| 霞城公園の知られざる過去 ~山形歩兵第32連隊の活躍と地位の関係性について~ | 山形県立山形東高等学校 |
| 鹿島鉄道廃線跡とその利用 | 茨 城 高 等 学 校 |
| 大津浜事件と水戸学の関わり | 常磐大学高等学校 |
| 享保期幕府代官 池田喜八郎による忘れられた水利改良 | 栃木県立学悠館高等学校 |
| 願生寺阿弥陀如来像 ~運慶仏との比較をもとに~ | 埼玉県立伊奈学園総合高等学校 |
| 妖怪と人の心との関係 | 山 村 国 際 高 等 学 校 |
| 川越のシンボル「さつまいも」 さつまいもの歴史から | // |
| 武蔵の不落城~忍城 一忍城最強の謎― | " |
| 源氏物語からみる平安時代の恋愛事情 ~現代と昔を比べて~ | " |
| 太田道灌と川越城 | " |
| 天皇について | 11 |
| 古墳からみる雄略天皇の人物像 | 11 |
| 「和戦一如」の地、東金城 ~本土決戦の要と「文化の礎」 | 市原中央高等学校 |
| 江戸芝居の歴史 | 中央学院大学中央高等学校 |
| 子孫が追う幕臣保木氏のルーツ | 自 由 学 園 高 等 科 |
| 小田原藩を襲った災害と農民の動向 | 神奈川県立足柄高等学校 |
| 小田原ちょうちん | " |
| 酒匂川の変遷 ~氾濫と復興~ | // |
| 小田原のゆかりのある著名人 | // |
| 南足柄天狗伝説 | 11 |
| 小田原の歴史 | " |
| 「ししどの窟」について | 11 |
| 金太郎の昔話について | 11 |
| 二宮尊徳の生涯と功績 | 11 |
| 小田原城と北条氏 | 11 |
| 小田原のういろう | 11 |
| 小田原城の歴史について | 11 |
| 南足柄市金太郎について | " |
| 災害と南足柄の人々 | 11 |
| 南足柄の歴史 | " |
| 難攻不落と言われた小田原城 | 11 |
| 二宮金次郎 〜自家の再興から始まった再建の神様〜 | 11 |
| 小田原 | 11 |
| 二宮尊徳について | " |
| 小田原城の歴史 | 11 |
| 一夜城と小田原征伐 | // |

| 研究タイトル | 高等学校名 |
|---|-----------------|
| 金太郎伝説 ~南足柄市の民族文化~ | 神奈川県立足柄高等学校 |
| 箱根細工物語 | " |
| 足柄と金太郎 | " |
| 二宮金次郎がなぜ有名になったのか? ~神奈川県小田原市の偉人についての考察~ | // |
| 小田原城と北条氏 | // |
| 大雄山最乗寺について | " |
| 箱根温泉の歴史 | " |
| 湘南軌道について | " |
| 南足柄金太郎伝説 | // |
| 鎌倉大仏の謎 | // |
| 小田原の歴史の流れについて | // |
| 二宮金次郎について | " |
| 桜土手古墳群に眠った人々 | " |
| 小田原市の新幹線の歴史 | " |
| 小田原征伐について | " |
| 小田原城と北条早雲 | // |
| 小田原の食文化 | " |
| 鎌倉幕府と湯河原町 | " |
| 土肥一族とししどの窟について | " |
| 秦野市に流れる川 一水無川一 | " |
| 小田原と城主の政策 | " |
| 小田原市の古墳の特徴 | " |
| 小田原の食文化 | " |
| 酒匂川・足柄平野 ~人々の暮らしと災害~ | " |
| 二宮尊徳の努力 | " |
| 江戸の小田原について | " |
| 自分の住んでる町の歴史 | " |
| 二宮金次郎の歴史 | " |
| 中屋敷遺跡について | " |
| 小田原城の歴史について | " |
| 難攻不落の小田原城 | " |
| 江戸時代の小田原城について 一石高の違い一 | " |
| キリシタン信仰と地域コミュニティー ~長崎県外海・平戸地区を中心に~ | 関 東 学 院 高 等 学 校 |
| 名古屋城の縄張・構造とその軍事プランに対する検討 | 浅 野 高 等 学 校 |
| これからのカンボジアを考える ~ポル・ポト政権崩壊から40年を経て~ | 法政大学国際高等学校 |
| 文化を運んだ軍用鉄道 ~横須賀線が運んだのは"もの"だけではなかった~ | 武相高等学校 |
| 相模鉄道と神中鉄道の大山ケーブルカー敷設計画 ~大山をめぐる様々な思惑と2人の社長~ | 立花学園高等学校 |
| 河井継之助と北越戦争 | 新潟県立新潟高等学校 |
| 佐渡に流刑された人々 | " |
| 「新湊」の地名由来について 一富山県射水市にある「新湊」の場合― | 富山県立新湊高等学校 |
| 富山県射水市の地名「放生津」の起こりと謂われについて | " |
| 哲学者 西田幾多郎先生の歩んだ径 (みち) | 石川県立金沢桜丘高等学校 |
| 地方中小都市敦賀の太平洋戦争 | 敦賀 気比高等学校 |
| 土岐明智氏の歴史と光秀伝説の形成 ~土岐文書とフィールドワークからの検証~ | 岐阜県立関高等学校 |
| 撫順東方における歴史観光構想とその挫折 ~まぼろしに終わった歴史ツーリズムを読み解く~ | " |
| 江馬修の学問と芸術的抵抗 ~表現としての考古学・文学・演劇~ | // |
| 「戦国の梟雄」とされた早雲の実像 | 静岡県立韮山高等学校 |

| 研究タイトル | 高等学校名 |
|--|----------------|
| "萩反射炉"と"韮山反射炉"の相違点・共通点と歴史的背景 | 静岡県立韮山高等学校 |
| 明治日本の経済発展 ~中国・北九州の産業革命遺産~ | " |
| 九州の食文化と歴史的背景 | // |
| 大宰府天満宮と梅 | " |
| 原爆投下に到った経緯と原爆の仕組み、及びそれらが社会に及ぼした影響 | " |
| 大宰府天満宮の魅力 | // |
| 三島停車場誕生までの歴史 〜鉄道誘致運動の全貌を探る〜 | 静岡県立三島北高等学校 |
| 豊橋市における縄文時代の暮らし | 愛知県立豊橋南高等学校 |
| 鴨沂(おうき)高校が所蔵する古書籍の蔵書印 | 京都府立鴨沂高等学校 |
| 近世筝曲とキリシタン音楽 八橋検校の《六段》とラテン語聖歌《クレド》の関わり | " |
| 令和の大合併の予想 | 大阪府立天王寺高等学校 |
| 城郭の復元のあり方 ~名古屋城を通して城郭の復元のあり方を考える~ | 大阪明星学園明星高等学校 |
| 洪水が起きたとき、大阪高校付近はどうなるか? | 大 阪 高 等 学 校 |
| 南海トラフ巨大地震が起こった時の相川地区(大阪市東淀川区)の状況 | " |
| 姫路の戦中・戦後史 | 兵庫県立姫路東高等学校 |
| 軍師として豊臣秀吉を支えた黒田官兵衛 | 兵庫県立生野高等学校 |
| 志賀直哉と小林多喜二の親交 | 神戸野田高等学校 |
| 豊中市の「日本で1番○○」を探る | 雲雀丘学園高等学校 |
| 越木岩神社 | " |
| 台湾の観光地と日本の軍艦島を比較してわかったこと | " |
| 大阪の発展・土地利用と鉄道 なぜ私鉄が都会に直通するのか? | 甲陽学院高等学校 |
| 古き良きもの 継ぐ者伝える者 未来へ ~小さな仙霊茶の大きな歴史~ | 東洋大学附属姫路高等学校 |
| 慶長5年の豊臣臨時政権の実態 | 金光学園高等学校 |
| 福山藩とキリスト教弾圧 | 福山市立福山高等学校 |
| 柳井の明治維新 ~なぜ柳井の功績は忘れられたのか~ | 山口県立柳井高等学校 |
| 備前刀の研究 一西の聖地で生まれた鉄の芸術― | 徳島県立城東高等学校 |
| 鉄道会社の再興 〜近畿日本鉄道元社長 佐伯勇の生涯〜 | 愛媛県立西条高等学校 |
| 伊曽乃神社の魅力 | " |
| 伊予国中心地の変遷の研究 ~時代による中心地の条件の変化を通して~ | 愛媛県立松山西中等教育学校 |
| 城下町松山の戦災復興 ~昔と現在をつなぐ街路~ | 愛 光 高 等 学 校 |
| 伊予鉄道株式会社と松山電気軌道株式会社の合併抗争 ~合併に至った経緯を探る~ | " |
| 継ぎ獅子の歴史をたどる ~伊勢の太々神楽から今治市へ~ | 済 美 高 等 学 校 |
| 織幡神社における神名の変化についての一考察 | 福岡県立宗像高等学校 |
| 小地名「ホノケ」の研究 ~福岡県糸島市王丸集落~ | 福岡県立修猷館高等学校 |
| 朝鮮通信使と日本の歴史 | 福岡県公立古賀竟成館高等学校 |
| 七ヶ神社について | " |
| 向岸寺と通の捕鯨文化から探るその関係性 | " |
| 古賀の歴史と船原古墳 | " |
| 広島の原爆について | " |
| 横大路家住宅(千年家)の歴史を探る ~地元に隠された偉大な秘密を知る~ | " |
| 中浜万次郎について | " |
| 筥崎宮の歴史と祭典 | " |
| 歴史ある宮崎の遺跡 | " |
| 私たちの地元 HISTORY in 香椎宮 | " |
| 新元号「令和」について | " |
| 元寇と水中考古学について | 福岡県立武蔵台高等学校 |
| 日本近代医学の起源を探る 東洋医学と西洋医学の藩医体制の融合 ~黒田藩と岡藩を中心に | 福岡大学附属大濠高等学校 |

| 研究タイトル | 高等学校名 |
|---|-----------------|
| 日露戦争と福岡 | 福岡大学附属大濠高等学校 |
| 未解明の古墳時代の集落に迫る ~壱岐・車出遺跡とその遺物から見た巨石古墳との関係~ | 長崎県立壱岐高等学校 |
| 高島海洋少年共和園 一無人島に強制収容された戦争孤児たち― | 大 分 東 明 高 等 学 校 |
| 明治期の種子島における異文化交流 一ドラメルタン号漂着事件を中心に一 | 鹿児島県立種子島中央高等学校 |

※個人情報に配慮して、研究タイトルと高等学校名のみを記載しています。

〈審查委員〉

清水 哲郎 (審查委員長·奈良大学 学長) 土平 博 (実行委員長·奈良大学 文学部地理学科 教授)

上野 誠(奈良大学 文学部国文学科 教授) 太田 仁(奈良大学 社会学部心理学科 教授)

岡橋 秀典(奈良大学文学部地理学科教授) 小林 青樹(奈良大学文学部文化財学科教授)

千田 嘉博(奈良大学 文学部文化財学科 教授) 竹中 浩(奈良大学 社会学部総合社会学科 教授)

寺崎 保広(奈良大学 文学部史学科 教授) 横山 香(奈良大学 文学部史学科 准教授)

中尾 和昇(奈良大学文学部国文学科講師) 笹岡 勇也(奈良県教育委員会 指導主事)

奈良大学創立50周年記念 第13回(2019年) 全国高校生歴史フォーラム 発 表 集

編集・発行 第13回全国高校生歴史フォーラム実行委員会

〒631-8502 奈良市山陵町1500 奈良大学 広報室内 TEL 0742-41-9588

印刷 共同精版印刷株式会社

〒630-8013 奈良市三条大路2丁目2-6

奈良で学ぶ贅沢



主催 奈良大学·奈良県